

建築と社會

9

日本建築協會

第25輯 第9號

昭和17年9月1日

三星印



設計

施工

三星印岩綿製品

防音・保温・耐火装置

三星岩綿^{パザール}ブロック構成の防音装置は爆音に耐へる吸音率を有す

大阪市北区中之島五ノ三〇

大阪田島應用化工株式會社

電話土佐堀(44) 1323.5682.6221.7294

東京市神田區錦町二丁目四ノ一

三星産業株式會社

電話 神田(25) 四三九七番

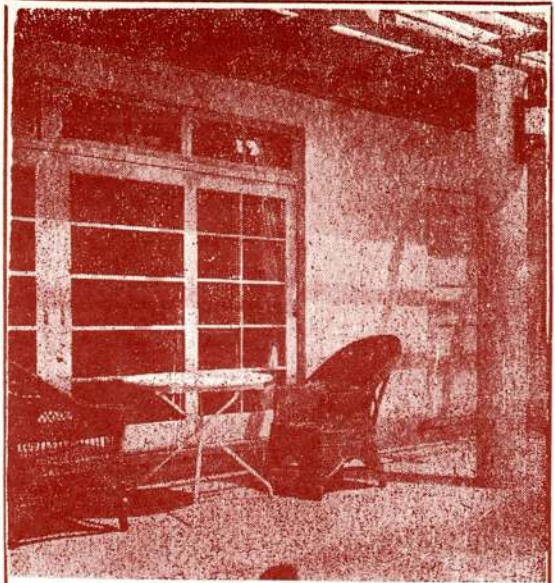
株式會社 株式會社

竹中工務店
滿洲竹中工務店

本店

營業所

大阪市北區中之島朝日ビル
電話北濱一九一
番
新東京特別市順天區吉林大路三〇四號
電話新東京四三四二番
東京、名古屋、神戸、京都、福岡、橫濱、新東京、奉天、北京、天津、青島、上海、京城、安東



寧樂屋家具裝飾店

大阪市西區南滿江通1丁目43番地

(木部部電音書)

電話加 2663・7932



日英米特許及實用新案登錄百數十件所有

大野式防火捲上ヶ戸

〔特許大野式シャッター〕

主要製品

大野式シャッター
大野式ループルシャッター
大野式融金付自動開鎖戸
大野式工場用軸承
大野式轉子入軸筐・戸車
各種防火扉・鋼製建具類
應用特殊機械類設計製作

株式會社 大野製作所

本社 { 東京市芝区三田四國町二番地
三田工場 { 電話三田(45) 3737・3738・3787
板橋工場 東京市板橋区志村町一五九二番地 電話赤羽 2768・3272
大阪詰所 大阪市此花区上福島中二丁目六十番地 電話福島 49588



株式會社

大林組

大阪市東區京橋三丁目七五
電話東(94)八六〇(6)五四〇四(6)

支店 東京、名古屋、福岡、京城、北京

營業所 廣島、仙臺、札幌、臺北、天津
青島、張家口、上海

工作所 大阪、東京

建 築 と 社 會

第25輯 第9號 昭和17年9月發行

九 月 號

目 次

敵 性 國 家	小 田 島 兵 吉 (1)
龍宮・蓬萊宮・魚鱗宮	石 川 純 一 郎 (6)
日本建築家の模倣する力と創作する力	山 田 守 (10)
支那料理・支那芝居・支那建築	尾 崎 久 助 (12)
風 通 し	藏 田 周 忠 (16)
新 京 雜 信	澤 島 英 太 郎 (18)
雜 談	中 尾 保 (22)
大 地 の 歌	内 田 祥 文 (24)
ことばと時流	龜 井 幸 次 郎 (28)
工業教育から學制改革案へ	中 尾 ト 堂 (32)
新興木構造の理論と實際	宇 賀 神 行 一 (35)
木材統制の概要	市 原 彌 太 郎 (39)
大阪市に於ける木材の供給に就いて	白 石 英 夫 (44)
慰 靈 祭 記	尾 龜 清 四 郎 (48)
☆紫 煙 室☆	
蜷川光太郎君の事ども	東 畑 謙 三 (51)
☆寫 眞 欄☆	
安宅商會天津支店長社宅及獨身寮	
會 報	(53)

會 告

創立廿五年記念第三回見學通知

廿五年記念第三回見學旅行は豫告の通り爽涼の九月下旬を期して下記に依り播州路に於て開催いたします。赤穂の地は歴史に劇にあらゆる方面より餘りにも有名な史蹟で今更茲に御紹介する何ものもありませんがたゞ當日は忠臣義士の面影を偲びつゝ神社や寺を訪ね更に近頃見難き最新式装置成れる同地製鹽工場をも見學する事が許され誠に好機會と存じます。何卒奮而御申込みあらん事を。

第 一 班

日 時 九月二十四日(木) 秋季皇靈祭

京都	發	午前	五時三六分	} 赤穂着十一時一分
大阪	"	"	六時二一分	
神戸	"	"	七時〇七分	

集合場所 赤穂驛前 直に乗合バスにて大石神社に向ふ

見學所 大石神社 參詣祈願後城址を経て華岳寺に至り中食、食後住持片山伯仙氏の講話あり、夫よりバスにて途中鹽田を視察しつゝ赤穂合同製鹽工場に至り同工場及製鹽實況を見學す。

解散 凡四時頃バスにて赤穂驛に至り解散、但し車中夜食として簡單なる辦當を渡す

會費 金貳圓 也赤穂に於けるバス、中食夜食雜費共 但往復汽車賃自辦の事

第 二 班

日 時 九月二十三日(水)

京都	發	午後	零時三三分	} 赤穂着五時〇五分
大阪	"	"	一時二一分	
神戸	"	"	二時〇一分	

集合所 對鷗館 赤穂御崎

座談會 集合所にて大石神社社司飯尾巖夫氏より同社由來につき講話後同社及義士の事共につき座談會を催す。

懇親會及宿泊 上記終了後對鷗館にて懇親晚餐會開催後一泊す。

見學 二十四日午前九時頃旅館發赤穂驛前に至り第一班と合流行動を共にす。

解散 第一班と同様

會費 金拾圓也 赤穂に於けるバス、中食、晚餐會、宿泊、歸途夜食代雜費共但往復汽車賃自辦の事

申込方法 第一班、第二班共會費前納(振替大阪三九九七五番其他方法にて)拂込方法記入の上ハガキにて九月十八日迄申込の事。但し豫定人員に達したる時は先着順により締切ります。申込後不參の場合にても會費の御負擔願ひます。

往路	京都發	大阪發	神戸發	有年發	赤穂着	歸路	赤穂發	有年發	神戸着	大阪着	京都着
前	5.36	6.21	7.07	9.18	10.01	後	1.39	3.31	5.08	5.45	6.36
後	—	8.20	8.56	11.11	11.55		3.18	4.41	6.45	7.24	—
	0.33	1.21	2.01	4.23	5.05		4.43	5.38	7.08	7.45	8.27
	1.45	2.32	3.09	5.12	5.42		5.41	6.46	8.38	9.15	9.56
	2.30	3.13	3.50	5.58	6.44		7.03	8.04	10.30	11.15	—
	3.30	4.14	4.50	7.04	7.47		8.21	9.21	11.21	11.59	0.50

參考 大阪赤穂間三等汽車賃片道約金參圓也

九 月 一 日

社團法人 日本建築協會

防空講演會と展覽會開催の件

本年度記念事業中重要事項の一たる『防空講演會』『建築と防空展覽會』を下記の通り開催可仕候に付き開催地方在住の會員諸賢は 開催當日萬障を繰合せ知己御勧誘の上多數御來場あらん事を熱望仕候 尙本催は昨年來計畫中のものにして本會の尤も力を傾注せるものにつき 此際各位は一般にも擴く宣傳の上充分の成果を收め得る様御援助賜度候

都 市 防 空 講 演 會

開 催 地 (月、日、曜)	(會場)	司 會	開 會 時	協 會 員 ・ 講 師	軍人・名士 記者・映寫	後 援
廣 島 9月21日(月)	廣島商工 會議所講 堂	地元幹事	廣島縣技師 宮脇 晴美	東京工業大學教授 工學博士 田邊 平學 神戸高等工業學堂 教授 瀧澤 眞弓	中國新聞 從軍記者	中國新聞社 ・ 廣島支部 縣防空協會 建築學會廣島支部
小 倉 9月22日(火)	朝日講堂	同	福岡縣縣長 池口 凌	同 同	映畫 戦ふ日本 シリーズ 「一億防空」 スパイ撃滅 ニュース	西部軍司令部 福岡縣支部 建築學會九州支部 朝日新聞社 西日本新聞社
福 岡 9月23日(水)	西日本新聞 社講堂 (元福日 講堂)	同	同	同 同	同	同
京 都 9月28日(月)	朝日會館	同	京 都 府 建築課長 松井清之助	東京工業大學教授 工學博士 田邊 平學 内務省防空局 施設課長 井上 新二	舞鶴海軍人事部 海軍少佐 福元 秀盛	朝日新聞社 ・ 京都府 舞鶴・鎮守府
名 古 屋 9月29日(火)	同	同	愛 知 縣 建築課長 玉置豐次郎	内務省防空局 施設課長 井上 新二 代議士 池崎 忠孝	(映畫) 防空關係 ニュース	建築學會東海支部 朝日新聞社 防空協會愛知支部
神 戸 10月6日(火)	海員會館	同	兵 庫 縣 建築課長 山内嘉兵衛	日本建築協會々長 工學博士 片岡 安 内務省防空 研究所長 中澤誠一郎	代議士 池崎 忠孝	神 戸 新 聞 社 ・ 縣支部 縣師團支部 海軍人事部 防空協會兵庫支部
大 阪 (10月7日(水))	朝日會館	同	大 阪 府 建築課長 堀井 啓二	同 同	同	朝日新聞社 ・ 中部軍司令部 大阪師團支部 大阪府・師團市府

○各地トモ午後6時ヨリ午後10時頃迄ノ豫定

建 築 ト 防 空 展 覽 會

主催 社團法人 日本建築協會 後援 中部軍、大阪師團各司令部
大阪府、大阪市、朝日新聞本社

會期 自九月二十九日(火) 六日間 午前九時ヨリ午後六時
至十月 四 日(日)

會場 株式會社 大 丸 (大阪心齋橋)

展示内容 { 第一部 住宅防空 第二部 都市防空 第三部 建築的防空
第四部 防空資料 第五部 協會廿五年記念展

○大阪閉會後十月下旬京都大丸支店ニ於テモ開催豫定

會員名簿調製に就て

昭和十八年度用會員名簿を近く調製致します。就ては十七年度用名簿に掲載以降住所、職業、勤務先、電話等御變更の向でまだ御通知洩れの方は九月三十日までハガキ其他の方法で御通知を願ひます。

- ◎ 御通知なき向は前年通りに掲載致しますから御含み下さい。
- ◎ 從來返信用ハガキを會誌に添附御通知申上げて居りましたが紙材の關係其他により本年は之を省略致しますから不懇御了承願ひます。
- ◎ 尙次年度よりは名簿の單獨發行は困難の事と存ぜられますので今回發行の名簿は數年御保管を願ふ事となる見込であります。就ては今回の分は一層正確を期し度いと存じますので御了承願ひます。
- ◎ 本名簿發行後の新入會者や異動等整理方については改めて御知らせ致します。

會勢幹事會九月見學會

爽涼の秋が訪れて参りました。皆様益々御健昌の事と存じます。

當幹事會主催の九月見學會としまして、下記の通り素晴らしい企てを、秋風に添へて皆様に御送りいたします。

扱鍛鍊の夏も過ぎ、海に山に鍛へた旺盛なる體力を以て、吾々は先づ眼を空に向ける事にいたしました。時局下最も吾々が關心をもつ航空知識の涵養と天體の神秘を、秋しるき生駒山頂高原に尋ねやうと云ふこの企は、必ず皆様の御賛成を頂く事と信じます。万障繰合せ御參會の程切望いたします。

時 九月二十日（日）午前十時集合（晴雨不論
時間勵行）

集 合 處 生駒山上、ケーブル終點前

見 學 場 處 （生駒山上）

（イ）航空道場（ロ）滑空場（ハ）青年道場（ニ）京大天文臺
講師何れも交渉中

會 費 不要（但交通費自辨）

上六ヨリ生駒マデ 片道 四十錢
生駒ヨリ山頂マデ（ケーブルカー）片道 三十錢

畫 食 各自携帯の事

申 込 方 法 ハガキにて折返し本會宛御申込の事

締 切 九月十五日限り

◎猶時間の餘裕があれば山麓の生駒神社、鶴林寺趾、行基菩薩墓等見學の豫定。

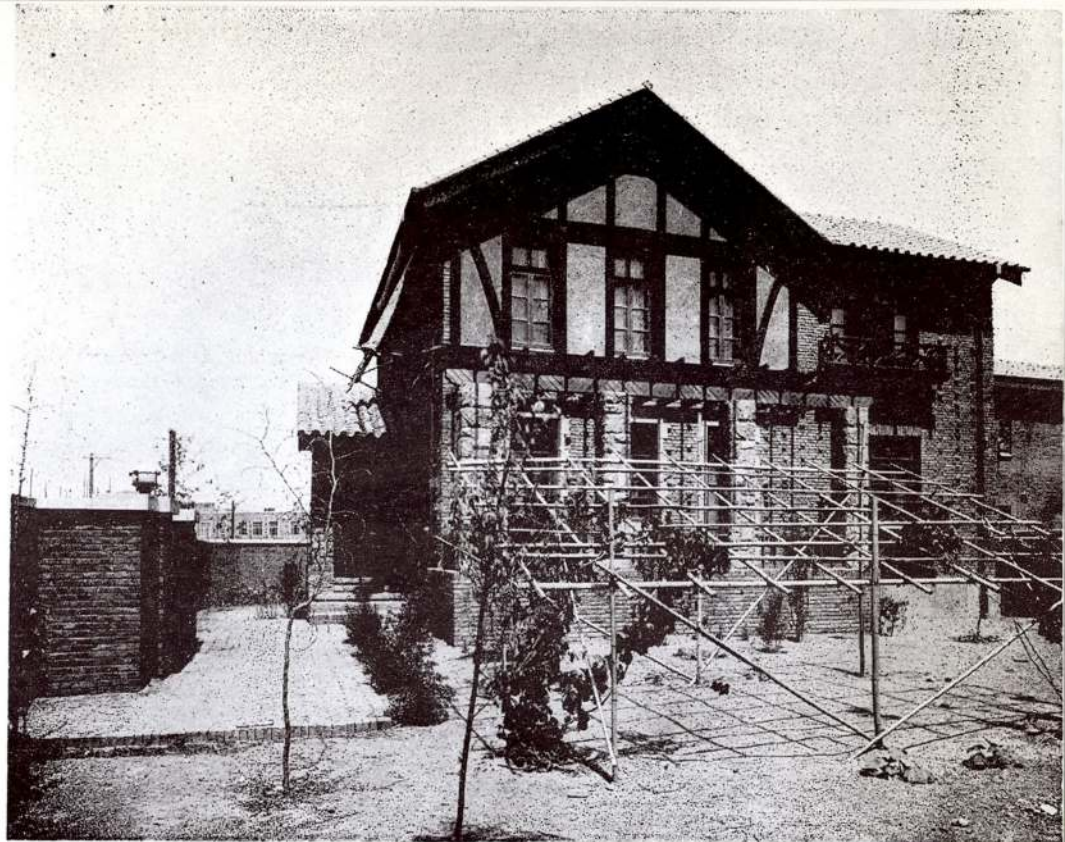
◎參加者は會員、終身賛助員並特別賛助員に限ります。

◎豫而御願の記念事業の一たる會員倍加は是非々々全會員各位の絶大なる御援助により貫徹いたし度格別の御配慮願ひます。

◎本見學會は九月例會を兼ね舉行致します。

社 團 法 人 日 本 建 築 協 會

東南側
外觀



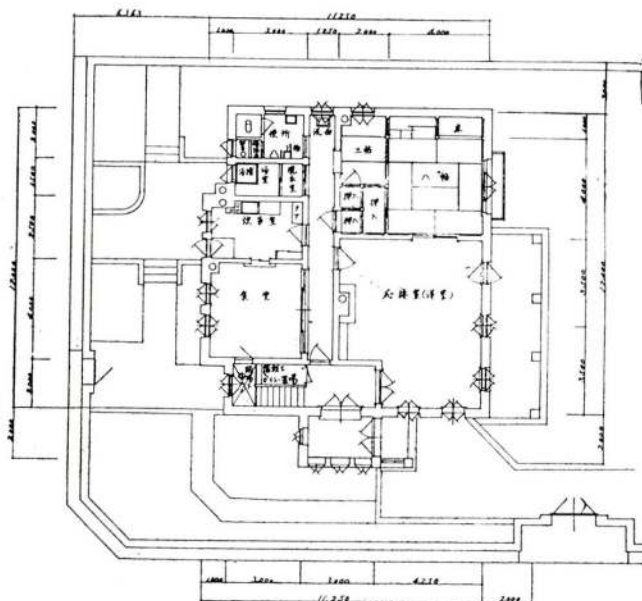
安宅商會天津支店社長宅

設計監督

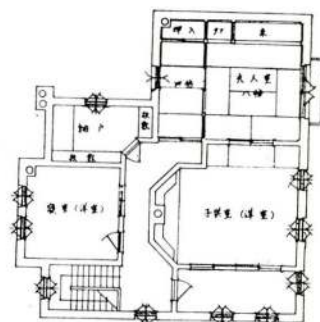
石川寛三建築事務所

施工

株式會社清水組天津支店



第1階平面圖
(135.500^{m²})

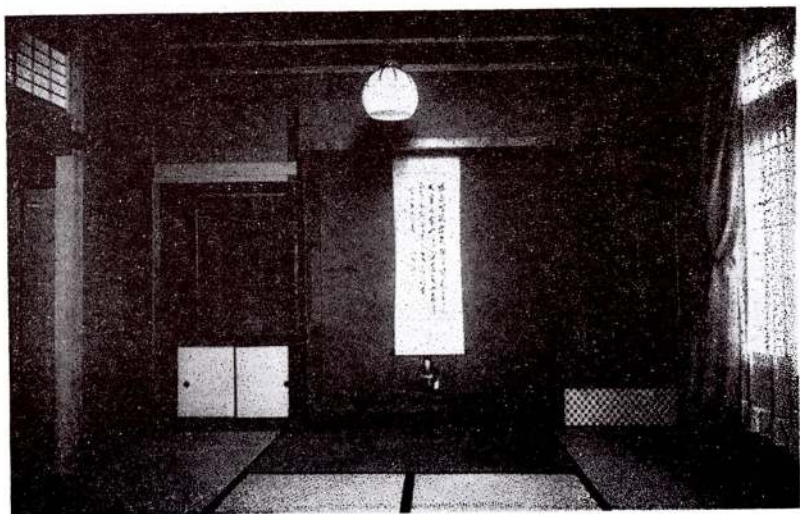


第2階平面圖
(112.125^{m²})

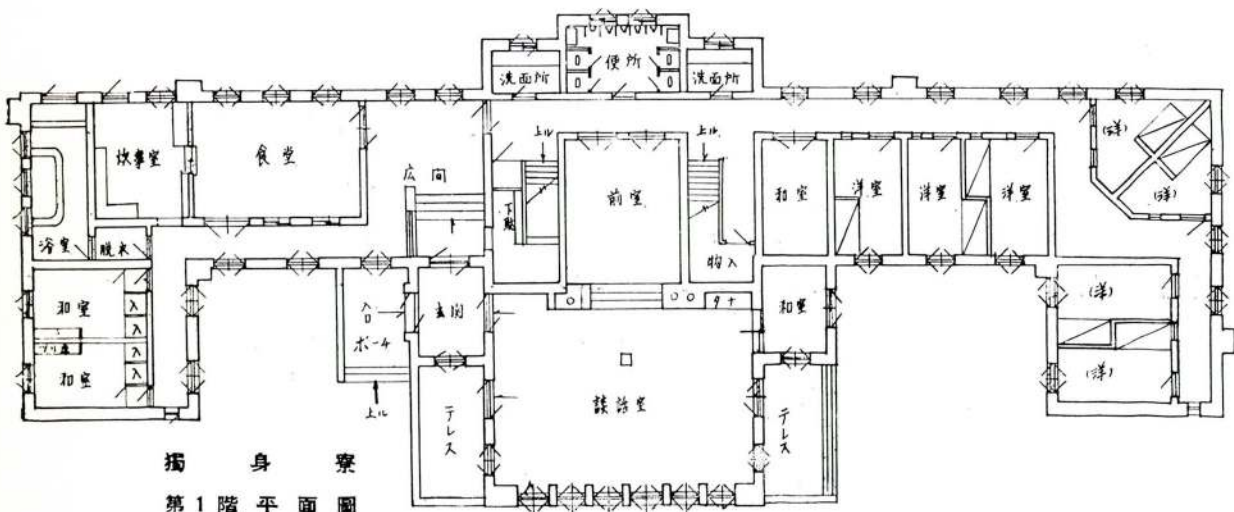
煉瓦造2階建



支店長社宅
應接室

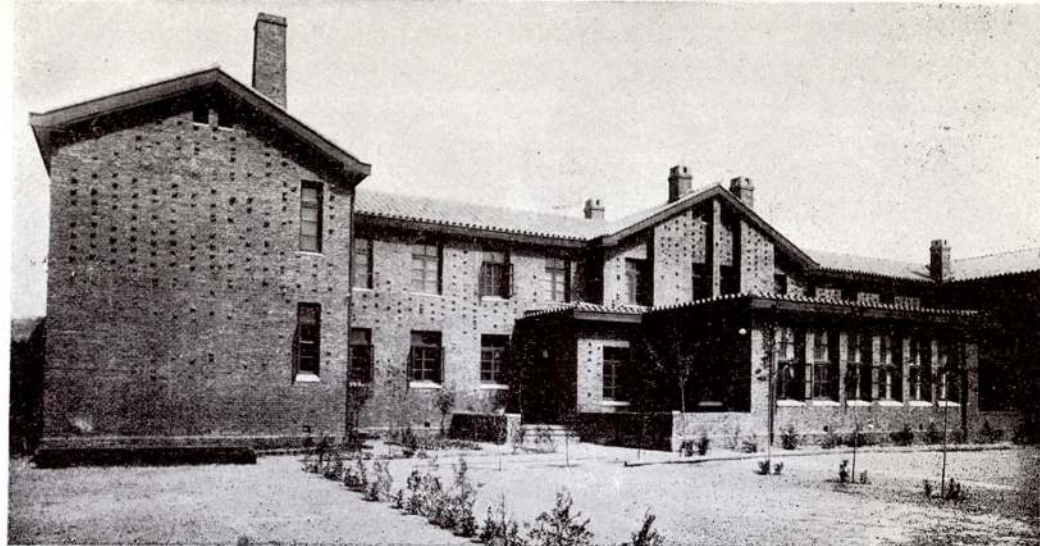


支店長社宅
和室居間



獨身寮
第1階平面圖
(560.18^m2)

寮側觀
身南
獨東外

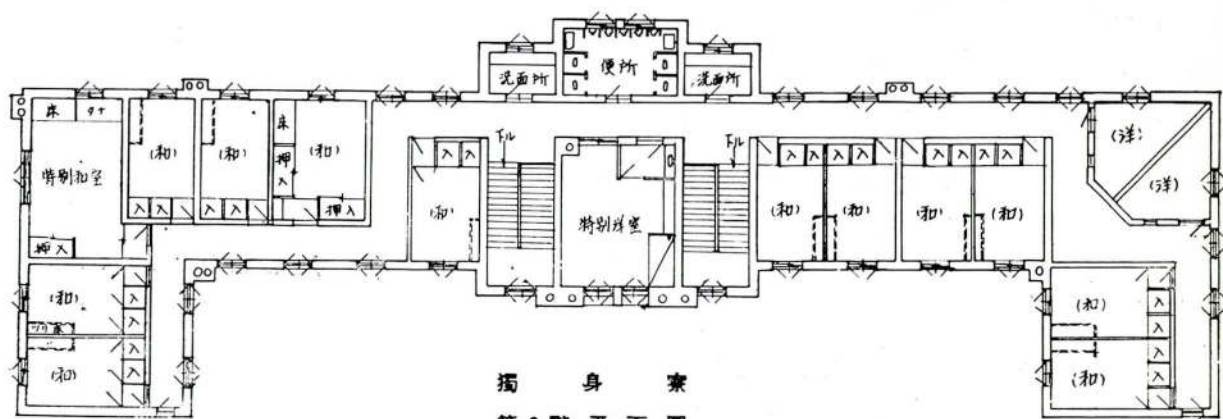


安宅商會天津支店

獨身寮



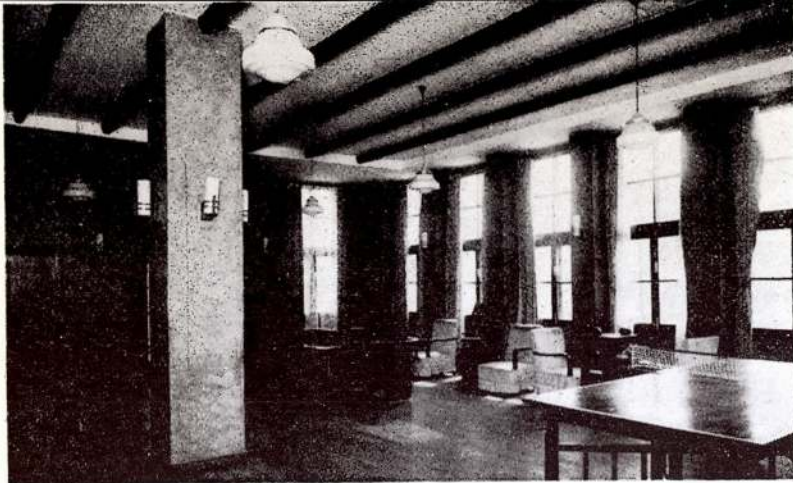
寮身寮
談話室



獨身寮

第2階平面圖

(442.68^{m2})



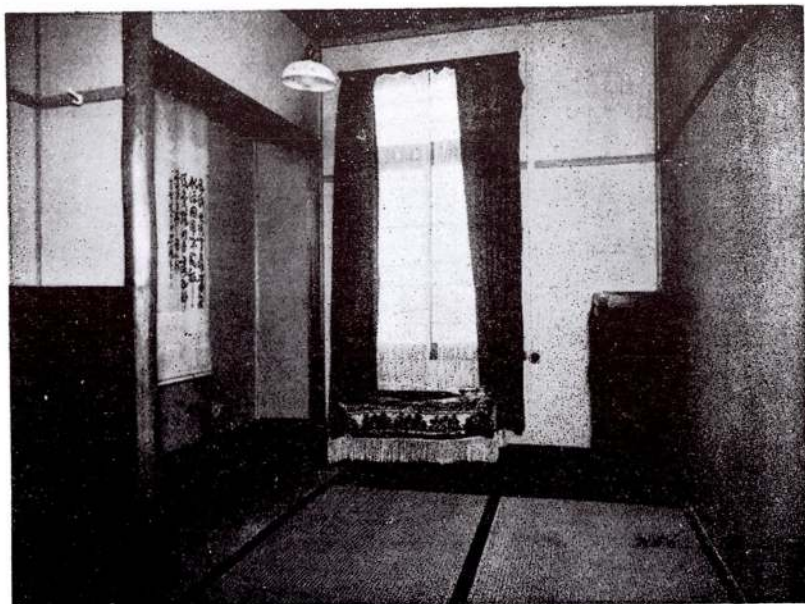
安宅商會天津支店

獨身寮

娛樂室

起工
昭和16年7月
竣工
昭和17年5月

洋風舍室



設計監督

石川寛三建築事務所

施工

株式会社清水組天津支店

和風舍室

前 書

軽快な讀物を書くのは私の柄ではない、だからこれを期待して貰つては、讀んだあとでガツカリする。

今から17年前の古い話。

桑 港

Hは中學校入學以來10年間以上も英語を學び續けたのにも拘らず、書くことは勿論、讀むことすらなかなか容易でなかつた。まして話すなど云ふことは全く考へも及ばないことだつた。それが何の因果か今から17年前の11月下旬、S氏とサンフランシスコに上陸する羽目になつて、M商事會社の世話で一流の大きなホテルに泊らざるを得なくなつたのは、その時のはづみで仕方がなかつたとも云へるが、思ふ事が云へぬもどかしさに、翌る日早々、うす汚い日本人經營のOホテルに移つて、やれやれとやつと落付いたのである。

大體Hの渡航目的は建築の視察と云ふのであつた。ところがHは學校こそ建築科に席を置いたのであつたが、あまり建築に興味を持つて居たわけで無く、高等學校時代に、土木建築に進むものは化學の實驗が無いから、その時間だけよけい遊べると云ふ呆れた理由で建築を撰んだのであつた。従つて、Hの建築に對する理解とか、設計の腕前などは誠に哀れなものと云はなければならなかつた。それでも表向きは建築視察であるから、1日に一べんは建物を見て歩いた。或る日HはS氏と一緒に坂道のある工事現場へ突然入つて行つた。看板にはH・Dビル建築場と書いてあつた。

肝心なことや、こむづかしい事はS氏を前に押し出して云つて貰ふつもりである。

見ず知らずの、毛色の變つた、どここの馬の骨かも知れないのに、兎も角も二人を事務所に通し

て、何の用かと聞いた。S氏の英語だつて随分怪しいものだが、年をとつてゐるだけ圖々しく『我々は、はるばる日本から來たものだが、差支なかつたら一應工事場を見せて貰ひたい』と答へた。勿論紹介状も何もあつたわけでは無いから、ことはられたらそれ迄だが、ともかく當つて見ると云ふわけである。

ところが、アツサリ『オーライ』と來た。いづれ現場は案内するが、先づ圖面を見て貰はうと云ふことで、青寫眞を持ち出して來た。

高さ地上24階建300尺地下2階とある。Hはフンフンと云ひながら、半分判らないながらも説明を聞いた。地下2階であるが、地盤が粘土だから防水層をやらぬと聞いて、ハテナと思つたり、地上24階建の最下層の柱が、鐵骨ではあるが、2尺角で納つてゐるのを見ては、コレハコレハと思つたり、床及び外壁こそ鐵筋コンクリート造だが、内部間仕切はすべて3吋厚の空洞煉瓦であるのを見てドウカなど考へたり、狐によく似た監督の顔を眺めたりした。立面でシンメトリーになつてゐるのは半分しか畫いてなく、あとはアウトラインだけの青寫眞を見ては、これでもいいのだと思つたりした。エレベーターは何臺あるの、床や壁の仕上はどうだのと云ふのを上の空で聞いて居ると、時計を出して眺めたその監督が、急にソワソワして

『實は現場をよく案内してあげたいのだが、今日はスタンフォード大學とカリフォルニア大學とのフットボール試合があつて、もう開始の時刻が迫つてゐるので、ゆつくりして居られぬ。代りのものに案内させるからよく見て行つて貰ひたい』と云つて、あはて上衣を引かけて、飛出して行つた。それをニヤニヤしながら見送つてゐた隣の男が『では案内をしませう』と立上つたので、Hと

S氏はその跡について、工事中エレベーターに乗った。

上部の方はまだ鐵骨を組立てゝゐた。中ほどでは間仕切のホーブリックを積んでゐる最中で、附帯設備のパイプ類を配置してゐた。下部の方では、内部は左官にかゝつて居り、外部はタイルやテラコッタを貼つてゐた。300人位の職人があちこちに散らばつて、監督がフットボールを見てゐる時間を、一生懸命働いて居た。

『材料は』その監督代理の男が云ふのだ。『材料は毎朝早く、その日に使ふだけの數量を持ちこむのです。』

なるほどさう云へば、方々の現場では朝早く、日の出ないうちからトラックが、セメントや煉瓦やその他の材料をデリツキでつり上げてゐるのをHは思ひ出した。Hたちの泊つてゐるOホテルの窓からも、よくその光景が見えた。これは現場附近が建て込んでゐて、どこも材料置場などを設ける餘地は無いのである。だから朝早く街の交通がはげしくならない前に、大體の見當で1日分位を各々仕事をする位置に持ちこんで置くのである。1日分以上の材料は、作業を妨げる。

Hは自分の國の雜然たる作業場や、必ず無ければならんと思はれてゐる下小屋などの事を思ひ出したが、これは國情が違ふんだから仕方がないのではないかな、と考へた。ボンヤリそんな事を考へて歩いてゐるうちにHは折角左官屋が奇麗に塗り均したばかりの床に踏み込んで、大きな靴跡をつけてしまった。あはてゝこれは失禮とあやまつたが、左官屋は『オーライ』と答へて、無表情に而も無造作に又奇麗に均してしまつた。

事務室にかへつた監督代理は、何かもう聞くことはないかと問ひ、何もないと答へると『メデイシンは如何だ』と云ふ。その意をとり兼ねてモヂモヂして居ると、机の抽出しの中から黄褐色の液體の入つてゐる平たい瓶をとり出し『メデイシン一杯どうだ』と繰返した。

その當時アメリカでは禁酒法が施行されて居て酒類は一切販賣、運搬が出来ない事になつてゐたのだが、手元にあるのを飲むのは差支へないと見えて、彼は今にもその瓶の蓋に注がうとした。メチルアルコールなど飲まされてたまるものかと、

HとS氏とは現場の埃も拂はず外へ出てしまつた。

街のラジオは大聲で、スタンフォード大學とカリフォルニア大學とのフットボール試合の實況を怒鳴り立てゝ居た。

市 俄 古

Hはロサンゼルスから4日も汽車に揺られ續けて、からだは疲れ、多少風邪きみだつたのが、凍りついてゐるシカゴに来て、とうとう發熱してしまつた。Lホテルの17階の一室のベッドに伸びてしまつたHは、遙か下の方から響いて来る電車や自動車などの物音から、廊下を歩く泊り客の足音まで、ボンヤリ聞くとともにしに聞いて居た。見知らぬ異郷に来て病氣になつて寝こんでは大變だぞと思ひながらも、醫者に診て貰ふのも厭で、自分の國から持つて來た風藥を無理にのみ込んで、ほろけた様に天井を見てゐる光景は、我ながら情けなかつた。思ひ出すともなく、いろいろの事が、頭の中を往來した。

ロサンゼルスの日本人がアメリカ人のことを白人々々と呼んでゐることや、その白人の人相の悪い奴がジロジロと自分の顔をのぞき込んだことや小さい目球の青い子供達が、ジャツプジャツプと小聲で囁きながら、跡をつけて來たことなど厭な感情を伴つて思ひ出されて來た。

小奇麗な建物や住宅など澤山あり、街も美しく郊外のそこゝの垣根には名も知らぬ赤や黄の花が咲き、氣候も申分が無いのにも拘らず、Hはロサンゼルス全體に對して下等な、嫌惡を催すものを認めた。汽車で入つたシカゴはとても小汚なかつた。どの建物を見ても灰色によごれて、街はたゞさへうす暗いの、高架線が通つてゐて、いよいよ陰鬱だつた。もう12月にもなつて、午後の4時半には日が落ちてしまふのに、方々の煙突の吐く煙は一層街を暗くした。こんな汚い、物凄しい街でもロサンゼルスよりはまだましだとHは考へた。

シカゴへ来る途中、グランドキャニオンで見た生き残りのインディアンの踊りを見て、國を奪はれた哀れな民族に涙を流したことや、そこにある観光ホテルのエレベーターのボーイが、日本人だつた事などを思ひ出して、Hはムカムカするもの。

を感じた。チラと父の顔も浮んで来た。

『ホームシックかも知れんぞ、何糞ツ』

Hは暗くなつて、時々窓に觸れては解ける雪を見ながら、熱と疲労とにもうろうとなつて、看護人もなく、眠つてしまった。

Hは眠りながら夢を見てゐた。

大きい四角い柱の蔭の卓食に坐つてHはあたりを見廻してゐた。言葉が判らない爲に、人目につかない隅の方に引込んで、放心したやうに、そのくせ何だか落付かない氣持で、上を見たり、下を見たり、ガヤガヤ歩いて行く人達を見たりして、目の前に運ばれたコーヒーに手も觸れなかつた。大きな立派な彫刻がのしかゝる様に突立つてゐた

粗い石とタイルで飾つた壁や、植木や花を盛つた石の鉢や、いやに横線の多い壁の仕上方に、Hはやつと職業意識を働かしかけた。どうも見た様な建物だつた。天井からは蠟玉をたくさんくつ付けた様な電燈が下つて、赤や緑やいろいろの色で室内を照してゐたし、その下を奇麗な服装をした男女が、思ひ思ひの格好で往來してゐた。一べんも見たこともなければ、これから又永久に會ひさうもない人間ばかりだつた。

『東京帝國ホテルではないかしらん』とHは考へた。しかし此處は日本ではない。

どこからともなく黒ん坊の給仕が突然目の前に立ち現はれて

『あなたは日本人か支那人か、今朝こゝに支那のプリンスが着かれた筈だが、あなたはそのプリンスと違ふか』

『何だつて、私は日本人だ』

ニヤリと白い齒を見せたかと思ふと、黒ん坊の姿は消えてしまった。外は雪が降つてゐると云ふのに、室の中の暑さはたまらなかつた。

『私は熱いコーヒーなどよりも、アイスウォーターが飲みたいのだ』

Hは給仕の姿をさがしたが見えなかつた。大きな聲で呼ばうと思つても聲が出なかつた。だんだんイライラして来た。箱根細工の様な柱飾りやパネルの模様がひどく癪にさわつて来た。ザラザラしたタイルの表面が、たまらなくなつて来て、必死の力で『水ツ』と叫ぼうとすると、直径3尺も

あらうかと思ふ顔が現はれて

『どうだね、これは私の作品だが、氣に入つたかね、私はライトと云ふ者だよ』

と云つたかと思ふと、映畫のフィルムが中斷して、映寫幕が眞白にチラチラと光つた時の様になつてHは目を覺した。

ビツシヨリ汗をかいて、のどが熱の爲にヒリヒリしてゐた。

Hは翌くる日も、とうとう熱で頭が上らなかつた。4,5日たつてから外出の歸りに、ワシントン公園を通り抜けて、偶然ライトのミドウェー・ダンシング・ガーデンを見つけた。夢の中の建物はこれだつた、とHは苦笑した。雑誌で見知つてゐたのだが、實物を見て、全くガツカリした。スケールを間違へたのではないか知らんと目をこすつて見た。何しろコチヤコチヤしてゐる。おもちや箱を引くり返した様だ。等身大か或はもつと大きいと思つてゐた彫刻が、何と3尺位で、然も人造石で毒々しく塗つた緑とか、赤とか黄色とかの原色に近いペンキが剥げかゝり、厭らしく、所々欠け落ちて居り、場末のカフェーと云つた感じだつた。デザインが變つてゐるの何のと云つたつて、材料が悪かつたら見られたものでは無い。おまけに屋根の上に赤い球があつて、それにサボテンの様に電球を植えてあつて、夜になつたら灯すのだらうが、あまりの見すばらしさに、Hは内部を見やうと云ふ希望を失つて、日暮れの街を、ライトの顔を思ひ出しながら、何だか淋しくなつて、無茶苦茶に歩いたのである。

その當時、ライトは何かの件で、監獄に放り込まれてゐるといふ噂だつた。

紐 育

自分の立つてゐる地面の遙か底の底に故郷があつて、頭を下にして自分の知人達が歩いてゐる、と云ふ様な子供らしい考に思はず可笑しくなりながら、Hは朝まだ早い街を中央公園の方へ歩いて居た。夜中に降つたと見えて、家も歩道も、街燈も、雪に白く美しく光つてゐた。

Hはひまさへあれば美術館に行くことにして居た。アメリカ人が金にあかして、世界の各地から

掠奪して來た畫や彫刻がたくさん陳列されてゐるのを見るのは癪にさわるが、美しい藝術品を見ることは、異國にあるHの心を和げて呉れた。

その日もHは美術館に行かうとしてゐた。

さて街角を曲つた途端、Hは人間が建物の腰石にもたれ、兩足を歩道に投げ出し、蒼い顔して、目を閉ぢてゐるのを見た。こめかみから眞紅な血が流れて、雪の上に斑點をつくつてゐた。

『死んでゐるのか知らん』

Hはどきりとした。よく見ると息をしてゐる。どうやら法にかくれて、こつそり飲んで酒に酔つぱらつて、夜中ぼつき歩いて、そこら邊でころんで怪我をしたらしい。時々フーツと酒臭い息をはく。やゝ安堵したHは、その見も知らぬ得體の知れぬ人間を見つめて居るうちに、氣味が悪い事も何も忘れて、何か繪でも見てゐる様な氣がして來た。どうやら不健全であるが、こんな奇麗なものはアメリカに來て以來まだ見たことが無い様な氣がする。眞白い雪の上の血や、晴れ上つた碧空の下の黒い建物にもたれかゝつた蒼白な顔や、白いワイシャツの上の赤いネクタイ、血の斑點。そんな繪がレンブラントか誰か畫かなかつたか知らん。アメリカ中の建築をあつめて見ても、この光景には及ばないだらう。實際Hはその時、さういふ風に感じたのである。精神状態がどうかして居つたのかも知れない。

途中で偶然出遇つたM物産のU氏にこの事を云つたら

『なアにそんな下らん光景はチョイチョイありますよ。やつぱり密輸の酒は質が悪いんでね。』と事もなげに云つたものである。

その朝Hは電車が日の丸の小旗をヒラヒラさして走つてゐるのを見た。日本の國旗を何のために立てゐるのだらうか。誰か日本から有名な人でも來て、その歡迎のためだらうかと不思議に思つた事をU氏に話したら

『あゝあれですか、あれは今日雪が降つて、氷が張つたので、アプタウンの××でスケートが出来るといふしるしなんですよ。』

『そんな事に日本の國旗を使ふといふのは怪しからんですね。大使館あたりから抗議は出ないものでせうか。』

U氏は別に何とも答へなかつた。

Hはだんだん、アメリカなんて語らん所だと考へ出して來た。初めて=ニューヨークに着いた時の壓倒される様な感覺は何處へ行つたのだらう。中央停車場に着いて、何處をどう通つてPホテルに行つたかまるで見當がつかなかつた。

『大きいなア』

と思つたのである。10階位の建物は低く見えて仕様がなかつた。さすがシカゴなどゝ違つて明るく爽快に感じたのであつたが、さういふ感じが一日一日とうすれると同時に憎惡の方が一日毎に嵩まるのをどうすることも出来なかつた。

Hが見て廻つた建物にしろ、たゞ如何に金を掛けたか見てくれと云つた様なものが多かつた。床には大理石が敷きつめてある。壁には金箔や銀箔を置いたものもある。彫刻も金ピカであるし、柱など伊太利産の高價な大理石の一本石でやつてゐる。どうだ、これでもかと云ふ様な厭らしさに、Hは嘔吐を催さうだつた。デザインなんかどうでも、材料の立派さで押通してゐるアメリカの建築家の氣持に一應は同情しながら、やはり心の底には同感し得ないものがあつた。

デザインの貧困を材料で救ふのは情ない。Hはさう思ひ込んでゐたが、しかしそれはHの見違ひであつた。立派に見えた大理石が、實はイミテーションであつたりして、ベテンにかゝつた様な氣がしたHは、それをほんものだと思つて、いやしんだその氣持を倍にして、更に輕蔑した。

『なアに大きいだけだよ。金があるだけさ。』

S氏もその點Hに同意を示した。建築については、我々はアメリカから何も學ぶところは無い、とHは自分の智識を棚にあげて、S氏と話し合つた。

建築のみならず、全般的にアメリカは最早行きづまつてゐる。このまゝ経過したら、ローマ帝國が滅亡した様に、自壞作用をおこして、亡びてしまふだらうとさへ思つた位である。

Hは或る時、運動競技場設計の權威(?)だと云はれてゐるG・Hといふ男を訪ねた事がある。

こう云ふ計畫を持つてゐるが、差支へなかつたら意見をきかして呉れ、何か参考になる様な圖面でもあつたら見せて呉れと頼み込むと、若いHを

見下して、何をこの青二才めがといふ態度で、そんなことは簡単に云へるものではない。その計畫の分け前を寄こすなら相談にも乗るし、設計のアドヴァイスもしやう、圖面も何も見せる様なものは無いと木で鼻をくっつけた様なあいさつだつた。それではあまりあいそが無いとでも思つたか、歸りがけに、レコードかフオーラムかに發表した拔萃のプリントを一部呉れた。

『これがアメリカ流といふのだな』

Hは歸りの地下鐵の中で、大勢の人間と押し合ひへし合ひしながら呟いたのだつた。

『それにしても、この人間の数の多いことはどうだ』とHは今更の様に身のまはりを眺めた。

地下鐵の混雜は正に殺人的だつた。車がプラットフォームに入つて來ると、鯉が池の中で鯢に食ひ付く時の様に入口めがけてもり上る。地下鐵ばかりではない。土曜日の午後などのフィフスアベニューの雜踏なんか見ない人には話も出來ぬ位だ何の用事があるか知らないが、ゾロゾロ歩く人々やおとむらひの行列の様につながつてノロノロ走る自動車、トラック。實際、自動車に乗るよりも歩いた方が早い。この交通機關の異常は、アメリカ當局の頭を悩ましてゐる問題であつた。こゝも行詰つてゐる、Hはさう思はざるを得なかつた。(大東亞戰爭が始まつてガソリンの統制をうけて

ゐるアメリカのあはて方が見える様である)。

Hは毎日毎日、厚いオーバーを着込んで、建物見物や御意見拜聴に出て歩くことに漸く飽いて來た。

『建築なんかつまらん、古本屋でもあさつた方がよっぽど面白い。』

こう云つてHは本屋へ出かけて行く日が多くなつた。ボストンの本屋ではレーン譯とバートン譯と2種類のアラビヤナイトを買つて來たり、フリーメイソンの歴史を書いた大部の古本を宿へ送らしたりした。今でこそ大したこともないが、17年前のその頃では、まだバートン本なんか日本の本屋では珍しい方だつた。

だんだん出無精になつて來て、宿屋でベッドの上に寝そべつて、ボンヤリしてゐる日が多くなつた。

或る雪の日、Hはブロンクスの動物園に行つて見た。北極熊が寒さに拘らずグウグウ眠つてゐた。

栗鼠がチョコチョコ人の姿を見ると出て來て、何か呉れるかと待つてゐる様である。都會地では殆ど見かけなかつた雀も、人の姿を見ても逃げもせず、ジツとしてゐる。

イライラしてゐたHの心はやつと和いで、思はずため息をついた。

昭17—8—7

(筆者は株式會社大林組勤務)

會旗圖案懸賞募集 締切期日延期

本協會會旗圖案懸賞募集を發表するや多大なる感興の下に續々應募作品が到着して居ります。就いては皆様の御熟意により締切日を下記の通延期致しました。一層の御應募を希望致します。

締 切 日 8月31日を 9月30日午後3時迄に 期

募 集 規 定 本誌7月號及8月號會告參照

社團法人 日 本 建 築 協 會

日本古來の傳説々話中「浦島子」の物語は最も一般に普及した代表的説話の一である。「浦島太郎」の童話、童謡として三歳の童子にも親しまれ來つたと同時に、能の謡曲の番外、脇能物の中にも「浦島」があり、また古浄瑠璃にも「浦島太郎七世縁」及その改作「浦島年代記」等があり、歌舞伎にも古く延享3年江戸市村座上演の「一富清和年代記」があり、更に變化所作事の長唄物としても曲、振とも今日なほ残るものとして文政11年3月江戸中村座上演の「拙筆七以呂波」があり、新舞踊劇としても森鷗外作の「玉匣雙浦島」、坪内逍遙作の「新曲浦島」、「長生新浦島」等著しきものがあつて、浦島傳説は各種の藝術上にも絶えずその題材を提供し來つたのである。

日本に於て今日流布される「浦島太郎」説話の筋を構成する重要な點は、①龜を助けてその應報として龍宮に行くやうになること、②その龍宮行は龜の背中に乗つて行はれること、③海底に龍宮なる莊麗華美の宮殿のあること、④そこに於て乙姫との間に相愛甘美の生活の續けられること、⑤その歡樂の生活の中に忽然として故郷を想ひ出すこと、⑥離別に臨んで玉手箱を貰ふこと、⑦故郷に歸つて見ると龍宮に於ける3年の月日は現世に於ては300年であつたこと、⑧乙姫との約を破つて玉手箱を開くと忽ち300年の月日は浦島に立還つて浦島は白髮の老翁となること等、これ等の諸要點に盡きるのである。

しかし古い時代の型式は、これとは大分重要な點に於て相違するのであつて「日本書紀」卷14雄略天皇22年秋7月の條に「丹波國餘社郡管川の人水江浦島子舟に乗つて釣る。遂に大龜を得。忽ち化して女と爲る。是に於て浦島子感じて以て婦と爲し、相逐ふて海に入り、蓬萊山に至り、仙衆を

歴親す。語別卷に在り」と見え、この古傳説の詳細にして信憑すべき徵證は「釋日本紀」引くところの「丹波風土記」の漢文であつて「本朝諸一覽」はこれを典據として平易に和譯してゐる。同書によれば浦島太郎は丹波國與謝郡日置里筒川村筒川の島子といふことになつてゐるが、その兩者の重要な相違點は、①現行説話に於ては佛教上の殺生戒に基く放生の福德招致思想が明瞭に見られ「子供の弄る龜を見て、憐れと思ひ買ひ取りて、深き淵へと放ちけり」であつて、その報恩として龍宮へ案内されることになつてゐるが、古い型式ではたゞ單に「三日三夜海に釣して一魚をも得」なかつたのを、偶然にも「五色の龜を釣り得ぬ。」といふことになつてゐて、佛教的因果應報色彩の薄い甚だ素朴な説き方をしてゐる點であり、更に②現行説話に於ては龜の背に乗つて海を渡つて行くのであるが、古傳説に於ては五色の龜は忽然「さもあでやかなる女」と化して、その女の案内によつて、浦島の現實の舟に乗つて渡海するのである。更に③行く先は、現行説では海底の龍宮であるが古傳説では「日本紀」に於ける蓬萊山、「風土記」に於ける蓬山の如く、海上遙るかなる仙境であつて、浦島は龜女と共に、浦島の常用する舟によつて、その蓬萊島に漕ぎ寄せるのである。更に④現行説話に於ては龍宮に至つて初めて乙姫との間に神人交會の機縁が結ばれるのであるが、古傳説に於ては五色の龜を釣り、それが忽ち女人と化した時に、早速「我が心更にあさはかなる思ひにあらす」云々と女の方から云ひ寄り、「女いとう懸相」することになつてゐて、神人交會の機縁は既にこゝに胚胎するのであり、前掲書紀の文によれば、蓬萊に行く前既に現世に於て龜女を妻として了ふ。即ち現行説話に於ては龍宮へ案内した龜とは別個の乙姫なる女性との交渉であるのに反して

古説話では龜そのものが交渉の對象となるのであつて、龜は即ち蓬萊山に於ては龜姫なのである。更に⑥龍宮或は蓬萊宮に於て乙姫或は龜姫に侍するものは、現行説話ではあらゆる魚族であるのに古傳説では「花をあざむく姿、いづれおとりはなき」侍女であつて、更に乙姫に於ては彼女は龍宮の唯一の主人公であるのに對し、龜姫に於ては蓬萊宮に彼女の父母姉妹が共に居ることになつてゐる。其他にも細かな點で種々相違點を發見し得るであらうが、兎に角現行説話はより佛教的であり幻想的であり、象徴的であり、非現實的であるのに對して、古傳説は佛教渡來以前の素朴な日本原始思想を含み、説き方はかなり具體的現實的な色彩を持つてゐる様に感ぜられる。

一體かゝる仙郷淹留傳説の類型は遠く世界の原始説話に胚胎の機連をもつてゐるのであつて、従つて多くの民族が類型の説話を傳へてゐるのは當然なのであるが、日本に於てもこの浦島傳説と全く同巧異曲の説話が記紀の中に發見される。

それは火照命即ち海幸彦と、火遠理命即ち山幸彦との物語である。この説話は國民學校の教科書にも掲出され、従つて一般によく知られてゐるのであつて、主人公たる浦島太郎、浦島子が山幸彦即ち火遠理命に置き換へられ、乙姫、龜姫が豐玉比賣に置き換へられ、龍宮、蓬萊宮が魚鱗宮即ち綿津見魚鱗宮わたつみのいさのみやに置き換へられ、玉手箱が鹽盈珠鹽乾珠に、又龜の役割が鹽土翁に變更されただけである。即ち火遠理命も浦島同様、海宮に於て美姫を得て歡美の生活を味ひ、3年にしてその忘我の生活の中に忽然現世のあの釣針の件を想ひ出し愛惜の觸を振り切つて故郷に歸るのであり、又離別の際尋ねてゐた釣針と更に不可思議なる餞別、鹽盈珠、鹽乾珠を貰ふのである。たゞ最後の部分は浦島では玉手箱を開くがために白髮の老翁となり、山幸彦では海神に教へられた通りの方法で釣針を兄神に返し、更に鹽盈珠、鹽乾珠の威力によつて兄神を惱まし苦しみ、遂に兄神は山幸彦の晝夜の守護者たることを契ふのである。

今この物語と浦島傳説とを比較して見ると、そこに本質的に重要な相違點が、説話型式の類似に

も拘らず數多く存在するのである。

先づ①現行の浦島説話にしても、その古傳説にしても、偶然の出來事によつて浦島は龍宮なり、蓬萊宮なりに行くのであるが、火遠理命の場合には、兄神から借用して、しかも失つて了つた釣針を探すといふ明瞭な、現實的な目的を持つてゆくことであり、また②魚鱗宮に行く方法は決して現行浦島説話に於けるが如く龜の背に乗つてゆくといふ様な幻想的なものでなく、寧ろ浦島古傳説と同様に日常の舟、即ち人の製作になるかみ間無籠と稱せられる籠舟に乗つて行くのである。更に③豐玉姫と結婚する道程も甚だ現世的な秩序を経て行はれてゐて、浦島説話の如き幻想的な點がない。命は魚鱗宮に至り、先づ門前の香木の樹上にゐて、その下の井に水を汲みに來る婢を待ち、それに水を乞ひ、婢が玉器に水を汲んで奉ると、御頸の珠を取り、口に含んでその玉器の中へ吐き出し給ふのであつて、こゝに求婚の意味が明らかに表現されてゐるし、又先づ豐玉姫が門前に現はれて命と目交せされて戀情の表示をされ、更に豐玉姫の父神、綿津見神も現はれて「この男神は天津日向あまのひなたの御子、虛津彦命であると云つて内に招じ入れて、こゝに父神の承認が行はれる。といふ様な點は明らかに日本古代の求婚形式を示してゐて、現行浦島説話の如く神人交會の特異點が見られず、又浦島古傳説の如く舟の中に單に龜女の懸想によつて戀の成立するなどに比し、全く現實的、具體的、合理的なのである。

さてこの三つの説話、即ち現行の浦島説話、その古傳説、及び海幸彦山幸彦説話に於ける三つの宮殿——龍宮、蓬萊宮、魚鱗宮——を比較して見ると、龍宮の幻想的、架空的、非現實的な色彩は蓬萊宮に於てはかなりの薄れ來り、更に魚鱗宮に至つてはそれ等の色彩は甚しく稀薄となつて了ふことは説話そのものゝ傾向を如實に反映するものでなければならぬ。

一體龍宮といふ思想は佛教趣味のもので、一般に龍宮とは龍王住居の宮殿であつて、水底または水上、山中に在りと考へられてゐる。「長阿含經」卷十九には「大海の底に沙竭羅龍王の宮殿

あり、縦横 80000 由旬にして七重の宮橋、楠盾等あり、みな七寶を以て莊嚴せらる。また須彌山と佉陀羅山との中間に難陀、跋難陀二龍王の宮殿あり、縦横 6000 由旬、七寶を以て莊嚴す」と説き、「正法念處經」卷十八には「大海中深き萬由旬にして戲樂と名づくる城あり、縦横 3000 由旬、その中に行法、非行法の二龍王あり、前者は世界を護り、後者は世界を破壊す。」とあり、「賢愚經」には「海上に白銀、瑠璃、黄金の諸龍宮城ありて、毒蛇、大龍これを守護し、龍王これに住みて珍寶多し」と述べ、「菩薩處胎經」によれば「龍子の宮殿に七寶の塔ありて經典を藏す。」と説いてゐる。

これ等から思ふに、佛典に於ける龍宮は想像を絶した膨大な規模の建築であつて、七寶或は白銀瑠璃、黄金等にて莊嚴せられ、その主人公は龍王であつて、又その中に珍寶、又は經典を藏してゐることが知られる。勿論その建築形式は印度風の佛教形式のものと考へるより他に道はない。

浦島の龍宮は、勿論この龍宮の觀念をとり入れたものに違ひないのだが、その建築はかくの如く全く我々の想像を超越したやうな規模のものではなさそうである。七寶其他によつて莊麗華美に裝飾されてゐることは同様であるが、その主人公は優美なる乙姫と稱する女性であつて、決して龍王といふが如き怪異なものではない。従つてその裝飾は恐らく、乙姫の海宮に於ける權威を表現するものであると同時に、又その優美に調和するやうなものでなければならぬ。

しかしかゝる幻想的な物語にあらはれる建築は全く現世の建築その儘では許されない。と云つて建築といふやうなものは突飛もなく現世から飛躍することも出来ないうし、結局説話者は大陸的な建築形式を想定して、これを理想化したのであらう。小學唱歌は「見れば驚く唐門」といひ、宮殿としては「珊瑚の柱、硨磲の屋根」を以て理想化し、これに眞珠、瑠璃等の謂ゆる七寶をもつて裝飾した。建築上の謂ゆる「龍宮造」即ち日光大猷院靈廟の皇嘉門、上野忍池の辨天社の天龍門など、あの漆食塗の龜腹形の門扉の上に普通の木造建築の軒と入母屋の屋根とを載せた、あの形式のやうなものが、一般に想定された謂ゆる「龍宮唐

門」の形式なのであらう。

そこで宮殿の柱であるが、これは「珊瑚の柱」と歌はれるものである。これが珊瑚製の柱であるか、珊瑚を鏤めた柱であるか。珊瑚は勿論貴重珊瑚であるわけで、あの紅珊瑚とか、桃色珊瑚とか白珊瑚とかいふやうなものでなければならぬがあれから一本の大柱をとれるやうなものは考へられない。先づ現世的には珊瑚によつて裝飾された柱となるのであるが、それは幻想的な説話のことであるから、驚くべき一本の珊瑚樹より製出された柱と見ても差支へないのであらうし、又その方が寧ろ龍宮建築に適しいものと見られる。

ところで次に「硨磲の屋根」であるが、硨磲は金、銀、瑠璃、瑪瑙、眞珠、玫瑰（法華經）玻璃珊瑚（無量壽經）と共に佛典中の謂ゆる七寶の一であるが、恐らく貝殻中最大のもので、長さ 75 匁乃至 100 匁に及び、目方 22 匁以上にも及ぶといふのである。あの扇形の、頗る厚な貝殻、あの貝殻の屋根だといふのである。即ち「硨磲の屋根」はあの貝殻をもつて葺いた屋根と考へていゝのであらうが、あの貝自体にもその表面に灰白色の瓦を葺いたやうな感じの彫刻があるのであつて、あの貝を龍宮の屋根葺材料に選んだ説話者は、恐らく單に大ききばかりでなく、あの彫刻からの暗示があつたのではあるまいかと思ふ。しかし硨磲の貝の現存種は主として印度洋方面に多く、臺灣、小笠原、琉球等に産するやうであるが、古代に於ても恐らく印度洋乃至南洋あたりが主要な産出地ではなかつたかと思ふ。そうすると、その貝殻で屋根を葺くといふ思ひ付きは恐らく印度乃至南洋あたりのものであらう。この邊にも佛典に於ける龍王の龍宮の面影が乙姫の龍宮に残存してゐるやうに思はれる。それは兎に角としてあの長さ 100 匁もあり、目方 22 匁以上もあるやうな重厚雄大な貝殻で葺かれる屋根は恐らく極めて高大な宮殿のものでなければならなかつたであらう。佛典の龍宮がその規模何萬由旬、何千由旬といふが如き、我々の實感を超越した體のものであるが、乙姫の龍宮は斯くの如く膨大であつては、何となく不調和であるが、それでも我々が極めて雄大な構想を廻らしても過ぎることなき位のものでなければならぬことは、乙姫は決して單なる一個の人間の

如き小規模のものでなく、極めて神秘的な存在であつて、海の精、水の精とでも云ふべきか、兎に角あらゆる魚族の統治者であるばかりではなく、時間、空間を壓縮して玉手箱の中に封じ込み得るほどの神秘力の所有者であつたのであるからである。

しかし蓬萊宮になると、勿論非常に理想化され浪漫的なものではあるが、龍宮あたりに比して遙かに現世的な感じを持つて來るのである。

支那の傳説に従へば、蓬萊は東海の東にある島で、高さ1000里、周圍50里の仙山である。頂上には神仙太山眞人が住んでゐて、その宮室は金玉を以て作られてゐるといふ。兎に角蓬萊は道教の發生と共に特に強く支那民族のあこがれの的となつたもので、東洋思想史上極めてロマンチイックな幻想を描き出したものなのである。嘗て秦の始皇も方士の説に従ひ、徐福をして童男童女500人を船に載せ、蓬萊山に神仙不死の藥を求めさせたといふ傳へられるし、漢の武帝も亦之を探させた。

支那傳説に於ける蓬萊島は、その周圍50里といふやうな實際的な數字を以て示してゐるのに、その高さは1000里といふが如き架空的な數字を以て示され、恰も巨大な柱の如き、錐の如き山なのである。こんなところに蓬萊にも亦龍宮に於けるが如き幻想的な點があるのではあるが、龍宮に於けるそれを佛敎的の幻想と云ひ得べくば、蓬萊に於けるそれは道敎的の幻想と見ることが出來やう。

そこの主人公も龍王といふ超現實的の怪奇に對して、仙人といふやうな現實的の變異に置き換へられてゐる。

その宮殿の様子は「金玉を以て作られ」てゐるといふ點、龍宮の「七寶を以て裝嚴す」といふに通ずるものであつて、謡曲、長唄の「鶴龜」の中にはこの邊の景觀を述べてゐる。今長唄「鶴龜」に依れば「庭の砂は金銀の玉をつらねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の屏ぞ、碑礫の行術、瑪瑙の橋池の汀の鶴龜は蓬萊山もよそならず」であつて、龍宮が謂はば現實化された理想であるに對し、蓬萊は理想化された現實とでも云ふことが出來やうである。

浦島古傳説の蓬萊宮は、この支那傳説の蓬萊宮

の思想が取り入れられてゐること勿論であるが、又かなり日本的な説き方になつてゐるやうに思はれる。龜姫は龜に變化し得る仙人的存在ではあるが、そこには父母姉妹あつて甚だ家庭的な、現世的な生活をしてゐるやうに説かれる。舟に於ては美男の浦島を見て忽ちに懸想するほど非仙人的であり、又宮殿に於ても亦美酒佳肴と美女の妙なる樂舞とを以て接待するほどこれ亦謂ゆる仙人の趣味ではない。

これに比して山幸彦説話に於ける海宮は更に現實的であり人間的である。

龍宮から蓬萊宮を経て魚鱗宮に至るあの三つの建築は、印度的から支那的を経て日本的に至る三つの段階を示し、佛敎思想から道敎思想を経て原始日本思想に至る三つの段階を示してゐるやうに思はれる。

勿論記紀に於ける山幸彦説話は甚だ象徴的、詩的に記述されてゐるとは云へ、その内容は甚しく現實的であること、豐玉姫への求婚の條に關して前述した如くである。従つてその宮殿も亦全く現實の宮殿であると見られる。古事記の記載「魚鱗の如く造れる宮室」とある魚鱗、即ちイロコは今日謂ふところのウロコであつて、綿津海魚鱗宮は即ち魚のウロコの如く造つた宮殿であつた。

イロコの轉化は今日のイラカ、即ち瓦葺の葺であることを思ふ時、魚鱗宮は瓦葺の宮殿であつたとする古事記解釋の一説に我々は首肯しなければならぬまい。瓦の日本傳來は崇峻天皇元年、瓦博士麻奈父奴等四人百濟より來朝して獻じたに始まるとする正史を正しとするならば、かゝる神代に於て瓦葺の宮殿のあつたことは奇とすべきであるかも知れないが、正史にあらはれた文字の傳來以前に、事實上既に文字の傳來があつたとする考へが今日一般に認められてゐるのと同様に、公式に瓦の傳來のあつた以前に一部に、殊に海の王者、綿津見神の宮殿の屋根を葺くために瓦が將來されたことは考へても少しも不自然でないやうに思はれる。

かく魚鱗宮は瓦葺であつて、龍宮の碑礫貝葺の幻想から現實への大飛躍がなされたのである。既に屋根が瓦で葺かれるとなれば、魚鱗宮の他の建

築部分も我々の想像を超越するものでは決してない。しかし瓦葺の建築は決して当時の純粹の日本の建築形式ではなかつた。そこに支那乃至朝鮮の感覺がある。

なほ火遠理命の尋ね給ふ釣針を探すに、海神はあらゆる魚族を召し集め、遂に赤鯛の喉にさゝつてある釣針を求め、これを洗ひ清めて命に奉るといふ記載や、土産に差上げる鹽盈珠、鹽乾珠の神秘や、命の歸途を一尋和邇ひとひろにに命じ、その首に命を載せまつり、併せて海神の佩びたまふ小刀さきを和邇の首に結びつけて、海路お送り申上げたと言ふ

たり、よし適切なる現實的解釋をなし得るとも、その敘述の仕方は浦島説話の龍宮に於ける魚族や土産の玉手箱や、渡海の龜の敘述と一脈相通じて夢幻的傾向を帯びるものといへやう。従つて魚鱗宮も亦そこに一般普遍の現實から遙かに昂揚された好奇の部面を想像しなければならない。即ち日本及日本南方の海洋に廣く擴つた海部族が高度の大陸文化を吸収し、その王者、海神の宮殿に於て當時の驚異的、最尖端文化を盛つたと考へなければならないのではあるまいか。

(筆者は株式會社竹中工務店勤務)

日本建築家の模倣する力と創作する力

山 田 守

日本人は猿真似が上手である。

日本人の發明は人力車位のものである。

そんな言葉を子供の時分によく聞かされたものです。日本人を馬鹿にした自からを本當に知らない輕率なる西洋氣觸れの日本人達の言ひ草でありました。私共も時にはそれを無批判に受入てゐた戒の言葉でありました。

一體真似と云ふ事がそんなに惡い事でありましょうか。人生で最も發育の旺盛なる幼児は何んでもかでも人の真似をするのであります。それは幼児が人に追ひ付く最も賢明有利な方法であるからであります。子供は全くの無智の狀態から、知らぬ間に大人に追付いてしまひ、じきに大人と輕蔑し始める様になるものであります。

日本の古代建築が南方の眞似であり、中世の建築が大陸の眞似であり、近代の建築が歐米の眞似であると云はれる事は全然否定は出来ませぬが、世界のどの民族の文化もよいものであれば、所謂模倣輸入攝取し、すぐに其の文化に追付いてしまう。乃ちあちらで何百年もかゝつた事柄を、數十年で追付いてしまう。そして其清算の上に、其消化の上に、日本人獨特の色彩を以た文化の花を咲かす様にするのであります。かように反省して見ると、眞似と云ふ事、即ち日本人の鋭敏なる模倣力と云ふものは、文化の吸収には無くてはならないものであり、廣く智識を世界に求める爲の優秀なる特性であると思はれます。

尙ほ又日本人が創作的な工夫の頭に缺けてゐる如く云ふ人がありますが、私は決してそうは信じてない1人であります。日本藝術に於きます。人麿呂、利休、遠州、芭蕉、大觀等を持つ我々は、日本藝術を世界の第一流水準に比して優るとも劣るものでない事を信ずるものであります。創造力のない國民に、天才の無い人間に、本當の意味での藝術などが出来るものではありません。現代の日本建築家の中にも秀れたる創造性を現はさんとしつゝある者も相當にあると思ひますが、何分にも物質文化に立ち遅れた日本建築家の近頃迄の仕事は歐米文化吸収に追はれてゐた爲に、まだまだ眞價を發揮することが出来なかつた様であります。日本人の建築に於ける創作力の發揮と云ふ事はこれからであると思はれます。しかし其の創造性の素質のあることは疑ふべきもありませぬ。科學技術の方面に於きましても、我々に最も解り易い又外國人にもうなづかるゝ創造性の現れは製艦等の方面に明であります。其外の方面に於きましても

例へば紡績工業の様なものにも、其の例は乏しくありません。これもまだ吸収同化の時代を脱して愈々創造的な時代に向つた所なのであつて、其の創造的優秀性は明日に向つて愈々明瞭となつて來ると思はれます。

かく日本人が一方に極めて天才的な模倣性を有すると同時に、極めて優秀なる獨創性を兼ね備へてをります事は、恒に世界の各民族によつて高められたる文化を忽ちにして吸収し、且つ直ちにこれを同化し、其の清算の上に新鮮發瀾たる日本人的創造性を發揮する事となるのであります。

如何に優秀なる文化を持つて、嘗て榮えたる民族も、徒らに獨り善がりに落ち入りて、他の文化を顧みなければ、やがて衰ふることは歴史の常であります。西歐の物質偏重の文明も、今日傾かんとし、東洋の精神一方の文化國は、又歐米の殖民地たる状態にて一向に榮えなかつたのであります。

獨り日本は精神的方面に於きましても、科學技術の方面に於きましても、恒に世界に眼を放ち、其長所を恒に集結しつゝ自己の榮養となし、自からを高め、其上に持前の傳統的特性を以て外に向つて創造の光を放つ事を忘れなかつたのであります。

この千載一遇の大東亞建築文化の建設に當つて私共日本人が天才的な模倣性と、極めて優秀なる創造性とを兼備し、其兩性態を一元的に發揮し得る事は誠に幸な事柄であつて、この大使命達成の爲に必要な資格であると私は信じます。

(筆者は逓信技師、逓信省管轄課長)

北京を訪ふた人は皆「北京はいゝ所だ。住んで見たい」と云ふ。遼、金、元、明、清五朝宮居の歴史と、朱壁黃蘂の紫禁城が森の中に隠見する美景とは誰にでも大きな魅力だし、又「洋館に住んで、支那料理を食べて、日本婦人を奥さんにする」と云はれる支那料理も、北京を訪れる程の人々は必ずや賞味して忘れ難いものである。

私も繁忙を極めた北京滞在中、食事時間を利用して、今日は全聚德の家鴨料理、今日は厚德福名代の鐵鍋蛋と食べあさるのを大きな楽しみとした。

此の食ひしん坊が、偶々舊曆臘月8日に遭遇して臘八粥と云ふお粥を食べ得た事は、又こよなき幸せであつた。臘八粥と云ふのは、北京歳時志にもあつて、12月8日に祖先に供へ、親戚知友に配り、犬猫に迄お裾分けするもので、傳説によるとお釋迦様が難行苦行で衰へなさつた時、村長の娘が食物を献じたと云ふ縁起に依るのださうだが、日本でも禪家には臘八會と云ふのがあつて、朔日から8日迄お粥で坐禪をする行事があると云ふ。

此の粥は、黄米、糯米、粟、小豆、大麥、小麥を主材料とし、それに棗、栗、菱の實、蓮の實等を入れ、黑白の砂糖で調味して前晩から煮立て、それへ杏仁、落花生、玫瑰、青梅、西瓜の種等を點綴したもので、お粥の豪華版である。私は此の粥を食べて、そのねつとりした觸感と、各種各様の甘味の交響には全くトロリとした。日本で正月に食べる七草の粥や、小豆粥等とは比較にならぬ大規模のもので、さすが支那料理と驚かざるを得なかつた。

食べ物の序に、もう一つ語らせて貰ひたいのは涮羊肉である。これは羊肉のチリで、日本でジギスカン鍋と稱して流行したものがあつた様だが涮羊肉かどう。鐵棒の上で羊肉を焙つて食べる

のは烤羊肉と云ふ。涮羊肉は中央に小さな爐を立て、その周圍にめぐらせた鍋内に汁を盛に沸き立たせ、その中へ薄く大きく切つた羊肉二三片を箸で挟んで入れ、煮過ぎぬうちに手早く出して、豫め用意された藥味をつけて食べる。此の汁は蒙古産の口蘑とか云ふものと乾蝦とで味をつけたのが一層美味だと云はれる。又藥味は、醬豆腐を溶かしたもの、胡麻味噌、油でいためた唐辛子、蝦の油、黃酒、醬油、酢等を食べる者が銘々嗜好に應じて適當に混ぜて作る。なほ肉と共に白菜、芹、支那素麵等をやはり軽く湯を通す程度にして食べるのであるが、羊肉は特臭も消され、舌の上でとろける様な柔かさであり、味はさつぱりして實にうまい。秋から冬には日本人間にも大いに珍重されて居る。ちり鍋と云ふものゝその實に大がかりな事、日本のチリ鍋の比でなく、味もずつとよいこれを私は回教料理で名のある東安市場の東采順前門外の正陽樓で食べた。

私は此處で支那料理談義をしようと思ふのではないし、況んや食べ物不足の今日、徒らにうまい物の話をして涎を流させようと云ふのではない。私はかう云ふうまい支那料理が、一體どう云ふ建物内で食べられるかを顧みたいのである。日本なら東京の芝山内紅葉館、星ヶ岡茶寮、京都の圓山公園内料亭等をさしづめ想像する。こう云ふ所は家の造りもシャレて居れば、座敷から眺める庭も美しいし、床の軸や置物も吟味されて居り、食器迄一々凝つたものを使ふ。又フォーマルな所でなくて、所謂うまい物屋であつても、スツボンの京都西陣の大市、東京の各鰻屋等料理以外にさして意を用ひぬ所でも、一應ちゃんとした家で、むしろ獨特の風格を持つ家さへある。所が支那料理屋となると、北京一の料亭であつても、その料理のラツクシュアリーアスなるに比して家の低俗で汚い

事は話にならぬ。按ずるに目的が料理にあるのだから何も他を顧る要がないと云ふのか、或は又料理に十分の自信があるから、家や庭や家具調度、さては食器等の助けを借らぬでもよいと云ふのかとにかく日本の料亭に入つて、先づ家や庭をながめ廻はし、それと氣付かぬ乍らも調和の取れた食器に心を楽しませ乍ら、徐ろに味はふのとは餘程趣が違ふ。私はこゝに支那人の徹底性と云ふか、極端性と云ふか、さう云ふ特異性を認めたのである。

世界一の支那料理の本場が、北京であると共に北京は支那劇中主位にある京劇の本元で、北京人は齊しく戲迷と云へるさうであり、特に票友とか稱するフアンが舞臺の好戯に「好々」を叫ぶ様はけだし「播摩屋」「六代目」を聲援する以上である。私は一晩一流中に算へられる吉祥大戲院と云ふので、新進人氣の某名坤伶（女優）の探母回令と云ふ芝居を見た。綺麗で派手で、これさえやれば、何時でも大入滿員だと云ふのだから、日本で云へば「忠臣蔵」の様なものかも知れぬが、私は説明を訊き乍ら觀たが、それ程とは思はなかつた。併し私は此處にも支那人の徹底した極端な性格を見たのである。

支那芝居は知られて居る通りのべつ幕無しであり、俳優の模倣的乃至説明的な做白や舞臺上の約束等によつて各種の場面を暗示する等の點は我が能によく似た樂劇であるが、その音樂たるや狂燥とも云ふべきである。探母回令の前幕は長板坡と云つて三國志を演じて居たが、所謂式場の例とて、それこそ耳を聳するばかりであつた。大體普通に使用せられる樂器は、打樂器、弦樂器、管樂器を併せて25種類あると云ふ。勿論此等を一齊にならすのではないけれども、兎も角も燥音は、これでもか、これでもかと徹底的に聽者の耳を打つ。各樂器の演奏の一々については兎も角として、いくつかの交響樂には、わが舞臺音樂たる長唄や、清元等の洗練された落着いた味はない。而も囃子方連中が便衣で、甚だしく行儀悪く、交替の樂員が公衆の面前なる舞臺脇の囃子場で、更衣する如き無頭着さもあきれざるを得ない。つまり支那劇にあつては主演俳優の仕種と做白とそれから音樂とのあくどい程の絢爛さを徹底

せしめればよいので、その他の俳優の如きは、まるでお役目に動いて全體の雰圍氣等眼中に無きが如く、背景や大道具は用ひないが、舞臺上で用ひる机や椅子のまるで古道具屋からでも買つて來たものゝ様なものなさないし、黒子が狭い舞臺を横行して一向憚る事も無い。これも私は支那料理に於けると同じく支那人の徹底性、極端性のあらはれと見た。日本の歌舞伎の俳優の演技、扮装、背景、道具、音樂等全體がびつたりと調和して醸す雰圍氣、たとへば源氏店的一幕に於けるが如き渾然たるものは決して見られない。千代萩の床下、車曳金門五三桐の南禪寺等の色彩美、構成美音樂美の如きも見られない。日本で觀劇と云ふのを支那では聽戲と云つて、耳に訴へるものであるが、それにしても何と騒々しい事よ。私は支那芝居を喧噪の藝術だと云つて、説明して呉れた支那通の苦笑を買つた事である。

普通に西洋文明を智識文明、東洋文明を精神文明と云ふが、支那文明は感觸文明だと唱へた人があつたが、蓋し穿つた觀方ではあるまいか。

建築を専門とする私は、料理や芝居の如き餘事を長々と語り過ぎた感がないではない。併し支那には一世の長者居處を知り、三世の長者服食を知るとて、よい家屋を造る事は成金輩でも爲し得ぬ事はないけれども、服食に至つては累代名門の長者ならでは知り易からずとして居るからして、料



垂花門



院 子



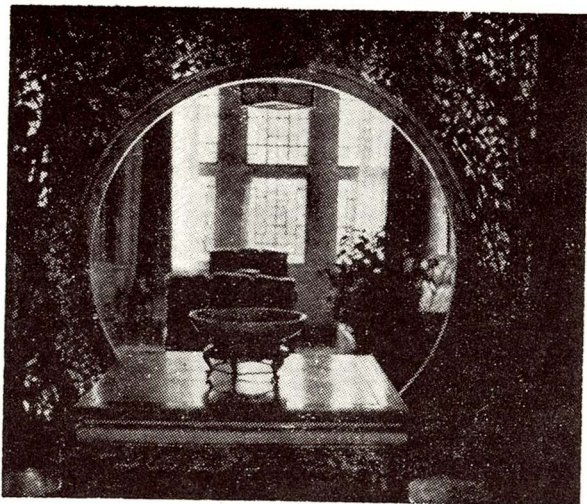
後 園

理を語れば家屋の事は自ら明かであるとも云へる理屈である。

支那建築の専門的研究は外に人がある。門外漢たる私は、料理や芝居に關聯して一管見を述べて見たいのである。例を北京の住宅に取る。北京の住宅の多くは周圍を高く圍ひ、正門を入つた所に影壁を立て、邸内の見透しを防ぎ、院子と稱する中庭を圍んで對稱形にいくつかの棟を建て並べる大きな邸になると、院子をいくつも取つて、此の配置を繰返す。そして一番うしろに後園を營む。

中には横へ擴張されて居る場合もある庭園と云ふ語は簡単にニハ即ち garden だと片付けて居つた所、正式には院子を庭、後園を園と云ひ、併せて庭園と稱するのだと云ふ事は私は北京へ行つて始めて知つた。天子の政事を見られる外朝、プライベートの内廷を併せて朝廷と云ふ事を紫禁城を見て、始めて知つた迂闊さと同じである。さて庭には塼を敷き太湖石、盆栽を配し園には山、池等を作る。北京は元來森の都と呼ばれ、どう計算したのか、人口 1 人當り樹木 3 本と云はれて居る。新宿の三越の屋上から見る東京は全く樹木で埋つて居るが、北京飯店の屋上から見た夏の景色も一眸緑の街である。榆柏樹、合歡、臭椿、カキノキ、夾竹桃、石榴其他庭園ごとに後園に見る樹木は豊富である。又四季を通じて花も多い先づ桃、杏に次いで藤、牡丹が咲き芍薬、海藻、丁香、玉蘭、榆葉梅、蓮、玫瑰、菊等々々、她紫嫣紅の美しさと云はれる。かくの如く草木花瓣の豊富なるに關らず、北京の庭は甚だお粗末だと私は見たが、果してどうであらうか。特に住宅に於て然りと思はれる。草木は多いとは云ふものゝ常緑樹は日本の様に多くなく、冬はどうしても蕭々たるもので、そのせゐもあらうか。支那のニハには石の洞門、小橋、太湖石等、石を多く使用して居る。ともあれ住宅建築の垂花門、花塼、花隔子、花

塼、彫花格扇等豪華を極むるに對比して何と云つてもニハは貧弱である。これを私は氣候風土の關係から日本の様に建築と庭園との一元化が不可能だとばかりに片付けたくない。住居を目的とする建築に於ては、兎も角もその本體たる建築に重點を置いて、庭はあくまで補助的に見る支那人の徹底性、一步進めば極端に達する性格に基く所少からずと、此處に於ても私は見たのである。此の説を多年支那に在り、支那の各種の社會人、文人墨客とも深い交りを持つ友人に話した所、いや蘇州



室内 彫花格扇（中の丸い仕切）

には小さくて幽邃の趣をたゝえた、庭園があると云ふ。私も有名な留園や西園を見たがさほど感心しなかつたと應酬したら、いやそんな所でなく、むしろかくれたる住宅にあるとの事、成る程水に恵まれた江南にはさう云ふ處もあらうか、いつか見たいものと思つた併しそれにしても小堀遠州の作庭術の定石と云はれる「夕月夜海少しある木の間かな」と云ふ所迄行つた幽玄味はなさうな氣がする。

日本人と支那人とは類似する様で、實は種

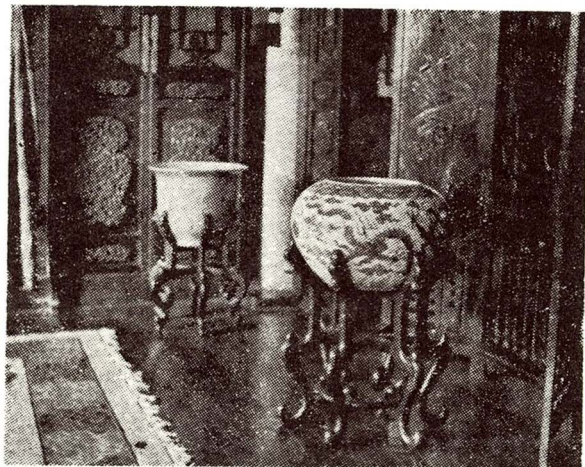
族、性狀、生活様式は根本的に相違する様に建築も全く外だ。細部裝飾に濃厚繁褥の極をつくす支那建築と、一切の贅を除き去つた簡素の中に窮極の美、大自然との間然する所無き調和——それはあらゆるものとの階和——を發見する日本建築とは途中幾何かの交渉ありとするとも所詮は永劫互に交る事なき拋物線であらう。

私はこの相を建築そのものと云ふよりも、建築或は料理、又は芝居の本體と、その周囲との間の關聯に於て瞥見したのであつた。

17-7-31

（筆者は工學博士早大講師 長谷部竹腰建築事務所副所長）

室内



このあいだ或る雑誌から、下記の題にて御執筆賜り度、といつて鄭重な手紙をもらつた。その題といふのは「風通しを良くする法」といふのである。

平凡な題であるが、考へやうではむづかしい課題である。殊に今日に於ては器械設備は勿論、扇風機も遠慮しなければならぬ時であるから、そう簡単に良くする法を思ひ附く時間がなかつた。それに建築家諸賢が既に種々工夫考案されてゐるし自分でも考へて住宅に実施してみた事もあるが、とかく比較的よい位な結果で、自然の涼風に及ばざる事遠く、また風のない暑い日に積極的に風通しが良いと感ずる程の結果も得てはゐない。立派な實驗的實施としては京都の故藤井博士の考案報告された「日本の住宅」をすぐに思出すのみであつた。

そこで雑誌の方に返事を出した。——今良き考案も手元になく、第一斯様な方面の研究をしてをられるのは、東大の平山嵩、早大の十代田三郎兩博士等が御専門であつて、小生は意匠上の問題か何か書きましよう。——と逃げてしまつた。

しかし一應これでお斷りしたものゝ、それ以後どうもこの風通しの事が氣にかかる。少くとも日本の建築家としては逃げおぼせる問題ではない。

今日此頃のやうに、降雨がなくて早がつゞき、湿度は百分比80何度といふのでは、いくら前線で働いておられる兵隊さん達の事を偲んでみても、やはり暑くていき苦しい。

こう湿度が多くなると、やはりこれで風さへ通ればすつとらくだがと思ふ。事實此頃でも少し風があると、外はぎらぎら日が輝き、油蟬は聲を限りに合唱してゐても、さほど苦しくはない。

日本の夏にとつて風通しのことは、實に切實な命題であるのだと今更のやうに思ふ。——「風通

しを良くする法」といふのが原稿の課題でなくて今日の自分達の居住の大問題なのである。

僕の家は、古い明治時代の遺物であるが、東から南にかけて庭は殆んど無いといつてもよい位である。その東隣は某有力な華族さんの地所で、現在は事變以來赫々の武勳を立てられた某將軍が住つてをられる。そのお庭は廣くて空地になつてゐて、その空地を僕の家の上階から見ろすやうになつてゐる。その空地に、毎年將軍の令息が小菜園を作られて銃後の緊張振りを示される。

處がこの幾分僕の家の上より廣い空地と、僕の家の上との間に、高2米程の亜鉛引波型鐵板の塀が、もう幾年も錆色ベンキを塗つたまゝで嚴然と立つてゐるのである。恰度東から南へかけての方向ではあるし、毎年夏になると、このベンキ塗亜鉛引波型鐵板の塀が氣になりはじめる。

風通しを良くする切實な問題は、いつもこの塀におつつかつて遮斷されてしまふ。

由來、風通しは必要缺くべからざる日本の風土の條件であるのに、とかく住宅の周圍に、高い嚴重な塀を建てなければ安心して生活することが出来ないといふのはおかしい事である。庭の廣い住宅は家居よりも遠い所に塀があるのだから、通風問題も起らないであらうが、大都市で、建て込んでゐて、その塀に接近して建てられなければならぬ小住宅こそみじめである。またその小住宅が各々小さいなりにトタンなり板なりの塀を以て圍まれなければならぬのだから、愈々以て風通しは悪くなる一方である。

塀無しで安心して生活出来ることは、即ち風通しを良くする最良の良法であることを想ふと、一層この塀が難問になつてくる。

併し現在の日本の市民なるものゝお行儀では、

どうしても住宅の周囲に塀なしでは居られない。

大都會になるほどその不愉快が多いのだからかなはない。——電車の中で他人の顔をちらちら見物する。無儀に正面からまばたきもしないで見詰める。新聞や本は隣のものをぞき込む。少しでも他人に隙があれば一列の途中で割込んで一人でも先に出やうとする……。この勢で垣根が無かつたり生垣だつたりすると、他家を遠慮もなく覗き込む甚だしいのは立止まつて眺めたりする。まがきに花でも咲いておれば、もぎ取つてしまふ……。そして最もいやな事は泥棒といふ種族が居る。これはどうも石川五右衛門の豫言(?)が適中したらしいのには困惑する。

その上この風通しのために、日本の住宅は開口が大きくしてあり、昔から夏を本とした建築である。

こんな事で住まふ方でも開放的にしてゐたのでは一時も安らかに休息が出来ないから、生垣などなまやさしい事では済まされず、枕を高くすると正比例して塀も高くなるといふわけになる。

處でお隣との境の亜鉛引波型鐵板の塀であるがお隣では庭の空地が廣いから、何等氣が附かれないやうであるが、こちらからは前記のやうに種々な事が考へられる。その考へのつづきで——これが生垣だつたら、さぞ風通しがよいだらうと思ふ。ヒバでもツゲでも、マサキでも、カナメでも何でもよい、これが生垣だつたら、風も透くし、木葉の間からお隣の空地も時々は見えて、さぞ涼しいだらうと思ふ。第一この亜鉛引波型鐵板の輻射熱だけでも無くなると助かるのに。

お隣では生垣にして垣根越しに覗き込まれたり

しては、迷惑此上ない事であらうが、それは僕自身家族も嫌ひだから、出来るだけ御迷惑はかけないつもりである。

そこでその塀の所有者たる地主の華族さんの意向を探つてみた處、當主の考へではあるまい、恐らく三太夫氏の考へだらうが——トタンを引取つてくれる人があつて、その代償で生垣を作る費用が出れば、取換へてもよいと言はれたとか、そうらしいとかといふあいまいな話であつた。

今この時に於て、亜鉛引波型鐵板を賣買し、移動するには相當な手續と許可がなくては出来ない事を、先様は知つてゐるのであらうかと思ふ。しかも今この時に於て、これだけの鐵板を腐朽にまかせないで、回収に應ずるとか、或は献納するといふ手があるのを知らないのであらうかと思ふ。

そんな事を知らないやうな考へ方の人では、交渉した處で非常に困難な話になるであらうし、とても成立しないに違ひない。それに風通しがよくなるとか、空地を縁側から展望するとかいふ事は、僕の方の身がつてであつて、お隣でも別段そんな要求はないであらうし、まして地主さんに於ては何等痛痒を感じない命題であることに氣がつく。

それで折角僕の家の「風通しをよくする法」に對する名案も、本交渉に入らないうちにどうもこれは引込めた方がよさそうなので、また10年來の懸案のまゝにしてしまつた。そして水平に切られた線の上に、お隣の大きな桐の樹にかゝる夏の月でも眺めて涼をとることにした。昭和17年8月

(筆者は武蔵高工教授)

東京に住んでゐたころ、満洲のいろいろの事情や、住宅や生活の様式、或は都市の状態など詳しく知りたいと思つて、神田あたりへ時折出掛けて書物や旅行記をあさつたが、孰れも断片的なものが多くて仲々之と思ふやうな恰好の書籍が手に入らず、さうかといつて事情案内所へ行つて何から何まで小うるさく聞きたゞす程の勇氣と閑もなかつたし、新京へ来るまで大した豫備知識も無しに來てしまつた。

こちらへ來て早や一年あまりになつた。親しく滿鐵沿線の風物や、新京をはじめ、各地のおほかたの相貌を見てしまふと、少しづつ珍らしく無くなり、誰でも知つてゐることのやうに思はれ、今更こと新しく筆にのせて描寫したり、感想をつゞつたりするのが憶劫になつてしまふ。

然し各地のいろいろの都市や建築の概況、又其の特徵といったものに就て一通り纏つたものを、次々と雑誌なり著作なりを通じてもつとひろく紹介する勞の必要があることを思ひ、殊に一年前の私の身になつて考へ、さうしたものがまだまだ妙いことを考へると、餘計にそれを痛感するのである。

× × ×

内地の各地へは公私の用務や觀光の旅で随分あちこちへ出かけたし、殆んど隔月位の割に旅にくらすことが多かつたので、旅慣れのせいか東京から新京までの道のりをごく気軽に考へて別段に遠いとも思は無かつた。大東亞戦争後マダガスカルや、米國西岸さては赤道遙か以南への皇軍の進出ぶりを聞いて、われわれ日本人の距離に對するスケールがすっかり其れ以前と比較にならぬほどちがつたもの、即ち「八紘を宇となす」の氣慨にふさわしいものに飛躍して了つたことを、恐らくわれわれ一人一人が、まざまざとまた心嬉しく意識

してゐるところであらう。

世界各地を旅したり、所用で絶えず内地外地間をゆきゝして船や飛行機で飛びまはつてゐる人は別として、東京・新京間釜山經由の直通列車で所要時間55時45分の道程は、大東亞戦争以前のスケールでは、内地をあちこちゆきゝしてゐる位のものにとつて、また普通人にとつて、まあ近い方では無かつた。然しこちらへの赴任前から私にはどうしてもさして遠いといふ氣持を持てなかつた。その理由を自身旅慣れてゐたことのせいだらう位に軽く納得してゐたのである。さうした氣持ちで赴任のときは神戸・大連經由の船を利用したし、其の間は船旅であり、船の二日や三日は平素忙しいものに却つて快い休養の時を與へて呉れるので、道のりのことは少しも苦にならなかつた。然し始めからあまり氣にかけなかつた大連・新京間は其の料程に比し随分長いやうに思はれた。其の料程はほぼ東京・和氣(岡山の少し手前)間の道のりに相當して居り、朝乗つて晩方つく輕い道のりである。それを格段に長いものに感じたのは、はじめて通る見知らぬ土地であつたし、汽車が「鳩」であつたのと、車窓から外ばかり眺めてゐたのでさう感じるのが當然のことであつたかも知れぬ。其の後二度内地へゆきゝして、この線路を走り、又時折大連へゆきゝする。其の度毎に近く感じ、殊に特急「あじあ」や、夜の寢臺を利用すると一層其の感じを深くする。「あじあ」は他の列車とは格段に快適で、これが本線に走つてゐることが随分旅に氣易さと慰さみを與へて呉れる。何もかも慢々的な大陸の生活に腹の蟲の御淺瀬時になゝめであるわれわれにとつては殊にさうである。

大連・新京間をはじめ遠いと感じた理由の中で特に印象づけられてゐることは、内地のある都市から他の地への旅は、海岸に沿ふて又は海からさ



新 京 大 同 大 街

う遠くない所を縦に走りつづけるのであるから、何處へ行つても陸地の奥へ入つたといふ氣持はしない。然し滿洲では大連から新京や哈爾濱へ、更に足をのばして滿洲國境に近い都市へ行くと、海をどんどん離れて、陸地の奥へ奥へとひたぶるに走るのであるから、海に抱かれ、雨に濡れて育つたわれわれにとつて、海からぐんぐんはなれ、雨の降らない高燥で涯しなく擴がつた風景を眺めると、如何にも陸地の奥へ入る氣持ちがして、道のりだけでは解澤出来ぬさうした感情が旅行く身に氣持の相違を與へるのであらう。それが新京に住んで了ふと、もう料程の問題だけになつてしまう然し格別にのんびりしてゐる本線以外の列車にのると、いつも道のりがこんなにある筈は無かつたがと思はず地書を出すほどに慢々的である。さきごろ熱河遺蹟のある承徳へ行つたときなど特にさうであつた。

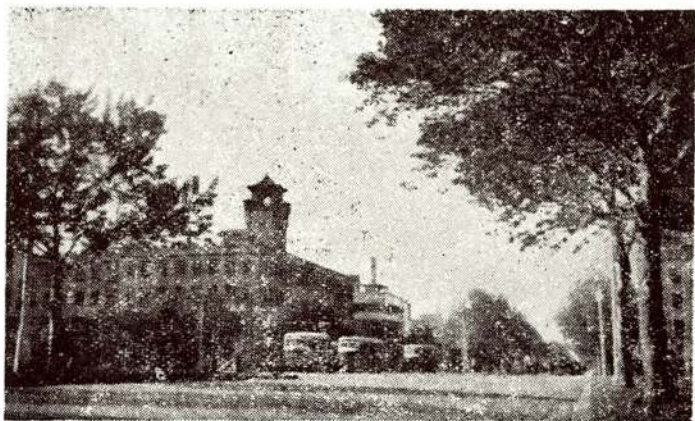
× × ×

朝10時に大連を出る「鳩」が新京へ着くのは20時15分、滿洲の夏の日暮れは9時を餘程過ぎるので、到着のころはまだ赤い夕陽が車窓に燃えてゐる。新京へ近づいたころ、車窓から市街の様子を眺めて驚いた。ひろびろとして緩やかな起伏のある草原の中に、劃一的な集合住宅が一團又一群續いて建ち並ぶそのあひま、楊柳や榆が點在する原つばの向ふ、

原ひろく雲たつところに寫真で見知つてゐた國務院や他の廳舎がボツリボツリ散在してゐるのである。東京の丸の内や官廳街の風景に長い間、見しんだ眼にはかうした都市風景は頗る奇異なものに感じられた。集合住宅が漸次幾列にも並び建ち、又舊市街の古めかしい建物が見えだすと、やはり都會らしくなつて、ほつとした氣持ちに還る。

× × ×

建國以來、支那事變までの國都新京の建設のスピードは、新京の人自身が驚くほどで、きのふまでの高粱畑は、暫らく見ぬ間に、アスファルトの舗装路が貫き、政府諸機關と特殊會社などの建築が次々に營まれ、代用官舎や社宅の集團が次々と住宅街を形成してゐたさうである。今都心になつてゐる大同廣場など建設資材を運ぶ荷馬車の馬が、雨期には溺死するほどの泥濘^{ぬかる}み、又蘆衛つきで工事を行つたといふやうな、嘘のやうな話しを、建國早々來た人達から聞く。今55萬の人口を持つ國都として一應の形態を整へ、殊に都市の大同大街など、主幹線道路として立派な形をととのへるまでになつた今日まで其の建設に傾注された努力や資金、資材、勞力の並々で無かつたらうことに思ひ到るのである。然し事變の翌年あたりから矢張り本格的な建築が建たなくなり、大同大街の都心以南の兩側、其れに南新京驛から東にのび、新宮廷の前を経て建築局に至る興仁大路など、建設豫定敷地ばかりが續



新 京 大 同 大 街

いて道路と共に坦々としてゐる。新宮廷の正中線の方向に南にのびた官廳街にも廳舎寥々の有様で宛かも廣々とした郊外に散在してゐる感じである。滿洲國が事變以來、如何に其の建設を二の次にして、日本に共力し、産業の開發或は興農の面に重點を置いてきたか、かうした國都の様子から如實に感ぜられた。鑛工業の開發、農産の増産にあらゆる努力が傾注される第二次産業開發五ヶ年計畫の初年を迎へようとする矢先、大東亞戦争が始まつたのであるから、豫定數地に着々と建設がはじまる時期を推定する難しさが一層増したわけである。

集合住宅は、都邑計畫で計畫された住居地域に前述のやうな敷地を都心に残しつつ一團づゝ疎散して建てられてゐる。都心から離れた住宅街から勤務先への通勤、或は驛近くの舊附屬地商店街への日用品の購買が行はれるために、交通の問題は市内外の電車やバスに恵まれた内地の大都市とは比較にならぬほど切實である。

こゝ5年間の目まぐるしい狀勢の變化は「計畫通り完成すれば立派に且つ住みよくなる國都」を未完成の狀態に止め、完成まであらゆる不便を市民に負擔させることゝなつたのも亦己むを得ないことであつたが、然しこれを補ふ爲めに當事者のあらゆる努力が注がれなければならぬ狀態にたち至つてゐることも事實である。

× × ×

自動車やバスが主交通機關として計畫された新京へ私が來たのは、ガソリン統制のために既にそれらが主交通機關としての機能を殆んど失つてゐる時期であつたため、交通には尠からず閉口した。きのふまでキビキビした東京で暮らしてきたものによつて、長蛇の列をつくつて來ないバスを待つたり、途中で乗れぬために始發點まで行つて其處でまた列を作つて或る系統を二臺のバスでゆきゝしてゐるバスを待ちつゞけることは尠からざる忍耐を要する。それをせめても慰めるのは、大急ぎで進められた電車の軌道工事であつた。かうして昨年11月から電車が動きだして、交通難は半ばすくはれた。車輛の少い現在では、通勤時は満員でよく見送ることがある。しかし1年といふ月日は環境に順應する忍耐力涵養の期間として十分

らしく、さしていらいらしくなつて了ふ。ガソリン統制が強化され、代燃車にふりかへられてからタクシーも一時より増したし、電車の車輛も少しづゝふえて、多少は緩和されつゝある。バス待つ間、電車待つ間、また不便をしのんで買物に行く途次、都市建設上いろいろと検討を要する問題を切實に體驗することは、技術者にとつては何よりもよい經驗となるであらう。

× × ×

新京の住宅不足は殊に甚だしい。新京のやうに急激に都市建設が行はれ、都市人口がぐんぐん増加したところでは、今更事新しく述べる迄もないことかも知れないが、最近の調査資料に基くと、新京に於て次の數字を示してゐる。先づ内地人で家族の有るものに就いて、住宅のあるものと無いものゝ比率は下記の如くである。

	官公吏	會社員	其ノ他	計
有住宅者	6,472戸	11,595戸	4,470戸	22,537戸
無住宅者	542戸	1,167戸	578戸	2,287戸

即ち住宅の無いものは、官公吏に於て總數の7分7厘、會社員9分2厘弱、其の他1割1分弱、平均約9分2厘の比率を示してゐる。同じく内地人の獨身者に就いて、其の比率を調べると

	官公吏	會社員	其ノ他	計
有住宅者	1,643人	2,392人	550人	4,585人
無住宅者	481人	852人	433人	1,766人

で、其の比率は官公吏2割2分7厘、會社員2割6分3厘、其の他4割4分、平均2割7分8厘となつてゐる。

上記統計中所謂無住宅者とは現實に住む家の無いものゝみの調べであつて、狭い住宅に同居したり、假住ひしてゐる世帯戸數である。新に建設された都會は、原則として收容餘力に乏しい。その上にこれだけの負擔を荷つてゐるのであるから、仲々大變である。

それから官舎について、其の家賃を調べて見よう。官舎といふと無料のやうに聞えるが、滿洲國政府官舎は下表の如くである。

應接室(8)	8帖・6帖・6帖・3帖	82圓
應接室(8)	8帖・6帖・4帖半	70圓
	8帖・6帖・6帖・2帖	52圓
	8帖・6帖・4帖半	47圓

8帖・6帖・3帖	42圓
8帖・4帖半	32圓
6帖・4帖半	23圓

建設費が非常に騰貴した現在に於ては、ペチカを設備した規格住宅でも平方米當り 200 圓以上かかるから、50 平方米位の家で建設費約 1 萬圓、其の家賃を建設費の 1 分と見ると 100 圓となる。然し其の廣さの家に住む居住者の負擔能力は高々 50 圓位であるから、官舎や社宅はよいとしても、貧家の建設は殆んど問題にならず、一般の住宅は一層不足してしまふ。建設費を下げやうにも、寒さを凌ぐためには煉瓦壁は厚く、基礎は深く、外部に面する窓・扉は二重に、天井・床は耐寒的に、又

暖房設備、水洗便所などを施設するため、夏を旨として建てられる内地の住宅とは比較にならぬほど、坪當りの建築費がかゝつてしまふのである。

然しあらゆる困難をのりこえて、資金、資材、勞力の許す限りは建設しなければならないのである。住宅の質の問題、疊と生活様式の問題、又防寒に對する構造設備など、新京だけの内地人住宅の問題だけでも、まだまだ未解決の問題が山積してゐる現状である。

滿洲國に於ける漢・滿人の傳統的な住宅や新住宅に付ては別の機會に譲ることゝしたい。(完)

(筆者は滿洲國建築局總務處企畫課勤務)

34頁より 工業教育から學制改革案へ 中尾卜堂

である。これも要するに教育制度の缺陷と教員の人材不足が、その原因をなしてゐるのであつて、現状はまだまだ科學偏重と唱へ得る期に達しぬないのである。

とりとめもなき愚論を並べたてゝ見たが、詳細に記すには到底紙數がゆるさぬところであるから先づこれ位で止めて置く。近く「工業教育刷新號」の發刊を切望する。

三十三間堂の佛の數

世に三十三間堂（蓮華王院）の佛の數は「33. 333 體」といふが、33. 033 體といふのが本當である。いつ間違つたのか誰云ふとなく言葉の調子で、300を入れたのが誤りのもとであるが、あの佛像は千一體（實はそんなにないが）あるといはれてゐるが、これを拜むと佛力によつて一體が三十三體になるといふ。それ故 $1001 \times 33 = 33033$ 體となるわけである。「三十三間堂の佛の數は33. 033 體」

年代の錯誤

西國三十三番の一番那智山は、仁德天皇勅願所とある、幡州のある寺の縁起に、昔神功皇后が三韓征伐からお歸りの途中、こゝに御立寄りになり記念のために一寺を創建遊ばされのが即ち當山であるといふものもある。日本に佛敎の渡來したのは欽明天皇の13年である。少くとも繼體天皇の16年（司馬達は自らの信仰のため佛像を持つて來たが布敎したのではない）より前の時代に日本に佛敎のブの字すらない筈である。一體社寺の縁起などには、この種のものが多い。史實を無視した縁起は、何うも有難味がうすい。

筆者はかつてビルマを旅行した時、シュエ・ダゴン・パゴダを始め、ベグーの大佛等いたるところで、案内者は「B・Cの何年」と云ふから、一々「ウソをつけ、ビルマに佛敎の傳來したのは少くとも6世紀以後ではないか、B・Cとは何事だ」と叱つてやつたことがある。

善光寺の縁起にも歴史と約300年の誤差がある。大原寂光院の本尊が寺傳では聖德太子の御作とあるが、これは一見して飛鳥式の佛像ではないからウソだといふことはすぐわかる。昔あるところに珍書蒐集癖の人があつて、藤原佐理が書いたといふ徒然草を仕舞い込んでゐた、或人はその人に向

ひ「徒然草は南北朝の頃善行法師が作つたものである、藤原佐理は平安朝寺代の人であるから、徒然草などを寫す筈がない」と云つた、ところがその人は一向平氣で「書く筈の無い人が書いたのだから、これ程珍しい書はないではないか」と云つたとのこと。

秀吉と小堀遠州

豊臣秀吉は小堀遠江守政一に命じて桂離宮を考案實施せしめたといふことになつてゐるが、それは明かにウソである、成程桂離宮は秀吉が正親天皇の皇子湯光院の第六子智仁親王を謂ふて猶子とし、八條の宮と稱してその別墅を桂の里に造營したので、現存する舊御殿は即ちこれである。新御殿茶室、庭園等は二代智親親王の時、徳川氏が小堀遠州に命じて造らしめたもので、寛永の始頃に完成したと見るのが正しい。即ち元和の終りから寛永の始めにかけて小堀が伏見奉行であつた時代に造つたので、秀吉とは何の關係もない筈である。例の有名な三ヶ條の注文も、二代將軍秀忠が三代將軍家光に試みたものであらう。抑々小堀遠州なる者が天正7年の生れで、豊臣氏滅亡後元和9年に伏見奉行となり、在職25年の間に相當の治績を擧げた、茶道は千利休の門人古田重能に就て學び後に一家を成した。彼は實に萬能の士で、茶道の外美術工藝にも精通し、殊に繪は探幽と親交あつた關係上、狩野派の畫を能くしたと云はれてゐる。正保4年69歳で没した。この年代から算出すると、秀吉の薨じた慶長3年には小堀はまだ20歳で、殊に秀吉が桂離宮を造營した天正15年頃には小堀は9歳か10歳の少年であつた筈である。

左甚三郎は果して實在したか

日本のミカエル・アンゼロの如き存在である左

甚五郎なるものが果して實在したか、慶長から寛永までの間に造られた建築乃至建築彫刻に左甚五郎作と稱するものが随分あるが、左甚五郎の實在は頗る疑問である。これについて伊東忠太先生のお話を要約して見やう。結論は「否定すべき確證もないが、また肯定すべき證據もない」といふのであるが、極めて興味のある話である。次の如し——「歌俳百人撰」によれば、甚五郎は播州明石に生れ、後伏見に住し、寛永11年41歳で死んだといふ。もしこれが正しいとすれば、世間に傳へられた彼の逸話は大概虚偽になる、指しづめ伏見桃山城の落成は文祿3年即ち甚五郎誕生の年であるから桃山の建築や彫刻に彼が關係する筈がない。智恩院本堂軒下の料拱の間に挟まつてゐる骨斗りになつた傘は甚五郎が忘れたものと云はれてゐるが、この本堂は寛永16年の竣功、甚五郎はそれより5年前の寛永11年に死んでゐる。有名な日光東照宮の眠りの猫であるが、傳説によると甚五郎は一生に只だ二疋の猫を彫つた、一疋は大阪の四天王寺にあり、これが牡で、他の一疋は日光のそれで、牝であるといふ。東照宮は寛永11年起工、同13年の竣成であるから、勿論甚五郎死後の造營である。傳説中多少重要視すべきは近衛三藐院信尹が自邸の唐門の扉の一方は甚五郎に他方は甲良宗廣に命じて彫らせた、然るに甲良の方が優つたので、豊後の稱號を與へたといふのである。甲良豊後宗廣は徳川幕府の大棟梁で、日光廟建築の師長である。甚五郎の技倆が甲良に及ばなかつたとすれば、彼の手腕も亦知るべきであらう。尤も近衛信尹は慶長19年に薨じた人であり、彼が門に彫刻せしめたのはその數年前であると假定すれば、甲良は45.6歳の練達の時代、甚五郎は15.6歳の小僧であるから、相撲にはならなかつたかも知れぬが果して事實か——といふのである。

「劇と配景」と時相

寺小屋の劇を見ると面白い。菅公が出てくるから平安朝時代の物語りとして見るが、その配景は鎌倉後の建築であり、梶原源太が桃山式、役人は鎌倉式で、取手は江戸時代の服裝である。「何れを見ても山家育ち」の室内は勿論、兒童も「イガミの權太」も江戸時代の姿である。ひとり菅公の

みは平安朝型である……何とかならぬものか。

教育映畫「水兵の母」は日清戦争の時の話であるにも不拘、軍艦はドレッドノート以後の形で、海軍士官は日露戦争後の服裝である。「不如歸」の武夫は墓詣りの時でもまだ少尉の服を着てゐるのは何うでもよいが、片岡卅將は日露戦争後のカーキ色の軍服は可笑しい。先年教育映畫で「アルキメデイスの原理」といふのを見たが、その配景はローマ以後の建築であつた、また例の王冠であるが、これもルイ朝時代の王冠である、一體ギリシヤに王様など亞歷山大王前にあるべき筈がないギリシヤは都市國家の聯盟であつた、些細なことやうだが、兒童にウソを教へることはよくない、先年ニュース映畫でイブンツールンの大寺をサンタソフィヤだなどといふ説明入りのものを見たことがあつた、如何に日本人は建築に無關心であるかを表明するものとして不快に思つたことがある。

相撲の方屋

近頃相撲の「かたや」に神殿造(しんでんづくり)等と稱して神明造風のものが流行して來た。「相撲は神代から傳へたものだから神代風にすべきであり、これが故實である」等と稱する人もあるが、一體故實には「コジツケ」が多い。方屋を神明造風にするにはもとより賛成である、けれどもコジツケや認識不足はよくない。第一「神殿造」などといふ様式は日本にはない、神明造風にするなら「男性」を選ぶべきである、大底は千木の切り方は男性(水平)であるが、葛緒木(勝男木、勝魚木)の数は女性(偶數)になつてゐるなほ方屋は神代からあつたものと考へることが間違ひである、方屋の最初は信長の安土の上覽相撲から出來たものとすれば、その様式はいふまでもなく室町式か桃山式のものであつたに相違ない、ただ「日本的」といふ意味に於て神明造にするには少くも差支へはない、四本柱の青龍、白虎、朱雀、玄武も皆支那から來たものである、故實であるが如く装つてゐるもの、大半は江戸時代の易から出たものが多く、節會相撲のそれとは縁の遠いものである。

(筆者は中尾建築事務所長)

……… 梅原龍三郎と谷崎潤一郎と溝口健二 ………

1.

Gustav Mahler の “Das Lied von der Erde” と云ふ作品がある。これは獨唱曲からなる交響曲で、李太白、錢起、孟浩然、王維の詩が Hans Bethge により、獨譯されて歌はれて居るが、近頃私はよく此の音楽を聞く。慌しく過した1日の終りなど——それも夜遅くと云ふよりは夜半過ぎなどに、Thorborgの歌ふ告別の一曲に耳をすまして居ると、もの静かな然も力に溢れた大地のにほひが、清澄な室内にたちこめて、心の中に鬱勃たる共感を誘ひ起し、こうした気分は軽い興奮となつて、思考のひと時を過してしまふ。

幸なことに私の家は、分厚い壁と岩乗な建具から出来て居るので、部屋さへ閉めきつて置けば、夜中であらうと、早朝であらうと、レコード音楽程度の音響では別に迷惑をかける心配はない。それをよいことにして、夜半のひと時をレコードに楽しむ事にして居る。

此の小文、大地の歌と云ふ。それはかうした休息のひと時に、何時とはなしに私の頭に浮んだ考へへの一端を書いてみたいと思つたからである。

×

日本は美しくなつた。

この冬大いに雪が降り、今年の木々の花の色はさらに新しい。

われらの吸ふ朝じめりの美味しい空氣は

いまや大いなる東亞の空氣

竹の葉の一枚づゝ金にきらめく

この初夏のうるはしい日の光は、いまや日本のかがやき。

一人一人のためらひとかなしみはすでになく

いまや鐵砂の磁石に寄せるごとく、われらの心は祖國にむかふ。

わづかの野菜と鹹い魚によつて、われらの眼はかがやきをました。

洗はれたる如く、家々に不用のものはなく、
子供らの繼ぎたる衣服の美しさよ。

……………

永瀬 清子

「國家」と云ふ意識が、各個人の心の中で、この様に見事に開花し、この様に身近く、この様に深く、愛情となり、決意となり、そして崇高な美となつた時代は、いまだかつて在つたであらうか。永い間の歴史の忘却からの、目ざましい覺醒と、そしてこの半世期の間の世界史への登上ぶりは、我が國家の過去の歴史に於ても、又過去のどの様な國家や民族の歴史を繰つてみても優るとも劣るものはない。正にこの様な時代こそ、文化創造の一端を受け持つ我々には、千歳一遇の機會と云はざるを得ない。

私は新しい文化と云ふものは、どの様な明哲の思索に依るものであらうとも、客觀的な傍觀的な推理によるのみでは、決して創造せられるものではなく、大いなる愛情に満ち溢れた、主觀的な逞しい没我的境地に於てのみ——我を忘れて、眞に愛好する我々の仕事に突入して、然もそうした行爲が、我々の國を思ひ、世界の幸福を考へる事に迄正しく昂騰せられた時にこそ——創造せらるべきものと考へて居る。

今は其の時代である、私は近頃、時々ふと此の様な高熱の感情に襲はれては、我々の進路を靜かに考へてみるのであるが、かうした時に、しみじみと私の心の中に浮び上つて來るものは、梅原龍三郎、谷崎潤一郎、溝口健二の名前によつて代表せられるであらう一つの性格である。

何故、私がこの様な人々の名前を思ひ浮べると云ふに、一言にして云へば、かうした一聯の作家の中に、燦然と輝いた我々の體臭を一番身近に讀みとる事が出来る様に思ふからである。これは

私のみの感情であらうか。

人によつては、かうした性格は、あまりにも土のにほひが強烈にすぎると云ふかも知れない。世界を制覇すべき新しい日本文化と云ふものは、もつと高燥の、空の様な擴さの中から生れ出るものだとか考へるかも知れない。然し、私は、日本の眞に正しい文化の根源は、先づ濕潤の大地の中から芽生えねばならぬと考へて居る。これは知らず知らずの中に私の胸の中に奥深く呼吸してしまつた日本の體臭のためである。故郷の大地のにほひのためである。それは歐米のどの様な土の中からも決して芽ぐまなかつた所の強靱な肉體である。それは底知れぬどろ沼の中に正面から敢然と挑戦して、猛烈な格闘努力のあとに、晴々と掬ひ上げた清澄の寶である。泥がつき、土の臭が強烈であるかも知れぬが、それはいづれ燦々たる太陽の光によつて、大氣の中に客觀的には洗ひ去られてしまふべきものである。

近頃、私の最大の魅力は、かうした我々の濕潤の大地のにほひである。

2

現代の日本人畫家の中で、誰が一番好きかと聞かれたなら、私は、猪熊弦一郎、藤田嗣治、藤島武二、安井曾太郎、中山塊、と十指に餘る名前を次々と思ひ起し、一寸其の選定に迷ふ。しかし誰を一番畏れるかと問はれるなら、私は梅原龍三郎氏の名を擧げるに躊躇せぬ。

梅原がフランスでルノアルに師事した事は有名であるが、梅原は「ルノアル翁の追憶」と云ふ一文の中に、彼が習作をルノアルに展げてみせるとルノアルはしばらく黙つて見入つてから

「非常に不思議だ。何處が日本人だらう。全くスペイン人の繪だ……君は色彩を特つ。デッサンは勉強で補ふ事は出来るが、色彩はタンペラマンによるものだ。

それがあるのは甚だよい。」

とほめられることが書いてある、比較的色彩感の貧困な日本人の中にあつて、梅原の豊かな色感に壓倒的なものがある。日本の藝術論には、じきにわび、さび論が擡頭して、一部の人はすゝけたじめじめした小さな世界の中に我と我身を引き込むものであるが、かうした世界の人々には全く考

へられぬ強烈な色の世界を梅原は我々に示してくれる。而もそれは濕潤の大地の我々のものであるそして、梅原のこの色は、ルノアルをして世界の繪畫の豐穰の地、ピカソ、ミロ、グレコ、ゴヤ、ヴェラスケスの郷土をもしのばせたものであつた

武者小路實篤氏は

「梅原の繪は必然から生れた繪で、梅原自身の顔のやうなもので、自分で變へることも出来ないし、はたで批評したつて始まらないものがある。草の花のやうなものである。だから梅原の繪には生長があるが變化はない、自己の個性を生かしきることのみで仕事が出来……」

と云はれて居るが、正面から充分の確信を持つて何等臆する所なく、堂々と突進して行く力と氣韻に、私は先づ壓へられるのである。

今から4年前の初秋、私は北京に在つて、あの鬱葱たる緑の樹木の中に燦然たる黄金色の紫禁城の屋根を眺め、又驚く程に美しい青空の下で、天壇を仰いだのであつたが、そうした興奮の中で寫した寫眞には、すい分と失望したものであつた。歸京後、東京でも、天壇や紫禁城の繪や寫眞を、少からず見る事が出来たが、又其の都度失望を重ねた。然し、此の私の失望を全く氣持よく拭ひ去つてくれたのは梅原であつた。あの天壇や、紫禁城の繪畫は、私にとつては繪と云ふよりは、北京の生きものであつた。そして此の時なども、私は梅原の藝の源に、私の感ずる日本の大地を見たのであつた。

1年程前、私はふと家の附近を散歩して居て、偶然にも「梅原龍三郎」と墨書された見なれた筆跡を表札の中に發見した。それは黒塀にかこまれた、簡粗な木造の住宅であつた。一階にくらべて二階の面積が割合に多い、東京によくみられる家の一つであつた。私は、その歸途、非常な嬉しさが胸にこみあげて來て止まらなかつたのを、今でもおぼへて居る。

一番嬉しかつたのは、あの様に日頃から懷しんで居た藝術家の家が、案外私の近くにあり、そしてそれが我々の近づきやすい住宅であつたと云ふ事である。

高度の尊敬を持つた藝術をみると、それを造つた人は勿論、それが造られた場所や、それを造る

に使用した家や道具に迄、何か神秘的な感情を持つのが人情である。私の喜びは、それが案外私の身近に、手のとぎさうな所にあると云ふ事であつた。これならば、此の自分でも何か出来るぞと云ふ、形而上の確信に似た一種の感情を持つて一人で朗であつた。

然し、私が、かうした事で、此の様な喜を味つたと云ふ事は、又何時の間にか、私が梅原氏の藝の發する郷土のにほひに、強烈にとらはれて居たと云ふ事でゝもある。

×

繪の梅原と稱すれば、文學の谷崎と、私は率直に書く事が出来る。

私は、昔小説家に成らうと考へた時があり、當時の友人達にも、類は友をよぶとかの例で、さうした方面に興味のあるものが多く、漱石、直哉、鏡花を始として色々と讀みふけり、特に横光利一氏の「機械」「日輪」「上海」川端康成氏の「伊豆の踊子」などに就ては、何もわからぬ三文文士ながらも「僕ならこうする」などと、各自一人前の文藝批評家のつもりで、口に泡を飛ばしたりしたのであつたが、谷崎の「春琴抄」「盲目物語」「吉野葛」と云ふあの一聯の作品を前にした時は、正直の所唖然としてしまつた。谷崎の比較も初期の作品「二人の雅兒」は、私の非常に好きな一つでこれなどは後期の作品と一脈似た所を持つて居ると云ふ事が出来よう。實際、かうした後期の作品には、何か匂ふが如くたちこめて居る、懐しい日本の姿が感じられる。

私は小説が好きで、現在迄の所相當多くのものを見て來たつもりだが、これ程迄に深い感銘を受けた作家と云ふものは、大學の豫科時代に Hans Caross の “Der Arzt Gion” の原文を習つた以外にはなかつた。

毎年、東京の冬が終つて、春光などやかな3月4月になると、天氣のよい日曜の午前など、私は離れの十帖をあげ放して、太陽の中に寝そべりながら「吉野葛」を讀むのを楽しみにして居る。大和の吉野の奥には、未だ旅行した事はないのであるが、あの文章を讀みさしては、時々目をふせると、遠い昔の懐かしい歌が、しみじみと心の底に響いて來る。そして、これ程迄に我々の心をゆり

動かす、強烈な大地のにほひはどうしたものかと何度となく驚いたものである。

一般に谷崎の藝のせまり方と云ふものは、非常にじつくりと、鷹揚にかまへた、正面切つた正攻法的なもので、然も大地に深く根ざした雄大な氣品の中には、常にキラキラと輝く、朗々たる氣韻が、我々の心をゆさぶる所にあらう。かうした力と云ふものは、正に、非常な努力と非凡な決意——それも一度は非常な泥臭の中を敢然と通過して來た事によつてのみ得られるものではないのであらうか。

谷崎氏は「藝談」の中で、安田靉彦畫伯の言を引用して

「巨大な藝術家と云ふものは不必要に自分の技をみせびらかさない。なるべく内輪に藝に含蓄を特たせようとするから、案外不器用なのではないかと思はれることがあるが、實は決してさうではない。俳優に限らず大作家と云はれる人は、一藝一能を得意とする群小作家の技量などは悉く備へて居るものだ。そんな所を疾うに卒業して來てゐるのだ。不器用どころか、やらうと思へばどんな悪達者なことだつて出来る。たゞそんな眞以をしなだけだ。團十郎も恐らくさうであつたらうが、自分は橋本雅邦翁の繪について常にそれを感じてゐる。世上往々川端玉章の作品を褒めて玉章には雅邦も及ばない所があると云ふ者があるが、安んぞ知らん、雅邦に玉章流の繪を畫かせれば、玉章以上に巧く畫く。自分は嘗て雅邦翁のさうした作品をみたことがある。

と云ふ話を述べ、一藝に秀たものゝ峻烈な修業の話を書かれて居るが、此の一文は甚だ味ふべきものであると思つた。

現在の我々建築家に最も必要なことは、かうした雅邦型、團十郎型の勉強をつむ事ではあるまいか。私は、かうした文章を讀むにつけ、現在の我々が、稍もすると藝としての腕をみがく努力を蔑にして、客觀的な抽象論に終始し、どろまみれなあゝした態度を冷笑し、自己欺瞞によつて自分の腕の至らなさを慰めて居るのを感じ、汗顔の思を禁じ得ない。私は——特に現代の様な時代に於ては、先づ對象と正面から堂々と四つに組んで、如何なる強敵といへども、それを屈服せしめねばやまぬ自信を持つ必要を痛感するものである。若輩の我々の如きは、當分は、地味な勉強第一と考へ

て、そうした過程に於ける苦しみを、人が何と笑
ほうが、自分の信ずる思惟の中で、泥まみれで、
のたうち廻らねば、ほんとおの日本の建築などは
我々の時代の手に依つて造れるものではない。一
人前の建築家に成るのは、それは40、50の歳から
で結構である。

私は時々、かうした感激に魅せられて居る。

×

眞正面から睨む精神。四つに題材に組みついて
何が何でもそれを討ち倒さねば止まぬ必構へー
ーかう云ふものを最近最も切實に、我々の目に示
してくれたのは溝口健二氏である。眞正面から堂
々と闘を挑んで、失敗すればそれと一諸に討死し
て何等臆する所のない精神は、近頃私の心に爽快
の氣をよび起したものであつた。そして溝口は、
時々そうした討死の姿をみせつけてくれる。

映画の演出家としての溝口の腕は、彼としては
未だ完成の域に達して居らぬかも知れぬ。實際
「小島の春」に於て豊田四郎の示したあの身を切
る様に痛烈にせまる感覚は感ぜられず、又最近の
大東亞戦のニュース映画に見られる様な清らかな
明るいきりしズムも彼は持たぬ。然し「祇園の姉
妹」から「残菊物語」を中心として「浪花女」「藝
道一代男」に示された強靱な烈々たる粘りは、最
近作「元祿中臣藏」の中にも、正面切つた眞摯な
努力と成つて、みづみづしく表はれて居る。

正に、これらは濕潤の土地からほど走り出た大
地の歌聲の美しさである。

2年ばかり前であつた、大學の教室に、我々の
實驗をテーマとした文化政書を寫しに、或る會社
からロケーションに來られた事があつた、其の時
の監督のA氏は溝口氏の門弟であると云ふ事で、
溝口氏の演出ぶりを色々と説明してくれた。

溝口の一カットの撮影の長さは非常なもので、
5分、10分と續くものがあり、然もさう云ふ長い
場面は必然的に、撮し直しが多く、一カットに一
晝夜を費す事も少なくない云ふ事である。全く、
あのくらひの意氣込と眞剣さでやれば、我々でも
あれくらいの仕事は出来ますよと、其の時の話に
花が咲いた。

私は、溝口の作品では「残菊物語」が一番好き
である。私の母の里が、目白の鬼子母神近くであ

り、小さい時にはその附近に遊んだ事があつたり
した關係かも知れぬが「残菊物語」には、特別私
の郷里の臭がした。

3

泥臭さ、土のにほひと云ふものは、藝として、
最後に完成せられた場合には、何等目については
ならない。そうした最後の姿と云ふものは、何の
苦勞もなく、何の野心もなく、伸やかな、さらり
とした氣品ある姿であらねばならぬ。

然し、現在の私には、かうした泥臭さの中に押
し入る事が、かうした泥沼の中で、膝を埋め、顔
をよごし、無涙の力と組み打つ事こそ、最大の魅
力である。私には、そうする事の中にのみ、眞の
日本の文化の眞髓が得られる様な氣がするのであ
る。

日本評論であつたか「新文化の創造」と云ふ討
議の記録を最近讀んだのであるが、其の中で、和
辻哲郎氏は

「よいものがわからぬ様なものには、文化の創造は出
來ぬ。よいものが何かと云ふことは、それを造る人の
みがよく知つて居る。樂だらうが、苦しからうが、自
分の目指してゐるものを作るより外はない。それを精
魂を盡して軍人に負けない様に命がけで作ると云ふ緊
張でやるより外はない。自分の肩に國家の重さを感じ
ながら、精魂を盡してやると云ふ覺悟が大切である」
と云ふ意味の事を述べて居られたが、私は全くさ
うだと思つた。

×

熱帯樹しげる南島に
わが天花 華ひ下るとき
零下四十度の北邊にありて
防人は吹雪に埋る
このころ
寒熱を超えて季節を飛躍し
たゞひたすら天道に連なる
昭々たよかなこの道や
古往今來二つあるべからず
.....

蔵原伸二郎

現在はかうした詩が、高らかに歌はれる時代で
ある。

1

俗に「軽い讀物」などいふことばが涼を求める夏から秋にかけて流行るものであるが、今日まで「重い讀物」などいふ言葉を聞いたことがない。音楽には「輕音楽」飲物には「輕い飲物」といつたやうなことばが日常用語に平氣で使用されてをるが、いざとなつて嚴密に調べてみると、存外その限界性があいまいもこととしてゐるのに氣が付く。なのに「重い音楽」だの「重い飲物」などいふことばは今日まで全然使用されてない。語呂の上から言つてピンと來ないからかも知れない。が、へ理窟をひねるだんになると「重い音楽」や「重い飲物」などもあつたつてよい様な氣がする。もつとも病人の飲む「重湯」などいふ言葉もないではない。

ところが工業方面の言葉になると「輕工業」や「重工業」が對語として語呂の上から言つても調子よく變んな響きと與へず使用されてゐるのであるから不思議なものだ。然るに最近の軍需工業の寵兒たる飛行機には「輕飛行機」といつた用語がスポーツ用又は自家用の飛行機(主に外國雑誌等)に用ひられてをるが、反對に「重飛行機」といふ言葉はあまり聞かない。ところが軍用機のなかには「重爆機」とか「輕爆機」といふ對語が盛んに行はれてゐる。而もこれなどは飛行機の型から見て頗る實感が伴つた用語である。斯くの如く「重い」「軽い」が對語としてよく引き合に出される用語を挙げれば、即ち「重油對輕油」「重傷對輕傷」などがあるが、又一方しかないものでは「重箱」だとか「お手輕料理」であるとか、或は「重體」で面會謝絶であるとか、又は「重罪犯」などといふ様な用語が行はれてゐるのは誰でも知つてゐる。だが「輕箱」だとか「お手重料理」とか、さては「輕體」、「輕罪犯」と言つた類ひの用語は

あまり聞かない。こんな風に考へてゆくと、ほんとうに我々の使用してゐる日常用語は變んなものである。それでゐて或る程度の用は足りて行くのだから不思議なものである。

2

建築學に我々が使用してゐる所謂術語なるものも、嚴密に調べると實にあいまいなものが多い。例へば住宅とか、住家であるとか、民家などの用語は一通り承知してをるものとして何等不思議を起さずに使用されてをるのであるが、いざ明確なる概念を文にしてみやうとすると、以上の如き用語が一向に明きりしてないことに氣が付くであらう。又單に住宅といへば敷地を含んだ一構の全體を含むものか、或は住家といふのは住宅の内の主家のみを指すものであるか、又は附屬家及附屬設備、門、庭、樹木等全部を總稱したものが住宅で、住屋はそのなかの主家のみの謂ひであるか嚴密に検討して來ると、我々の言葉が頗るあいまいもこたるものであるのに氣が付く。

技術上の専門用語として用ひられてゐる術語には存外その内容が明確でないまゝに、只科學的響きと與へるといふ文けで、譯もなく使用されてゐる新語が可成あるのを知る。そしてそれ等の用語を使用することによつて、最も平易に表現さるべき事柄を頗る難解なものにして、それが如何にも學問的などと思ひ込んで、獨善的科學を振廻す者が存外多い。而もその割に彼の用ひた六ヶ敷い用語の一つ一つに對して嚴密なる意味が一向に検討されてないのに驚かされる。例へば「合目的々」であるとか、或は一時的流行を極めた「××する心」などは只單に流行を追ふとしか思はれないものである。或は又科學的研究論文と稱するものには日本語の文を書いて居ながら、獨逸語からの翻譯語

の如きギコチなき文を草して學問的などと思はせる手などが、相當盛んに用ひられたものであるがこれなどは若い我國の科學者と自らウヌボれてゐる連中のものする研究論文に多く見受ける例である。貧困なる思想や學問上の内容の空虚さを用語の六ヶ敷しさを以つて偽裝することも、或は昨日までの我國の學科する手段の一方法だつたかも知れない。だから或る科學の研究室の皮肉屋さんは或る時次のやうなことを言つてをつた。實驗結果を寫眞機に寫し取つて記録すると云ふ様に記述しただけでは、どうも此の寫眞機なる用語が通俗的で科學的でないから、寫眞機の代りに「實驗結果永久記録機に」といふ用語を挿入して報告を書けば、内容の如何に拘らず、多少は高く評價されるに決まつてゐる。と、我々の建築學上の用語にも、以上の如きものが存外多いのではなからうか。

ことばは、或る事柄を傳へんとする一つの符號のやうなもので、その目的を達するには最も簡明なることを必要とするのは申すまでもない。だから科學的に説明するからといつて、敢て上下を付けたやうに、しやちこばつた言葉を引き出して解釋を難解にする必要がない様に思ふ。ところが一般的に平易に書かれたものを科學的でないとする傾向がないでもないで、時流に敏感な學者達はその一般的趣向に投じて可及的に彼等のアルバイトを高く評價せしめんとするのは無理からぬことであらう。

だが大東亞戰の大戦果は東亞共榮圈に於て日本語を最も正確なる意味を以つて而も最も本易に使用する事の要請が日々昂まつて來たのは我々の等しく認めてゐるところである。此の時期に於て、永年の懸案であつた漢字制限やカタカナの使用法が決定されたのは、何んとしても時宜を得てゐることと思ふ。

3

まづ使用する言葉の本易化が行はれてから科學の民族的性格などが必然的明確にされるのでありませう。即ち科學の日本の性格は大和民族によつて明にされ、且つ當然發展さすべきものであると信じてゐる。だからこれを育成發展せしめる研究の必然的條件を挙げれば、大體次の如く要約でき

やう。

- 1 日本の地理的環境の特殊性の研究
- 2 日本民族の特質に關する諸研究
- 3 日本特有の古來より發達して來た諸事象の科學的研究

以上の觀點から今日まで我々の前に展開された諸研究を分類してみると

地震、地下資源、日本の氣象、地文、動植物などの研究は(1)に屬し、日本建築や日本人の體質、疾病、衛生、衣、食、住などの研究は(2)に而して美術、工藝などで我國獨特なるものゝ科學的研究は(3)に屬するといふことができると思ふ。

京大の横山氏が故藤井博士と協力して日本人の體格に適應する各種標準寸法の規格化への根本的研究を根氣よく長い間續けて居つたことを知つてをるが、あれなどは明日の日本の性格を持つ建築設計者への最も基本的なる資料の一を提供したものであらう。かゝる資料に乏しかつた我國昨日までの建設者は、各自銘々で参考とした外國圖書の寸法に倣つて勝手な大いさを机や椅又は其他の容器に與へて來たものである。だが先例に物を言はせたり、外國依存による翻譯科學の横行しをつた昨日までの日本科學は、かゝるじみな研究を高く評價せんとしないのみか、現實的な建設面に應へ得る日本の諸課題の研究の如く學位を取り難い學問には振り向かうともしなかつた。

4

從來日本的な科學の貧困は何に基因するかといへば、それは科學に對する我々の態度及心構にあつたといふことができやう。科學知識が如何に向上しても、從來の如き態度や心構をあらためぬ限り、日本科學の貧困は續くとみねばなるまい。

そんなら、從來の我々の態度や所謂「科學する心」はどんなものであつたか。私はこれに對し次の如き諸點を指摘し得る。即ち(1)學問の歐米依存(2)新歸朝者と稱する學者の歐米崇拜(3)科學教育の制度上の缺陷などがこれであらう。

例へば外國の最も特殊な或る地方の山中の或る湖水にすむ魚類に關しては極めて造詣が深いといつた類ひの日本人科學者は存外多いが、さて日

本内地の湖沼に対する人工養魚の適性を徹底的に研究するといった如き割合にじみで損なものゝ研究と取り組む科学者が存外無いとしたら、これは何を物語るものであらう。

由來日本的な科學には文献資料が乏しいので、研究其の他に非常なる困難と闘はねばならないのみならず、日本のものであるが故に一段低い段階を以つて評價され勝ちの傾向があつたに反して、文献の多い諸外國の事象の研究に對しては、語學の力のみによつて可成の程度までなし得られたのである。そして我國の諸學會の研究家と稱する連中の多くが、此の種此の程度のものであつたことは何等辯解の餘地ない事實であらう。

我々は斯くして翻譯文化（丸善文化とも云ひ得やう。）の全盛時代を築いて來たワケであるが、今や米英又は獨逸圖書の入手が殆んど不可能になつた。そして科學の教室にタムロする無數の學徒は事實上大狼狽のテイタクであるのは甚だみづともよい圖ではない。だが今こそ日本科學獨立の絶好の機會であると私は寧ろ心強い感じにうたれてゐる。

5

日本的であるが故に學問的價值をすくなしとする米英依存の學者は必然的に撃滅されねばならない段階に達したのではないか。だが、まだまだ我々には他人の辨當を美味いとする習性は何處かにひそんでゐるのを警戒する必要がある。これがとりもなほさず遠きは美しく近きは醜であるといふ一種特別な心理作用を構成するのである。こゝに歐米崇拜への思想的萌芽の源泉があるやうに思へる。

かゝる習性が、日本人の世界的研究が、その研究者が日本人であるが故に日本人間に尊重されず埋れるといふ結果を生ずるのである。たまたま外人間で重要視されに至つて、初めて内地日本人間の問題となつたといふ様な事例が今日まで珍らしくなかつた。これなどは甚だ醜態の限りであるといはねばなるまい。派閥性の強い我國の學者（特に官學派の連中）は學問のなかでイージーゴイングを望むが故に知らず知らずのうちに排他的性格が培養され、眞の學者的良心といふものを何處か

へ置き忘れて來たといふ結果となつた譯であらう。これはあながちかゝる學者ばかりをせむる事の出来ないのである。何故なれば我々の何處かに「中味が腐つて居ても三笠のレツテルを求めんとする心理作用」があるからである。だから我々自身が此の點を深く反省し、科學に對する心構を自らあらためてかゝらねばどう仕様もないことであらう。

6

最近漸くにして科學の日本的性格が反省され大和民族の持つ科學の獨創を強く尊重せんといふ空氣の臺頭して來たことは、大東亞戰下に於ては當然なこととせう。そして我々自らの生活を通じて「科學する」事の要求が次第に昂まりつゝあるのを窺知する。斯様に科學の生活化は、科學を大學の圖書室や教室に求める前に「科學は身近から」といふことを意味してゐることと思ふ。であるからまづ家庭から郷土から、そして日本全體へと展開し、其處から日本的科學の獨創性を深く堀り下げ、さらにこれを東亞共榮圈全體に、斯くして我々の科學を世界的にしてこそ、我が大和民族の持つ科學性に強靱性が與へられ、世界の科學を指導する礎石を置くことになるのだと思ふ。

7

おやおや「輕快な讀物號」への隨想をものする積りが、遂にゴチゴチな議論めいたものになつてしまひさうだから、此の邊で「さて」と居直つてみて所謂「輕さ」へとベンの方角をもどさう。大戦争と建設とを併行して實踐しつゝある今日、占領地域では恐らく猫の手も借りたい程人手の不足を痛感してをることとせう。このときに中央30%地方20%、現業10%の大整理を斷行して、大陸に南方にそれ等の人々を差向けてやらうといふ親心を持つ東條さんの實踐力には只敬服の外はない。これだけの困難な仕事を見事やつてのけたのであるから我々は安心して國是の命するまゝに行動すればよい筈である。國民の實生活の視察から産業戰士への溫き奨励の言葉を東條さん自らがなしつゝある今日（こんな素晴らしい首領は望んでもめづたに出現するものでない。）2年や3年そこそこ

で、首領たる椅子を引き下つてもらひたくないと
思ふ。出来るならば何時までも居て、國民を指揮
してもらひたいものだと思つてゐる。歴代の首領
に對した如く、國民も今までのやうにあら探しば
かりやらないで、如何したら何時までも我々を指
導して頂けるか、そして其の爲に如何にしたら東
條さんに首領の役目を永く引き受けてもらへるか
を研究し、東亞共榮圈否世界に命令を發する指揮
を永く永く守り續けるやうにしたいものだ。

かゝる指導者があつてこそ、今日の過大に膨脹
しつつある大都市の整理分散に對し、只單に机上
の空論でなしに、實踐し得る力強い政治力が附與
され、國土計畫も地方計畫も而して都市計畫も、
軌道に乗り得ることになるだらうと考へる。

空襲に對して安心出来る都市は、民族増強にも
貢獻し得るものだし、力強い兵隊さんの源泉たる
乳兒の死亡率をも減退し得る譯である。だから國
家が總力を擧げて大戦争遂行途上にある今日、戰
争遂行を阻碍するものは、飽くまで排除しなければ

ならない。そして長期戦下の現段に於ては、恒
久的對策の實踐によつて、我が民族の強靱性を増
々發揮せねばならない。そんならばこの強靱性は
何によつて求まるかといふことになるが、まづ第
一に産業の地方分散と脱み合しての都市の疎開工
作を斷行することであり、これが計畫は國土計畫
の重要な對象としてのみ、根本的解決が考へら
れるべきである。

幸ひ、最近では、工場の規正地域を指定する道
も開かれたし、又工場の在り方を助成する手段
も附與された譯であるから、我々の信賴する東條
さんの大英斷を以つてすれば、都市偏在によるあ
らゆる國家の病弊除却の基礎を据へる事は、必ず
しも不可能なことであるまい。そして總ては、我
々建築界も「關西の日本建築協會」や「關東の建
築學會」も必然的揚棄されて、大國民として以上
の國策へ實踐的に協力し得る強靱なる政治力把握
の段階に達することになるであらう。(17.7.30)

(筆者は住宅營團東京支所建設部勤務)

38頁より 新興木構造の理論と實際 宇賀神行一

付く様な研究心の逆りは40日間苦心慘憺として仕
上げた數枚の設計圖になつて現はれた。

筆者は寫眞版中の蚤の卵の様な文字を蟲眼鏡で
眺め乍ら讀み入つて居る中に嬰樂たる氏の研究心
と其の理想に感激させられた。

新興木構造の前途も同様に尙模糊たるものであ
るかも知れないが、研究に身を打込んで居るもの

には設計圖が何んな小さな模型にでも現實化せら
れた時には、他の誰にも味はうことの出来ぬ喜び
に浸り得るのである。

終りに本文の謬説に就いては先輩諸彦の御賢導
を得、他日一書に取纏め度いと念願して止まない
次第である。(了)

(筆者は日本ライト建築株式會社技師)

工業教育の改革は急務中の急務であり、これを斷行するには必然的に一般の教育制度から改善してかゝらねばならぬので廣範圍に及んでくるわけであるが、幸今日各方面に於て學制改革が叫ばれ出したので、參考までに愚考を述べて讀者の參考に供したい次第である。

工業教育の現状

現在の工業教育は工業學校、高等工業學校、大學の三段階あるが、何れも不徹底な中途半端な教育をやつてゐる。第一工業學校では基礎學の不充分な者に學問を無理につめ込んで不消化のまゝ卒業せしめるので、學問は無駄となり、實地にも訓練が足りない。それ故工業學校の卒業生は實地については職工、大工に及ばざること遠く學識の足らざること高等専門學に及ばず、何處となく物足りない。

高等工業學校——これまた中途半端な存在である。すべてが大學類似の學問を強いてゐながら年限があまりに短いため、半解りのまゝ卒業して仕舞ふ有様である。殊に最近年限短縮のため専門の學術を授ける期間は僅かに1ケ年に過ぎぬ、即ち第1年は高等數學、物理、化學、高等圖學、外國語等殆ど基礎學で充たされてゐる。第2年になつて始めて専門の學科が出て來たかと思へば、すぐ第3年(1學期しかない)には卒業設計なり、卒業論文なりに費してしまふが故に、落ついて研究するには時間的に許されない有様である。これでは何のために高等數學や、その他の基礎學科をやつたのか全く意味をなさぬことになる。甚だしき無駄な存在である。

扱て大學は何うかといへば、これまた學術の蘊奥を極める最高學府でなく、何のことない技師養成所に過ぎぬ。即ち工學部は技師を、醫學部は醫者を、また文科系統は辯護士や官吏、新聞記者を養成する純然たる専門學校に過ぎぬ。それにしても2年半では不充分であり、且つ高等學校の3年はなが過ぎるといふことになつてくる。

現在の専門學校を廢止せよ

一體今日まで技術者を養成するに三段階の機關のあることが無意味である。

職工、大工の上に實地に當る中堅技術者(技手技師)と指導的技術者さへあれば、それで充分ではないか、即ち物の樞機に參畫し、計畫、設計をするものと、その計畫なり設計なりに基づき完全に施工せしめる監督者と、實際に仕上げる職人さへあればよいのである。それ故差當りの案としては工業學校を1年延長して6年とし、2年を豫科4年を本科とすれば、大體に於て今日の缺陷を補へると思ふ。都島工業ではこれを行つてゐるが、今少し學科や實習に改變を加へれば、理想に近いものとならう。

大學は中學校(4年制)卒業生を入學資として2年の豫科、4年(文化系統は3年)の本科を設けること。理科系統では工業學校でも、大學でも何れの學校に於ても、専門の學術を授けるには何うしても4年のはかゝる。これを見捨てては充分な教育は出來ぬ。4年の間に人格の陶冶といふこともあり、體育のこともあり、また兵式教練もすべてを加算すれば、相手は人間である以上4年乃至5年を要することになる。それに大學でも、工業學校でも、夫々最低2年の豫科を設けて基礎をつくる必要がある。これも無視することの出來ぬ重要な事項であることを忘れてはならぬ。大學豫科を止めて、中等校を6年制にせよといふ論もあるが、それは工業方面だけならばそれでもよいが陸、海軍その他の學校との關係上年齡の問題で不適當となつて來るので、現在の中學校を1部學科の改變で4年制にすることは何の方面から考へても妥當といふことになつてくる。これには相當の

反對者もあらうが、大局的見地からまた一方學科その他の細目から觀ても、中學を4年制にすることは寧ろ當然といふべきである。

大學院を最高學府とす

大學を卒業したる者を一度社會へ送つて、夫々の分野に於て體驗せしめ、適當なる時期に學究的な人々のみを大學院に入學せしめるのである。これは陸、海軍の大學校に相當するところとする。從來の制度は小學校から連續的に學問せしめることになつてゐるが、眞の學術の研究は連續的よりはインターバルを置いた方が効果的だとは陸、海軍の體驗から唱へられてゐるが、確かに良さうに思ふ。

大學院は優秀な學徒を集めて3年乃至5年位の年限で學術の研究に没頭せしめるところとする。政府はこれに多額の費用を入れて思ふ存分研究せしめることである。學生の生活費も勿論與へるのである。大學院は全國を通じて少數でよい。現在の綜合大學だけに設置すれば充分である。例へば東京、京都、大阪の各帝大及び私立の早、慶兩大學を加へた五つぐらゐで澤山である。

各種學校——以上の他國民學校、高等科を卒した者を入學せしめる1年乃至2年ぐらゐの各種學校を設ける。これは土地の事情を考慮して、夫々農、工、商を始め各種に亘るべきものであつて、教育機關でなく練習機關とする。それでは徳育の方はおろそかになるといふ者もあらうが、それは全く訓練の仕方一つである。修身の學科はなくとも、少年航空兵は入隊後僅か1ケ年で誰でも君國のために生命をささげることが無上の光榮とする修養がちやんと出來てゐるとのことである。修身の講義も決して無意味ではないが、それよりも人間を造るのは訓練である。たゞ問題は教員を如何にして造るかにある。

教員養成の機關

國民學校の教員は中學校を卒へた者に2年、國民學校高等科を卒業したる者に4年、前者を第1部、後者を第2部とする師範學校を設ける。

中學校の教員は、大學の卒業生を以つてこれにあてる。工業學校その他も大體これに準じてよい

大學の教授、助教授は大學及び大學院を出た者を原則とする。

最も困難なものは各種學校の教員であるが、これには特別な機關を設けず、試験又は檢定で定めるのも一方法であらう。

學校を良くするには、教員の質と數とに負ふところ極めて大であるが、現状は全くこれと反對である。「いつそ死なうか教員しょか」等の言葉の残つてゐるやうでは、何んなに制度だけ立派に出來ても、その内容は空虛である。何にしても教員に人材を集めねばならぬ。それには第一物質待遇を思ひきつてよくせなければならぬ。1割や2割の増俸等は問題でない。先づ今日の2倍乃至3倍にすべきである。それが適當である。

第二は精神的優遇である。今日専門學校や大學の教授達は割合に恵まれてゐるが、國民學校や中等學校の教員にも、もつともつと精神的優遇を考慮する必要があらう。また社會的地位もずつと向上せしめねばならぬことはいふまでもない。此際當局は申譯的優遇でなく、思ひきつた優遇法を考へることが急務であらう。教育のことは1日も等閑視出來ぬとは當局も考へてゐるところであらうが、さて具體的のことになると、何時も豫算の關係上、思ひ切つたことが出來なかつたのである。

私學へ相當額の補助をし且つ監督をせよ

私學でも早稻田や慶應、その他二三の學校は財政的にも恵まれ、歴史もあり、私學としての特徴を發揮し、一方の大本山としての存在意義を充分に示してゐるが、その他の私學は大半財政的に貧困である關係上、設備の不完全はいふまでもなく教職員に有能の士を集めることは、殆ど不可能の現状にある。これでは私學としての意義をなさぬもともと私學は中心人物の徳を慕つて集つて來たものである。

吉田松陰の松下村塾の如きは、その最たるものである。今日の私學には中心人物もなければ學風もなく、官立學校の入學試験に落第した者の救済所に過ぎぬ。それでもよい。入學試験そのものが完全無缺でない限り、これに落ちた者の中にも入學者以上の人物もないとは限らず、また學力に於ても必ずしも劣つてゐる者ばかりと斷定出來ぬ。從

來は私學が玉石混合であつたことも特徴の一つであつたのである。何にしても私學は官學の補助機關であつても別に差支へはないが、一方に於て私學は私學としての特徴を發揮せしめるやうにせなければならぬ。新しい試みはすべて私學でやつて見るがよい。それ故設備と教員優遇のために私學に思ひ切つた補助を與へ、且つこれを監督するやうにすれば、好成绩が擧げられると思ふ。政府は無理をして官立學校の増加と學生生徒の増員を行ふよりは、この方が何れだけ効果的であり、且つ便利であるか知れぬ。なほ經濟的でもある。

所謂學校屋を撲滅せよ

今日各種學校の經營者の大半とはいはぬが、所謂學校屋と呼ばれてゐるものが相當に數多くあるのは誠に遺憾である。即ち學校を食ひものにしてゐる連仲である。彼等のやり方は實に巧妙を究めてゐるがため、表から見れば立派に装つてゐるがその内面に至つては驚くべきものが多い。經營者の私腹を肥すために教員も生徒も父兄もその犠牲になつてゐるのである。こゝでは詳細を述べることは略するが「學校屋」の存在こそ教育界を毒する最も甚だしきものである。此等學校屋なるものを一掃すべきである。それには各種學校へも補助監督を必要とするであらう。

低能兒に學問せしめることを止めよ

菊地寛氏は低能兒には尙更學問させと云はれたが、それは抽象論として一應成り立つかも知れぬが、人的資源のやかましい時、國家的見地から見れば、これ程人的に不經濟なことはない。低能兒は學問に不適ではあるが、他のことをやらせば必ずしも低能兒ではない。また一方優良兒は何とかして官費でゞも上級學校へどしどし進めるやうな途をつくつてほしい。

こゝでいふ低能兒とは勿論病的の低能兒を指すのではない。學科の講義を何うしても理解出來ぬ頭の持主を云ふのである。例へば〇〇工學校の本科機械科第3學年に「直角は 45° です」とか「 60° です」とかといふのがあつた。こんな人間にムツかしい機械工學の講義を聞かせて何の役に立つかといひ度くなる。〇〇高等〇學校の生徒に……

數學で計算の結果 $\sin x = \cos x$ となつたまではよいが「 $\therefore \sin = \cos$ 」といふのがあつた。

某大學専門部商科の學生に「so far as we know」「as well as」「step by step」等の英語は解らないのが居た。また pamphlet を「パンプーヘレット」と讀んで澄ましてゐるのもあつた。「過渡期」「主觀」「客觀」等の日本語を知らぬ學生も居た。低能兒とはこれ等を指していふのである。分數の通分すら出來ぬ者に、高等數學を教へて何になるか、この種の人間でも労働者にすれば一人前以上の働きが出来るかも知れぬから、その方へ使用すべきである。

文科系統の學校を半減せよ

法科萬能思想は今日も尙依然として残つてゐるが、この種の觀念を一掃せしむることも急務である。土木を知らぬ法學士が、土木行政の運用だけで土木部長の椅子に洽まりかへつてゐるやうでは駄目だ。一體官廳にしても、會社にても支配階級の大部分が文科系統（法科、商科……）の出身者であるが、これは意科系統（工、農、醫……）に人物が少いといふ關係もあらうが、法科萬能思想の影響するところ極めて大なるものがある。醫者は「大醫國を醫す」等といふ言葉のある通り、橋本左内以來相當な人物も續出したが、他の方面では概して「技術者」として物の隔壁に參畫出來ぬ地位に置かれてゐるのが現状である。これ等は全く教育制度の缺陷から來る現象に他ならぬ。それ故理科系統の學校を増設すると共に法政、經濟等の學科を置くことである。この點論すればながくなるから略するが、要は「陸、海軍に倣へばよい」といふ一言につきる。

例へば商業學校を廢止して經理學校と貿易學校に分ける、その數は現在の3分の1でよい。他は皆工、農……等の學校にすべきである……等々。

科學偏重にはまだ遠し

近頃「科學偏重」だとか、教育は教學であるが「學」が過ぎて「教」が足りないなどといふ人もあるが、それ等の多くは法科出身で、認識不足の人々である。科學偏重どころか、科學的研究の基礎教育はまだドイツ等に比して及ばざること遠し

（以下21頁へ續く）

IX 養生に就て

新興木構造に於て養生は不可缺の手段として、次の諸要項に基き充分手を盡さねばならない。

- ① 組立又は建て方完了後
- ② 屋根材葺込完了後
- ③ 竣工満一年後

(1) 組立又は建て方完了後

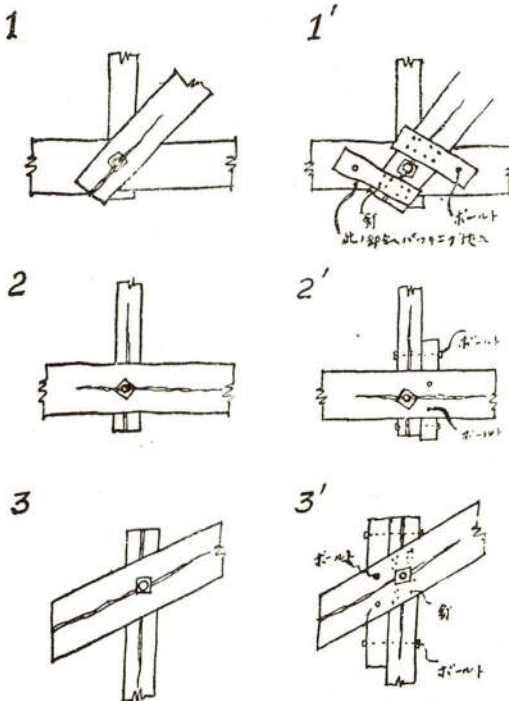
建て方完了後に於ける養生は骨組検査と相俟つて行はる可きで、主として建て方完了後使用せる部材の割裂又は繊維方向、節等の影響に依り構造に支障を來たす虞ありと認めらるゝ場合、茲に謂ふ養生が行はれる。

單位部分が容易に取り外し得るものは、新規な

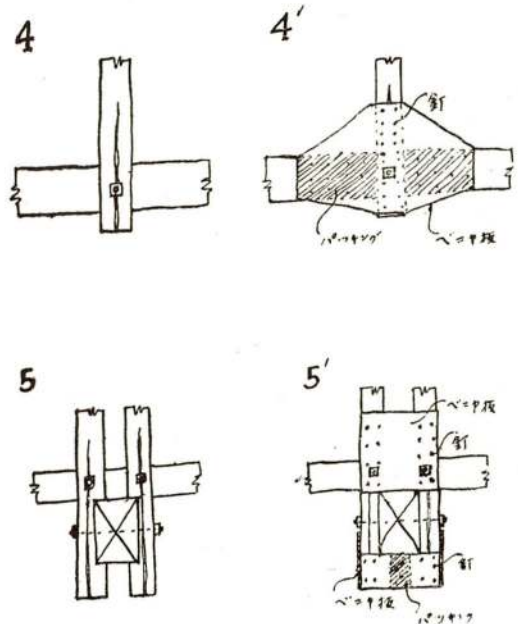
ものと交換す可きであるが、部材中には容易に取り外し得ないものがある。又不良部材を取外すことに依つて構造に一大支障を齎す様な場合は適當な補強方法を構する必要が起る。

補強には第 112 圖に示す如き方法が適當と思はれる。

これは主として複合材の結合格點附近の割裂を如何に養生すべきかと云ふ一案であつて、比較的簡単な補強法はパツキングを挟入して大釘又は割裂を免れた材端部にボルト締めを行ふのである然し材端の割裂が數條に亘り到底圖示した様な養生が出来ない場合は、鐵板又は同一寸法の部材を當て木の様に配し應力を分擔せしめる。時として格點のボルトが著しく長くなつて差換へに困難な場合は、筆者は第 113 圖の様にベニヤ板を數枚併合して釘打となし補強して居る。



第 112 圖



第 113 圖

建て方が全部完了した後と雖、屋根材葺き込及び壁體完成迄には相當時日を要し、其の間、風や地震等の悪影響に依る變形を考へれば、骨組の養生が絶對的に必要になつて来る。

普通の本構造に依る場合は簡単に壁貫程度のもを筋違に配するのみであるが、新興木構造に於ては既に構造物自體の塑性を確保せんが爲に筋違方杖等は充分施してある筈である。然し尙未完成の中は小屋組又は軸部等に變形の虞があるので、一層嚴重な養生を施す可きである。

(2) 屋根材葺き込完了後

小屋組は之に屋根材を葺き込んで始めて落付くものであり、更に壁體を完全に仕上げ終ることに依つて、先づ構造物の自重に基く變形を見ることが出来る。

複合材に依る組母屋に屋根材を葺き込むと、多少共變形するのは、主としてボルトの締め不足が原因の様である。勿論デベルが變位防止に大きな役割を果たして居るものとは云へ、尙ボルトの使命は蔑に出来ない。

屋根材葺き込後の養生は各格點に於けるボルトの締め直しにあるのであるが、實際問題としては屋根裏に這上つてスパナを振り廻はす如きは甚だ非能率的なことであるから、建て方完了後入念にボルトの締め直しを行ふ方が適當と思はれる。

此の際ナットを玄能で打叩いて其の音の如何で點檢するが、片捻子ボルトで數材を締め付けたものはワシヤとボルトは充分締つては居てもボルトの頭部に間隙があり、その部分のワシヤが遊んで居る例もあるので、兩側を完全に點檢する必要がある。

屋根材葺き込後、これには積雪及風壓等に依る最大荷重が外力として加はるのであるから、構造物が充分これに耐へ得られる様、各格點の完璧を期さなければならない。

鐵骨構造と大いに異り、新興木構造の短所は實に此の格點附近の取扱に極めて周到な注意を要する譯である。

筆者の経験からすると、應張材の材端には比較的故障も少いが、複合材を以て構成する應壓材の

材端には往々割裂、扭捻等に依る故障が起る。この救済方法としては、應壓を受ける稍長い複合材には努めてパツキングを挟み固定する必要がある之は建方完了後又は屋根材葺き込後の養生法として一考すべき處である。

屋根材葺き込後、天井を張る構造では兎角小屋組故障箇所の檢出が輕んじられる。例へば弦材等に建て方作業中の不注意から毀損箇所があり、光が直接間接に構造物の強度に重大な支障を來たす處れあるも、天井裏として敢へて養生を施さず見逃す如きは寒心に耐えない。

(3) 竣工滿一ケ年後

新興木構造に於て竣工滿一ケ年後に何故養生の必要あるかに就いては、其の主たる材料が自然物である木材を使用して居るからである。

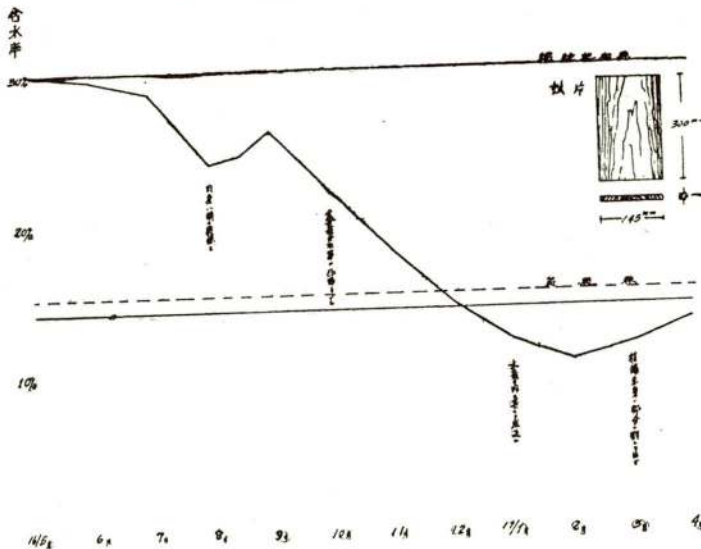
木材の一大缺點として其の含水量に依る體積の變化が、構造物竣工滿一ケ年後に於て必ずしも完全な状態に安定するものとは斷言出来ないが、大體春夏秋冬の氣候的變化に従つて一應の状態に稍安定するものとして養生を施す必要が起る。

第114圖は筆者が製材後纖維飽點即ち含水率30%の杉材を屋内に一ケ年間放置し觀察した一表である。

この表にも現はれて居る様に、氣乾點15%以下の含水率になると、木材が反り返つたり、割れが出来ると云ふ木材の缺點が直に構造上に影響を及ぼすものであるから、竣工一ケ年以後に於ては是非共構造物の養生を行はなければならない。

養生としては、ボルトの締め直し、部材の變形の甚しいものは適當な措置を構じねばならぬ。其の方法は部材に對し前述した様な補強を試みることである。又木材に對しては腐蝕と虫害に付常に注意を怠つてはならないのである。白蟻の害は今更茲に述ぶる迄もなく、彼等の旺盛なる繁殖力に賣せて置けば數年ならずして構造材は悉く空洞にされて終ふ。

同様に腐蝕菌の害も多い。高温多湿なる條件は腐蝕を増大せしむるものであるから、腐蝕に對しても充分警戒し、萬一腐蝕又は虫害を受けた時は徹底的に驅除し、構造物に適當な養生を施さねばならない。



第 114 圖

獨逸に於ては早くより木構造設計規準に防腐處理の必要を述べて居たが、最近吾國に於ても漸く法的に要求せられる様になつた。

茲に構造物完成一ケ年後の養生の必要を述べ來つたが、現實の問題として、果してこの作業が行はれるか否かに對しては次の諸項が非常に大きな障害となつて居る。

- I 養生をなす費用は請負業者のサービスとなすべきものなりや……
- II 既に工場倉庫等に使用せられて居ると屋内に種々の障害物があつて、思ふ様な養生が出来ない……
- III 施工者は養生を非常に面倒に思つて居る。

然し如何なる原因があるにせよ、萬難を排して養生をなすことに依り、新興木構造は其の使命を全ふ出来るのである。

X 新興木構造の將來

新興木構造の將來を論ずるに先立つて、新興木構造は Wissenschaft 即ち學であらうか、それ共 Knnst 技術であらうかと云ふことを検討して見度い。

新興木構造が單に机上で論ぜらる可き Wisenschaft であるなら、其れは實に理論到れに終るか

も知れない。然し其れは一つの技術として吾國に於ても漸く新分野を拓きつゝあることは否まれない。技術は學を伴ひつゝ進歩せねばならぬと云ふ命題からしても、各々單獨に存立するものではあり得ない譯である。

兎角今迄木構造と云へば古き因襲の域を脱し切れなかつたが故に學的には非常に取残された感じがあつた。無論之には種々の原因がある。

大工の使ふ曲尺には申譯的なメートル目盛りが刻んである許りであるし、第一根本的に大工其者の頭がメートル化出来ないのである。

この様に木構造に對する計算規準が學と術との間に一致出来ない上に規格と云ふものが實に不統一である。今日漸く木材統制の實現を見た程で今後此の木材規格が如何に術の上に影響を及ぼすかと云ふことが問題である。

大工の手法に到つては千年不變の技術と云ふよりも益々退歩して來たと思はれる様な仕口や繼手を作つて居る。

更に建築に於て學と術とを疎隔にするものは請負制度の缺陷と云はねばならない。即ち時間的に能率を早めて利を追ふ爲には勢ひ入念な作業が出来る譯もなからう。之は大工側にも非があるが、請負者或は施主にも一廉の責任がある。

新興木構造は手掛ける先から、作業の困難を訴へ、泣きを入れるのが大工の常である。其處で種々大工の氣嫌を取りつゝ作業を進めて行くと、彼は請圖に不慣な上に新手法に對し積極的に頭を働かせないから工數が非常に嵩んで、極局工賃に喰はれて終ふ。

此の場合の責任は大いに現場監督者にあると思ふ。一例が複雑な圖面から現寸圖を作る際、又型板から刻込及建方等從來の木構造と手法が異なるのであるから充分指導してやる必要がある。

デベル等の打込、締付等全くやり難い作業に違ひないが、一回より二回と慣れるに従つて、其の作業には又格別な味があるものである。

新興木構造の將來に取つては作業の習熟と手法の合理化が大いに關係するものと思はれる。作業の合理化とは同一部材の刻込にハンドボールやゴムネ等を用ひて非能率な作業を續けて居たのでは甚だ此の目的に沿はない。現場施工に於ても木工機械を努めて利用すること延いては規格化せられた部材の工場生産へと移行しなければ、新興木構造の實の特徴が發揮出来ない譯である。

次に鐵物使用制限の強化が新興木構造の將來に暗影を投げ掛けて居るかの如く傳へられて居るがボルトやデベル等の鐵物は構造物全體に對する資材の極めて一部分である爲め、この程度の資材の入手難を以て構造そのものゝ將來を決するとは思はれない。

近時特許局發行の發明公報にも漸く建築部門の發明が其の數を増し、中にも第 115 圖及第 116 圖の如き河野博士の軸ボルトの發明は新興木構造に新しい道を拓いたものと見られる。デベル到つては昨年より公告せられたるものでも 23 件を數へて居る。

新興木構造は發明狂の案出した架空な理論ではないのであるから、地に足を履み付け、未曾有の超非常時に對し、吾等建築人の技術報國を全うす可き一手段でなければならない。

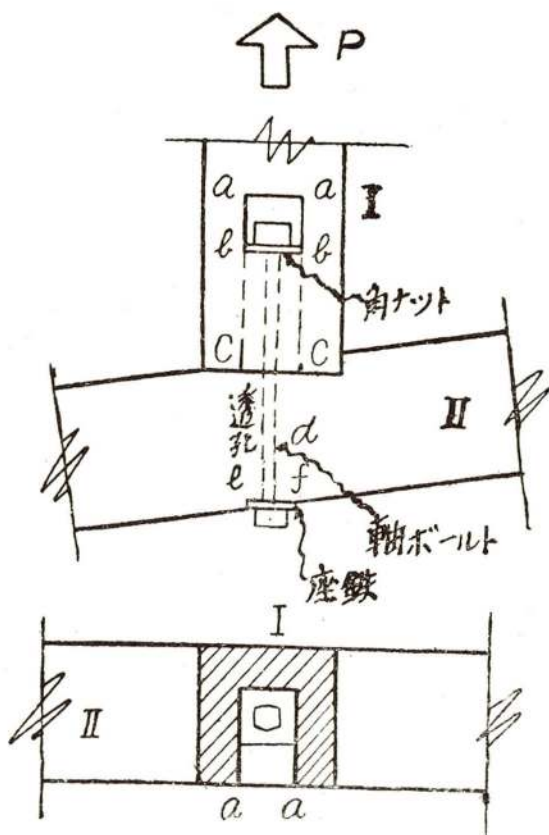
然し時代は如何に移行しよう共、經濟的觀點を離れた技術は實用化せらる可くもなからうし、又拙劣で美的觀點を忘却した建築技法では世に請け容られる筈はない。

其處で新興木構造は、技術的に美的に又經濟的諸點に於て從來の木構造に卓越してこそ始めて其の將來性が確約されるのではなからうか。

Ⅺ 結 言

昨年 11 月號より 9 回に亘り、本誌の貴重なる紙面に拙き一説を連載賜つたことは筆者の誠に喜びとする處であるが、もとより淺學菲才の身に於て理論云々等聲も高々に銘の打たる可き研究ではなく爲に毎號印刷せられた杜撰なる論旨に赤面して居る次第である。

殊に參考文獻等種々引用す可きも、本年中は出張多く、其れも殆ど現場より現場と云つた不自由



第 115 圖



第 116 圖

な場所での執筆の爲め、前後も重複し勝ちで、且參考寫眞が手許に入手出来なかつた爲め、實際方面も全く上りのものに終つた様である。

其の間、各方面で着々新興木構造の手法が地を履みしめつゝ實施せられて居ることは、誠に喜びに堪へない。

恐らく新興木構造にも一定の規格と云はうか、型式と云はうか、先づ明治初年に西洋式木構造の手法が移されてから King post 或は Queen post と云つた小屋組が全く日本化せられた様に此の新手法も日本化せられなくてはならないと思ふ。

前々號に伊藤氏は 79 才の高齡にも拘らず、燒き
(以下 31 頁に續く)

木材統制の概要

市原 彌 太 郎

去る7月23日、7月例会「木材に関する講演會」を、株式會社清水組大阪支店に於て開催
聴取者100餘名に多大の感銘を與へた。大阪府林務主任官市原彌太郎氏御講演の速記録。

ただ今御紹介にあづかりました市原でございます。大阪府廳にをりまして、木材その他の林産物の關係をやつてゐるものでございます。これから木材統制の概要につきましてお話致しますが、消費者としての皆様方に少しでも御参考になれば幸ひと思ふのであります。

御承知の通り昭和16年6月1日より木材統制法が施行せられましたが、木材統制法の目ざしてをります所は第一に木材の計畫生産、第二に木材の合理的な配給、第三に公正なる價格の維持、この三點に歸着するのであります。第一の木材の計畫生産につきまして、木材統制法におきましては色々のことを規定してゐるのであります。要する所は森林收穫の保續といふことでありまして、換言致しますれば過伐にならず、しかして資源の死藏にならず、又伐期の到來してゐる、詰り利用的確の木材はこれを惜しみなく供出して國家の木材需要に振向けるといふことをもつとも計畫的かつ合理的ならしめんとしてゐるのであります。この問題につきましては、木材消費者であられる皆さんは直接の御關係がございませんので、この程度に致しまして、次には配給の合理化といふ問題につきまして申し上げたいと思ひます。

木材統制法におきます配給の合理化、換言致しますると、需給の圓滑を期するといふ問題につきましては、まづ木材業および製材業に對しまして許可制を布いたのであります。しかしてこれによりまして木材の重點的需要に對して優先的な配給を致し、最少の生産費をもつて木材の供給を行ひ配給の合理的な處置を講ずる、換言致しまするならば、最短距離の配給経路をもつてし、しかして最少の經費をもつて配給する、かういふことになるのであります。かゝる目的のために木材および製材業を新たに營まんとするものは、すべて行政

長官、すなはち地方長官、又は主務大臣の許可を要する、かういふことになつたのでありまして、本年の5月31日をもちまして、一應從來の木材業者ならびに製材業者は全部御破算となり、しかして6月1日以降におきましては、新たなる形態をもつて、木材業ならびに製材業が生れまして、今申しました木材統制法の企圖致しまする所を遺憾なく實現しようとしてゐるのであります。

次は價格の統制の問題であります。木材の生産が計畫的に行はれ、かつその需給關係が圓滑に行はれるためには木材の價格が公正でなくちやならぬ、元來價格が不當な騰貴を致しまする部面に對しましては、動もすると不必要に物が集中するといふことは經濟上の原則であらうと思ふのであります。かゝることのないやうに木材の需給が片寄らないやうにするためには、價格を公正に維持して行くといふことが絶対に必要に相成つて來るのであります。今申しました需給の圓滑をはかり、價格の公正を期し、しかして最初に申上げました生産の計畫的な實行と、その保續といふこの三つの目的を達成するために木材統制法におきましては、日本木材株式會社ならびに地方木材株式會社を設置することになつてゐるのであります。日本木材株式會社の主なる仕事は、わが國全般の木材の需給の調整と、價格の公正、これは價格の差をプールすることによつて、價格の公正をはからうといふのが、日本木材會社の主なる仕事であります。さらに日本木材會社におきましては生産の計畫性ならびにその保續の實現のために生産に必要なべき資金および物資の調達、これには製材機とか製材用の油、ベルト、或は勞務者の衣類、地下足袋など色々ありますが、それら物資の調達配給に當るのであります。もう一つの地方木材株式會社は、地方的な木材の需給の調整なら

びに價格の公正をはかる以外に日本木材株式會社より資金の融通を受け、さらに又その地方的な資金を集結致しまして、地方的な木材の生産を行ふのであります。

御承知の通り日本木材株式會社は、すでに創立總會を経て、各種の陣容を殆ど整備致しまして、東京に本社を有し、資本金5千萬圓であります。政府はこれに出資は致してをりませんけれども、これが配當の保障をする等、政府と密接不離の關係にあるのであります。わが大阪市におきまして、大阪に日本木材會社の支店が設けられましてそれぞれその與へられた業務に活躍されてゐるのであります。地方木材株式會社は現在北海道に一つあるのみでありまして、いまだその設置を見てをらないのであります。その代り現在は地方木材會社に代るべき中核體といふ形態のもとに各府縣ならびにその府縣におきましても、地方的に林業の集中されるやうな狀態の所を區劃致しまして、各何々縣木材株式會社、或は大阪府林材株式會社等いづれも地方木材會社ではなく、地方木材株式會社の中核體と稱せられてゐるものがあります。先程申し上げました通り、木材統制法におきまして、木材業者は全面的に企業の特許を得なければ、これを營むことが出來ないことになつてゐるのであります。日本木材株式會社ならびに地方木材株式會社は規定の上におきまして、その許可の指令を要しないのであります。許可なくして木材業ないしは製材業を營むことが出来る。なほ木材業を許可なくして營めるものに道府縣ならびに森林組合及同聯合會が農林大臣の特別の指定によりまして附加へられ、現在この四つが特別の許可を受けないで、木材の生産ならびに販賣することが出来るのであります。今さらに申し上げます地方木材株式會社の中核體の各會社は、いづれも木材の企業許可を申請致しまして、その許可を得て各木材の配給生産等に携つてゐるといふ狀態になつてゐるのであります。

しからばこの木材統制の對象たるべき木材とはいかなるものか、すなはち日本木材會社ならびに地方木材會社およびその中核會社、これらすべての木材會社の統制對象とすべき木材の範圍は如何かういふことについて御説明を申上げる必要があ

らうと思ふのであります。こゝで木材と申しますのは丸太、杣角、挽割、挽角のごとき製材製品を包含することは常識上勿論異論のない所でありするが、さらにベニヤの單板、或は合板、仕組板下駄材、腕木、經木、これらのものはいづれも木材統制法によつて、その生産、配給、價格について統制を受けるのであります。わが大阪市およびその附近、これを假に都市部と申しておきますがこれを大阪府木材公定價格第一地區と定め、この地區におきまする地方木材株式會社の中核會社に相當するものは御承知の通り、今申しました大阪木材株式會社であります。従つてこの會社におきましては、今申しましたすべての木材ならびにこれを原料として出來た樽丸、下駄、腕木、經木、かういふものゝ集荷ならびに配給の統制に携はることは申すまでもないのであります。大阪府下におきまする公定價格第二區ならびに第三區と稱すべき大阪市を中心とする都市部を除いた他の比較的農山村の部類に屬すべき地域におきまして設置されてをりまする地方木材會社の中核體は、大阪府林材株式會社といふのがあります。この會社は大阪府下におきまする木材の生産、配給ならびに價格等多くの木材統制に必要な各種の業務を實行する會社であります。かくのごとくして木材は生産、配給、價格の統制およびその合理化の實現について一應の機構は整備せられるに至つたのであります。

次にしからばかくのごとき機構を通じて大阪市内にいかにして木材が統制的なる供給、換言すれば荷受および配給、價格の取扱が行はれるかについて申上げたいと考へます。

從來大阪市内はわが國における最も大きな木材の集散市場であることは、皆様すでに御承知の通りでありまして、最高時におきましては、丸太の材積に換算致して、大體1千萬石の木材を集荷し、かつこれを消費し、又これを配給してをつたのであります。しかしてこの1千萬石のうちには米國から輸入されました米松その他のいはゆる米材、南洋各地で生産せられます、就中比島、ボルネオを中心として生産せられてをりましたいはゆる南洋材および樺太、北海道のごときわが植民地方面において生産せられましたいはゆる移入材、その

他朝鮮、臺灣、滿洲等に多少生産せられましたものも入荷致しますと、内地各府縣の生産にかゝる各種の木材が合されまして、先程申しました1千萬石といふ大量に上つてをつたのであります。その後戦争の進展に連れまして輸入がだんだん困難になり、米材、南洋材等の入荷は急角度をもつて減少致して参つたのであります。さらに又植民地の樺太材を中心とする移入針葉樹におきましても船腹の不足等による輸送の困難、ならびに生産地における森林の開発、その他生産上の種々の要素における障碍等のためにこれ又非常なる減少を示しまして、わが大阪市場における木材は、専ら内地材に依存しなくてはその運営を完全に行ふことが困難であるといふ情勢に立至つたのであります。最近におきましては對米戦争によりまして米材は一本も入つて参りません。又ラワン、チーク其の他各種のいはゆる南洋材なるものも、産地が交戦地域となりました關係上、わが皇軍の勇戦奮闘の結果、これを占領地域としてその支配下に置かるゝに至つたのではありまするけれども、産地における生産事業は殆ど廢止の状態にあるといふ風に伺つてゐるのであります。よしんばこれを出材されると致しましても、御承知の通り船舶の不足は到底木材のごとき容積の大きな割合に價格の低いものゝ輸送を許さないことは常識上凡そ判断がつく所でありまして、これら南洋材も目先の目透しと致しましては期待することが出来ないといふ状態になつてをります。滿洲材、臺灣材、朝鮮材等につきましては申すまでもないことでありませうが、これ又その姿が殆ど市場から沒したの感があるのであります。樺太材、北海道材の針闊葉樹につきましても、現在の生産地には比較的出材が出来てゐる所もあるやうなことをきいたのでありまするけれども、これ又船舶の關係上、大阪市場にこれを求めるといふことが至難な状態にあることは、皆様すでに體驗せられてゐる通りであります。従ひまして現在における木材の給源は内地の各府縣の生産、ならびにきはめて少數でありまするけれども、最も確實で手近なものは大阪府内の生産にかゝる木材であります。これらの木材を大阪市場に荷受致しまして、大阪木材會社の手によつて配給される、かういふことになるのであります

するが、昭和16年には丸太の換算材積で大體8百萬石の木材が入荷してをつたのであります。この中には情性によつて入つて参りました輸移入材も多少含んでをりませうし、又これがストックの消費規正によりまして持越されたものも包含してゐると考へるのであります。8百萬石といひますと、相當多量の木材が入手出来たといふ結果になり、各内地の生産にかゝる木材が大部分を占めてゐる數字として考へますのに、木材配給の業にあたられた業者各位が、かくも多量の木材を集められたといふことにつきましては、私共と致しまして大いに敬意を表してゐる次第であります。この大量の木材を入れるについては餘程の苦心をせられたと考へます。これに對しまして本年(昭和17年)はいかになるかといふ問題でありまするが、本年の木材の入荷につきましては何人も的確なる見透しをつけることは恐らく困難であらう、かやうに考へます。しかしながら農林省におきましては一應生産地に對しまして生産の割當を命じ、大阪市場に供出すべき木材の最少限度の數量を指定してゐるのでありまして、この數量はまだ正式な通知には接しないのでありまするが、大體聞く所によりますと、丸太材積に換算致しまして5百萬石とのことであります。8百萬石が5百萬石に減するといふことは相當な減少でありまするが、しかもこの5百萬石も産地の生産事情、ならびに公用材の生産地に對する發注等の現況より推察致しまして餘程の努力をしなければ、この5百萬石の入荷を確保することは困難な問題ではなからうかと心配してゐるのであります。このことにつきましては、私共及ばずながら大阪木材株式會社の各位と協力致しまして、出来るだけこれが確保に努力致すつもりであることをこの際特に皆さんに申し上げたいのであります。

さてしからは皆さんと直接御關係のあります建築用材は、どういふ状態であつたかと申しますと、昭和16年度におきまして8百萬石の木材のうちで、大體建築に向けられたと思はれる數字は44%に上るのでありまして、約半分に近い數量が建築材として使用されたといふ調査の結果になつてゐるのであります。昭和14年におきましては89%、15年が35%、16年が44%、これらを引括めて大阪

に入荷する木材の40%は建築材として消費されると推定しても當らずとも遠からざる數字であらうと考へるのであります。しかし昭和17年におきましては、今申しました5百萬石のうち40%の數量を建築材に向けることが果して可能であらうかといふことを非常に心配するのであります。今日の木材の需要の状態から見ますと、各種の軍需關係材包装材料その他器具機械等に相當重點的な見方をして配給しなければならぬものが相當多數に見受けられるのであります。40%の數量を建築材料として向けることは相當至難ではないかと申上げるのほかないのであります。しかして建築界における實情と申すものは、住宅建築の制限、その他他の建築資材の配給難等のために從來のごとき建築事業を豫想することは出来ないに致しましても、もともと總體の數量において3百萬石の減少を見、かつそのうち占めるべき比率においてさらに40%を下廻るのではないかといふことが豫想される現状におきまして、建築用に仕向けるべき木材の數量は、いかなる程度の減少を見るかといふことは、凡そ皆様御想像がつくのではないかと考へるのであります。この減少の程度は建築量の減少に比べまして、さらにその程度が高いのではないかと考へる所に問題があるのであります。この木材の不足をいかにして克服して行くかといふことは、結局において木材の消費者が消費の規正をするといふことを第一に考へなければならぬことは申すまでもないのであります。さらに又一面においては木材を使ふ上におきまして、これを最も合理的にかつ重點的に使つて、木材の消費規正は木材を消費するもの、ならびにこれを使用するもの、この両者が協力して、これを徹底的に研究實行するのでなければ、かくのごとき木材の供給減を乗切することは、ますますもつて難しくなるのではないかと思ふのであります。皆さんは多年の間各種の建築に關する色々の御經驗をお持ちになり、かつ御研究を重ねて參つてをられるのであります。さらに本年は木材の消費について杓段の御研究を願ひまして、以上申述べました木材飢饉を乗切る、しかして最もその利用價值を高めるやう、詰り合理的な消費規正についてさらに一段の御研鑽を願ひしたいのであります。

次に木材の形質の問題について附加へて申し上げます。これは常識的にも大體において推定出来る所でありまして、從來使つてをつたごとき長材を使ふことは生産地の各地の事情より考へまして困難であります。それで長材を使へないといふことをお考へおき願つて、從來繼目のない長材を使つたものを短いものを繼ぎ合して使はなくちやならぬといふ場合が極めて多くなうと思ひます。又産地にストックされる期間が輸送の關係上、比較的長くなることが豫想される所より致しまして、木材の生産より消費までの期間が勢ひ延長されて参りますから、その間における天然の被害を受けることが多いのであります。詰り腐朽變色等の現象を見る場合がより多くあるだらうと思ひます。さらに又人爲の被害ならびに虫害等木材の損傷が少くとも減少するのではなくて、多くなるといふ見方が正しいと思ふのであります。これらの關係のみより致しましても、木材の形質は低下することは否定出来ないであらうと考へるのであります。

次に樹種の關係であります。裝飾的な意味に使はれてをつた木材と致しまして樺、しほじ、楠および檜のごとき特種の闊葉樹の種類に對しましては、これは三等材以上で、大形のものは軍需および船舶、車輛用材以外には使ふことが出来ないといふ指定が行はれてをりまして、これを一般建築に向けることが自由でないであります。このことにつきましても、豫めお含みおき願つて、木材消費の合理化に一層の御研究をお願い致します。

次に木材の價格のことを少し申上げて見たいのであります。大阪市部、換言致しますと木材公定價格第一地區に入つて参ります木材は、先程度々申しました通り、大阪木材會社が一元的にこれが入荷を取扱ふのであります。その入れて参ります時の價格は、産地の發驛渡價格、乃至は大阪の着驛で貨車載せ價格、これ以外には大阪木材會社は買ふことが出来ないであります。これに對しまして皆さんに供給する價格は最終販賣價格一本であります。このことは從來の取引上の觀念から致しまして、多少奇異の感を抱かれる方もないではなからうかと思ひます。詰り從來自分が最

終消費者であるといふ人が購入される価格と、中間消費過程における購入価格は商業道徳上と申しませうか、取引の慣習と申しませうか、必ずしも同一の価格ではなかつたのであります。詰り中間消費過程の入手される木材価格は最終消費者の入手される価格よりも常に安價であつたといふのが常態の様であります。しかるに今度の木材価格の統制の建前から、中間消費過程であらうと、最終消費段階であらうと、苟くも木材の消費者である限りは最終販賣価格をもつて買取らねばならぬ、かういふ建前に相成つてゐるのであります。

以上これを要するに木材の問題に關する限り昭和17年度におきましては、その數量が極めて大幅の減少を致すといふこと、次は樹種が窮屈になりかつ形質が低下する、第三に最終販賣価格でお買取りにならなければならない、かういふことになつて參るのでありまして、何れの點を見ておましても、非常に窮屈なことになるため、皆さんに對しては極めて不愉快なことが多いのであります。冒頭に申しました木材統制法の狙ひ所は、木材の計畫生産と需給の圓滑ならびに價格の公正といふことを建前として出發したといふにも拘らず、その結果たるや、今申しました三つの木材統制法の

趣旨とは違つた現象の結果を見るかのごとき感があるのでありますけれども、しかしながらこれは一面において木材統制がまだその端緒に入つたのみであつて、本格的にその運営が致されてをらないといふ過渡期においてはやむを得ないのではないかと思ふと同時に、われわれが窮屈であるとか、いゝとか悪いとかいふことは經濟上の問題に關する限りにおきまして、われわれが長年の間培はれて來ましたはゆる自由主義的な經濟思想の影響を多分にもつてゐるからであります。かくのごとき思想的な根柢を一度に拂拭することは中々困難であり、さういふ思想的な問題も手傳ひまして、色々の點について窮屈不便といふことを特に痛切に感ずる次第でありますけれども、やがては木材統制も軌道に乗りまして圓滑な動きを見、かつ又統制經濟そのものがわれわれの腹の底にしみ渡つて、しかして國家の要求、國家の意思が木材産業の上に反映するといふことが的確明瞭になつた暁におきましては、皆さんも共に喜んで、この木材統制の運営を見守るといふ風になつて來ると確信するのであります。甚だ取りとめもないことを申しましたが、私の講演はこの程度で終ることに致します。(拍手)

47頁より 大阪市に於ける木材の供給に就て 白石 英夫

でありまして、前者に比べてもちがいゝとは申しませんが、負擔耐久共に相當にあります。だからかういふものは止むなき場合には雜木の床板で代替さすと考えて頂き度いと思ひます。

現實の上で又さう變更されて建築費等の上から却つて非常に喜ばれた向もあるのであります。なほ又幅の如きに致しましても、よくこれは3寸なくちやいかんといふやうな注文があるのであります。それを2寸5分のものに變へて、その學

校の床板を調達してやつて、最後は喜ばれたが、中々骨が折れた事例も持つて居ります。どうか設計をなさる際には樹種の窮屈といふ點、並に寸法の上からも御注意をお願いしたい。かうしてお互にこの足らない時局をうまく切抜けて行きたいと思ふのであります。甚だ粗雑ら話を申上げ、又手前味噌ばかり並べ立てゝ相濟みません次第であります。私の話はこれで終りと致します。

(拍手)

大阪市に於ける木材の供給に就て

白石英夫

去る7月23日、7月例会「木材に関する講演會」を株式會社清水組大阪支店に於て開催、聴取者100餘名に多大の感銘を與へた、大阪木材株式會社專務取締役白石英夫氏御講演の速記録

只今御紹介にあづかりました大阪木材會社專務の白石であります。私は元來木材其のものよりも樹木を育て、樹木から木材を生産するといふ方面に多年の間携つてをつたものでありまして、今夕は皆様のやうな木材使用に非常な經驗をもつてをらるゝ方々と、木材のもつ特別の性質、木味、内地の各樹各木のもつてゐる性質から見て、それを遺憾なく使ふといふ問題について、しつくりエンジニア的に話をお交したいといふのが私の根本の願ひなのであります。所が現在の狀態は左様なことをいつてゐるのを許さない事情にあるのであります。いはば皆様はさだめし大阪に於ける木材のただ一つの販賣業者である私共大阪木材會社が現在どういふ風に進展してゐるかといふことに對しまして多大の御關心をもつてゐらつしやると思ひますので、本日はそのことにつきまして、まづ大筋のお話を申し上げ、細かい事柄は話が終つてから皆様から氣のついた點をお聴き願ひましてこの大大阪の木材需給の圓滑をお互に研究し助け合つて行きたいとかう思ふものであります。

木材は從來どこにでもあつて自由に使ふことが出来、すべてのものゝ代用品が木材であると思はれてゐた、それ程普通的に存在してゐるとされてゐた木材が、この兩3年來非常に窮屈になつて参りました。これにつきましてはくどくどしい原因を申上げるまでもなく、先程から市京大阪府林務主任官殿から色々お話がありましたやうに、とに角珣窟はどうであれ現實の問題として木材の窮屈といふことがわれわれの眼前に大きく現はれて参つたのであります。その上に金屬を回收すれば、その代りは木材をもつて使へといふ風に、すべてのものゝ代替用として木材が引續き非常に要求されて來てゐるのであります。これも現在の國策の上で如何ともなし難い問題でありますので、この窮

屈である木材を如何にしたならば、國家目的に副ふやうに使用することが出来るが、如何にしたならば、これを其の目的に配給し得るか、この二つが私共及び皆様の間に課せられた大きな課題だと信ずるものであります。從來大阪には約2千に垂んとする木材業者があつたのであります。今回それら業者を統合して一つの木材會社に組織したのでありますから、一面短かい目で見ますと、業者が少くなつたから、木材の窮屈さが増したんぢやないかと考へる人がないとも限らるのであります。然しながら事情は決して左様なものではないのであります。私共をしていはしむれば、これが窮屈になつたから、この統合をやらなきやならぬやうになつて來たのだといふ事情にあると思ふのであります。かくして從來の2千の業者に代つて一つの木材會社が従前よりもよりよく皆様に便宜をおはかりしたい、かういふ信念のもとに務めてゐるものでありまして、この點につきましては何卒御諒解の上御後援をお願いしたいのであります。先程主任官殿から今年の5月30日限り從來の木材業者、製材業者が廢業になりまして、新しい形でそれを繼承した事業が発足したんだといふお話がありました、まことにその通りでありまして、大阪において許可を受けました木材業者は大阪木材會社であります。又製材業者は大坂新製材工業組合なのであります。私共木材業者とこの製材業者は車の兩輪の如く兩々相まつて皆様の需要に副ひたいといふ考へのもとに相進んでゐるのであります。しかしながらこゝに御注意をお願いしたいのは新しく發足した製材業は舊製材業と比設しまして性格が違ふといふ點であります。

從來の製材業は製材といふ工業を營み、なほかつ出來たものを需要者に販賣するといふ商業的の方面まで行つてをつたのであります。現在ではこ

の工業の部門と商業の部門が判然と分れまして、商業の部門に属するものは大阪木材會社の方に属して來たのであります。でありますから從來製材業者から木材を直接お買取になつてゐた商行為は出来なくなりまして、大阪市における木材の買取は大阪木材會社以外においてはどこでも出来なくなつたのだと御承知願ひ度いのであります。大阪における木材の供給が、ただ大阪木材會社一つになつたといふことは、何だか皆様に非常に不自由に思はれるかも知れませんが、私共は皆様に不自由をお與へしないやうに進みたいといふので、日夜機構の整備に努めてゐるものであります。木材統制法が出来て1年後にはかういふ風になることはわかり切つてをたつたのでありますけれどもその間におきまして各種の事情のために準備が充分に行はれず、やうやく5月31日の最終を目睫に控へて全國の機構が形を整へるといふ状況になつたのであります。

大阪木材會社におきましても、5月14日に創立總會をやり、6月1日から營業を開始したのであります。が然しかういふ仕事ははじめから判を押したやうには中々進行しませんので、未だ皆様に對して十分御希望に副はない點があるかも知れませんが、皆様に對する只一つの熱心な正直な供給者であるとして立派に育成してやらうといふお考へのものと暫くの御辛棒をお願いし、なほ又御指導をお願いする次第であります。

かやうにしまして私共6月1日に營業を開始しましたが、その間の準備期間がなかつたために、まづとりました方策は、從來の業者のもつてをりました手持品の便宜處理といふ問題であります。このことにつきましては、從來の業者が營業がなくなると同時に、その物件を買取つてしまつて、一元的に會社から需要家にお渡しするといふのが最も明確にして最も簡単な方法なんでありますが、先程申上げましたやうな事情にありましたために直ちにこれを行ふことに對して手不足を感じ、なほ又從來の業者が折角もつてをられたものを販賣するにつきまして、既得權を尊重して利益を少しでも増加してやりたいといふことも考へられまして、こゝに一つの暫定的處理期間を設定したのであります。設定したと申しますと、獨斷

のやうでありまするが、此れにつきましては府の御指導を仰ぎ、農林省と御協議を願つたりしまして、いはゆる政府當局、府當局と一貫した方針のもとにこの整理期間及び方法を設けたのであります。この整理期間が8月31日まででありまするが、需要家たる皆様の間には併給の容態からして、この間まだ各個人が認められて營業が續けられてゐるやうに誤解になつてゐるお方があるかのやうにも拜聴してゐるのでありまするが、決してさうではないのでありまして、皆様方に供給してをります手持材は悉く會社が業者から販賣の委託を受けて會社自身がこれを皆様に供給してゐるのであり、ただ從來の業者がその間に立たれて會社に販賣先を御紹介下さるとか、或は委託された人が販賣を有利に導き、自己利益増加を考へられまして、從來の業者のお方がその間會社に對して御加勢を下さつてゐる次第でありまして、決して各業者の個人營業が認められてゐる筋合のものではないのであります。この期間は8月31日に完了致しますのでそれから後は極めて明確に皆様と會社との間にお取引が簡單に出来ることに取運ぶものであります。次に手持品でなく、從來の業者が皆様に對して行つた供給契約の履行殘の處理についてでありまするが、これについては5月31日限り從來の業者は自分の營業許可がなくなることは1年前からわかつてゐたことでありますから5月31日以後において供給することを御約束申上げた契約はまづもつて不能契約とも見られる譯合であります。しかしながら5月31日までに皆様に納入するといふ契約をしてをりながら各種の事情のためにそれが出来なかつたといふものもあるわけでありまするので、私共の方におきましては契約を出来るだけ尊重致しまして、事情の許す限りこれが履行を繼承しまして、需要家諸君に御迷惑をかけない、需要家諸君の計畫を狂はせないといふ方針をとつてゐるものであります。かういふ譯合で、この暫定期間におきましては、現に會社自身が集荷したものを市場に出してゐるものに委託を受けて、舊業者の援助下に販賣してゐるものと二つのものがありまして、何だか皆様から見られましたならば、混亂をしてゐるやうに見えるかも知れませんが、この木材の供給者は會社一本であるといふ建前には

少しも變りはないのであります。しかも外觀的にも混亂をしてゐるやうに見えるのは、もう來月一ぱいのことでありまして、あとは先程も申し上げましたやうに極めて明朗な状態になる確信を私共はもつてゐるのであります。以上が現在の手持品に對する處理の状態でありますが、その次に現在の會社の集荷の状況ならびにその見透しにつきまして、少しく申上て見度いのであります。此の事に就きましても先程主任官殿からお話がありましたが、私共の方から見たことをちよつとお話申上げておきます。

もともと大阪市區内におきます木材の取引は申上げるまでもなく全國の花形であつたのでありまして、殷盛を極めた時には金高にして約三億圓石數にしましたならば八百萬ないし千萬石といはれてゐるのであります。かういふ状況であつたのでありまするが、さきのお話のやうに輸入はなくなり、各種の供出材が増加して参りましたため内地の増産は事實の上において現はれてゐるのでありますけれども、此等の優先的にとられるものが山積してをります結果、市場に流れて来るものは甚だ心細いことになつてゐるのであります。從來大阪に材木が足らんから送つてくれといふことを申上げると、何かしら産地の方では大阪の材木屋が儲ける種がないためにさういふことをいつてゐる、あたかも材木屋のために材木を出してくれといつてゐるごとく誤解されてをつた向が多い様でありまするが、私共はその點につきましては大阪に材木を寄せるといふことは單なる大阪木材會社の利益のためではないんだ、生産都市大阪のこの生産をどうして維持するか、もしも木材といふ一つの生産原料が不足したためにこの大阪の生産事業に差支へを生ずることがあつたならば、日本の國策の運用上多大な支障を來すぢやないか、それこそ大東亞共榮圈設立の大障礙になる、産地の方々に大阪材木屋の利益を増すために送れ送れといつてをるんだといふ偏見を捨て、戴くことを衷心から御願ひして居る、返す返すもわれわれは大阪の生産工業の原料に支障を來さしめないやう非常な心配をしてゐるものだから、どうか地方において節約される限りの木材を節約して、さうして大阪の國策生産工業のために送つて貰ひたい

今は工業の分布状態がいゝの悪いのといつてゐるやうな時節ではない、現實がかうだからその現實に適應するやうに努力を願ひしたいといふことを各産地方面に参りますたびに申上げてゐるのでありまして、各方面ともそのことは諒解して下さるやうな氣がするのであります。昨年の事でありましたが、或る産地でどうしても製材してでなければ出さんといふことを強くいひ張つてをられたことがありました、一方、米材の輸入がなくなりまして、これに代るべきものとして、どうしても素材のまゝ大阪に出して載かなければ造船、車輛といふやうな最も緊急を要するものゝ製造工業に事缺ぐといふ状態に陥るのでありましたから、産地に参りまして右の事情をよく申上げ諒解を得て、相當の量をこちらへ廻して貰つた例もあるのであります。皆様も産地の方においでになりましたならば、工業都市大阪のために出荷して下さるやうに御願ひをして載きたいのであります。政府においても産業都市の必要資材維持のために都市の集荷には非常な盡力を拂はれ、各産地に御通牒して下さつたり或は要路の方々が出張して、そのことをおすゝめして下さつたり、あうゆる手段をとつて載いてゐるのであります。がしかし色んな状況は如何ともし難い關係にありまして、先望主任官殿から申されましたやうに、やうやくにして素材にして五百萬石が大阪に割當になるであらうかといふやうな状態になつてゐるのであります。しかしながら以上申上た状況から考へると、此の量も如何かと非常に悲觀した状態になるのでありますけれども、産地の方を廻つて生産に當つて居られる方々とよく話をしてみますれば、さうさう悲觀ばかりしてをるのにも當らないといふやうな氣分も起るのであります。緊禪一番ますます各生産地に諒解を求めて大阪都市の性質を諒解して貰つて消費規制をして出して貰つたならば、或る程度緩和せられ得るものと信じて居ります。

かういふ状況でありますために、政府は計畫生産と計畫配給に方針を立てゝをらるゝのでありまして、その計畫を實行して行くものは取りも直さず生産地府縣にある林材會社と、都市の配給實體である木材會社なんでありまして、この間に色んな中間物が介在することは却つて統制を紊す恐れが

ある、かういふ考へが政府の方にもある事は最近各府縣から出されました各府縣令によつて定められた木材生産統制規則の施行細則によつて私共は推察するものであります。この府縣令は各府縣におきまして多少の差は見らるゝのでありますけれども、その骨子となつてをりますところは各府縣内におきます所の木材の販賣、その府縣への移入、又府縣よりの移出には府縣の指定された所の統制機關を限つて當らせるといふことなんであります。でありますからもしも皆様が各生産地にお出掛けになりまして、自分で木材をお買上になりまして、その買上げた縣から出してそれを使用する府縣に入れることは不可能とは申上げられんかも知れませんが、何かと煩瑣な手續がいり、或はそれが不可能に終るかも知れないといふ恐れがあるのであります。折角かうした政府の方針に則つた統制機關が出来てゐるのでありますから、この統制機關から入手することに皆様は方針をお決め願ひたいのであります。この際ついでに申上げておきますが、5月31日前に各木材需要者が生産地で買つて手持してをられました所の材料を大阪に入れることにつきましては、私共會社のものとしてはその方々の心を酌みまして、8月一杯までは出来る限りの便宜をおはかりして、こちらへ入れられるやう方針をとつてゐるのであります。6月1日以降におきまして、統制方針を無視してお買付になつたものに對しましては5月31日前からの手持品と同等の取扱ひをすることは、私共は考へてはゐないのであります。

次に需要家の皆様としては、然らば俺どもがいろいろ品物を調達するにはどうした手續によつて會社に申込みばよいか、どうして入れて呉れるかといふことが直ぐさま出て来る問題であるに違ひありませんが、このことにつきましては私共會社において各需要筋、例へば官公衙を對象とした所は官公需部、軍の需要を對象にした所は軍需部、合板を販賣する所には合板部、樽材、桧木その他特種の材を取扱ひます所には特殊材部といふやうな部門を設けて、各々その部門のものを取扱つてをります。又一般民需を對象としたものは、今の所大阪市内には大體警察區域を單位として39、その他に41、全體で約80の販賣所が設置されてをります

木材が一般民衆の必需品である關係上、いつどういふ入用が起るかも知れないといふ關係から、是等販賣所には相當の量の木材をおいて一般人の需要に事缺かないやうにと計畫を立てゝをります。今の所未だ會社の持材が十分に集まりませんので、思ふにまかせませんが、原則としてはさういふ考へをしてゐるのであります。それでもし需要家の皆様の建築資材が販賣所で求めらるゝくらゐの簡單なものでありましたならば、その最寄りの販賣所でお求めを願ひ、その販賣所でうてい間に合はないやうな大量のものであるとか、或は特別の材料である名木等が必要だといふやうなことがありましたならば、會社の本部、或は又針葉樹、闊葉樹といふやうな部門はそれ等の大口のものを間に合はすストックが保有してある所でありますから、針葉樹部、闊葉樹部、或は名木類ならば特殊材部の名木課に御交渉下さいますれば、つねに間に合ふやうな状態になつて居り、その他何か不明な點がありましたならば、白髮橋の本社の總務部に電話を下しますれば、直ちにお答の出来るだけの準備をしてゐるのであります。

最後にお願ひしておきたいのは、先程主任官殿から樹種の窮屈になつて来ること、品質の低下といふことに對する御注意がありましたが、まさに實地に當りまして、その通りでありまして、従前木材が自由にあつた時のやうに勝手氣儘の樹種並に寸法の調達は今では許されぬのであります。どうか御設計になる場合には出来合ひのものをもつて當嵌め出来るやうにお願ひしたい、就中種樹の問題につきましては、代用のもので間に合ふ所にはきつく限らないやうにお願ひしたい、一例を申上げますならば、このごろ床板といへば、殆んど檜、ぶなに限られてをりまして、どの仕様書を見ても、之れに限つてありまするが、現在の實情ではぶな、檜の床板は幾ら拵へても或る目的をもつた所の需要に應じ切れない情勢であります、従つて私は國民學校の建築などにはぶなや檜でなく雜木の床板で結構だといふことを確信してゐるのであります。ぶな、檜の設計書をもつて買出しに來られる村の方々に雜木を使ひなさいとすゝめましても、中々承知なさらないのであります。しかし國民學校の子供が踏む床板ならば、雜木で結構

(以下43頁へ續く)

時、昭和17年6月28日の日曜日午後2時を期して、本會創立25年記念事業の中、尤も重要事項の一たる、既往25年に於ける物故會員の慰靈祭が大阪中央公會堂にて、いとも嚴肅裡に営まれた。

氣遣われし夜來の雨も各靈の加護によつてか、今日は全く晴れ上り、公園街路の樹々も綠色濃き中之島此處公會堂3階の會場には、定刻前既に遺族及來賓各位を以て充たされぬ。

之より先、設備及式典係委員は當日早朝より、駕友其他を督勵して準備おさおさ怠りなく、庶務接待委員や事務局等の會員の出場と共に、表玄関及會場入口受付、預り品所、休憩室等萬端の用意相整へ、一同威儀を正して所定の位置につき、來賓及參列者の到着を待つ。會場清淨にして肅然、式典の氣場内に横溢、午後1時早くも孫に手を曳かれた浦未亡人休憩室に誘はれしを初めとし、エレベーターの昇る度毎に踵を接して到着され、孫や嫁に、或は家族に、いたわり伴はれて受付係漸く雑沓を極む。受付係にては、記章・次第書・參列者名簿等を渡し、又參列者に署名を乞ひ、後日の記念とされたり。

かくて定刻15分前に接待係の案内にて、遺族一同式場に參入、一般參列者並に井上副會長以下委員亦之に續き、夫々設けの席につく。

會場中央に、しつらへられたる祭壇は、時局柄質素を旨とした簡粗な飾付は、委員の心遣りも察しられて、却つて莊嚴の氣漲り遺族の感慨も一層深く見受けられた。

又、祭壇横のお供へには、協會心盡しの乾物籠黃白の餅・生菓子等うづ高く積まれ、委員の吾々も稍驚異の目を見張りぬ。

間もなく伶人着席、莊重なる奏樂の音につれて祭主片岡會長先導の下に齋主天滿宮々司以下神官肅々と參入、所定の席に着す。

正2時、大和書記長司會、敬虔裡に宮城遙拜、皇軍將兵の武運長久を祈り、併せて護國の英靈に感謝の念と傷兵の一日も速に快癒あらん事を祈念して國民義禮を終れば、佐藤式典部長起立開式を告げ、之より式典に入る。

馳て神官おもむろに起立、修祓について降神の儀嚴かに取り行われ、續いて海の幸山の幸くさくさの獻饌を終れば、一同起立敬禮の裡に齋主祝詞を奏し奏る。

祝 詞

浪速の八十島の中の島に曾々理建つ中央公會堂の廣間を今日の祭場と撰定めて神籬刺立て招き奉り齋ひ奉る言卷を忌しき建築協會々員正三位勳二等工學博士武田五一外二百八十七の命尊の靈の御前に謹みて告げ申さく

石の上古りにし御代より蒼生の住むへき家居は一日片時も無くて生くへからさるものから奥山の大狹小狹に生ふる木を持參來て齋柱と堀り立て、草の葉もて葺きならし葛目引結ひて建築き雨露を凌きしより家造の業は日に異に進み彌開けに開けて今の現の大御代に至りては下の岩根に眞金の柱を堀り固め眞砂の砂を塗り固めて三つ葉四つ葉の家造り軒並續き玉鉾の道も狹に向し向ひ大空高く聳えたり永き雨荒き風は更らなり火の災地震にも身は安く心は穩に住まひてある事は専ら汝命達のこの建築協會の會員となりて世の爲人の爲にその業を飛彈人の打つ墨繩の一筋に勵しみ勞き給ひ及會の爲に種々に心を碎き千々に事計り給ひし高き尊き功績にしあれば今日しも其か高き事の跡を稱へ仰きて慰靈祭仕奉る狀を埒ひ聞食し給ひて會長片岡安を始め會員の人等及親しき家族の人等寄來集ひて八十玉串の取々に拜み奉る狀を享け給ひて將來この人達各々務の道に盡し勵みて怠るなく事

工の道の蘊奥を極めしめ給ひ世の爲御國の爲に盡さしめ給へと 御食津物捧け奉りて謹しみて白す

今ぞ建築界に幾多の功を積まれたる、我子我父我夫の將又我等が先輩の英靈と此席に列る總ての者の魂が相寄り相觸るゝ時ならん乎、暫し神境漂ふ心地して莊嚴極なし。遺族席から感極りてか、かすかに嗚咽の洩れ来るを覺ゆるも宜なるかな、一般參列者又寂として聲なし。

かくて感激に打ち振るひし祝詞奏上終れば、祭主、片岡會長は臆て恭しく神前に進み町重なる敬禮の後、祭文を捧ぐ。



祭主 片岡會長 祭文奏上

維時昭和17年6月28日社團法人日本建築協會々長片岡安恭シク清酌庶羞ノ奠ヲ供ヘ虔ニテ物故會員諸士ノ英靈ヲ祭ル 顧レバ本會創立以來歳ヲ閱スルコト25年今ヤ會員三千五百名ニ達セントシテ會勢逐日隆盛ノ域ヲ辿リ基礎愈々鞏固ニシテ各種事業ノ進展ト共ニ社會ニ貢獻スル所益大ナラントス殊ニ昨年來國家非常ニ即應スルタメ防空事業ニ邁進シ又一面會員相互ノ發展ト文化ノ向上ニ努メ團體トシテノ使命ヲ果シツ、アリ 惟フニ諸士曾テ本會ニ在ルヤ或ハ會員委員幹事トシテ或ハ役員其他幹部トシテ克ク本會ノ目的達成ニ盡瘁シ今日ノ隆昌ニ寄與セラレシ所多大ニシテ定ニ感謝ニ堪ヘザルナリ

本日茲ニ崇祀スル二百八十八柱ノ諸靈ハ戰線ニ名譽ノ戰死ヲ遂ゲ或ハ公職ニ殉シ或ハ又不幸病魔

ノ犯ス所トナリ易質セラレ英靈永ヘニ天ニ歸シタルナリ 洵ニ痛恨哀惜ノ念禁ジ難ク感慨亦新ニシテ其功績ヲ景仰シ感謝ノ念殊ニ深ク冥護無窮ナランコトヲ祈ツテ止マザルナリ 吾等不敏ナリト雖モ更ニ拮据奮勵本會ノ目的達成ニ献身以テ在天ノ英靈ニ報ヒンコトヲ期ス

茲ニ創立25年記念事業ヲ行フニ當リ懷憶ノ情甚ダ切ナルモノアリ即チ本日ヲトシ厚ク諸士ノ雄魂ヲ祭ルニ臨ミ其遺徳ヲ俾ビ會員一同ヲ代表シテ感激ノ至情ヲ披瀝シ慰靈ノ誠ヲ致シ謹ミテ蕪辭ヲ呈ス冀クバ英靈髣髴トシテ來タリ饗ケヨ

會長の祭文終る。遺族各位は英靈の在りし昔を偲び、參列者一同又既往を回顧し、感慨無量の體を見受く。

かくて式は玉串奉奠に進められ神官祭主うやうやしく奉れば續く六十有餘の遺族その父その母うら若き未亡人幼くして父を捧げし子供等の今は長じて青少年となるあり、又父の遺業をつぎて斯界に活躍しつゝある人も見え、之等の人々の玉串奉奠の感や如何。又之を受くる英靈の喜びや如何ばかりならんや。

幾多想に籠りし奉奠終れば、齋主以下神官再び玲瓏の奏樂裡に昇神の儀行はれ、無滯式典を終り神官奏樂裡に退場す。此時祭主片岡會長は遺族席に進みて大要下記の通り挨拶をなす。

「本日は既往25年間に物故なされました二百八十八柱の慰靈祭を舉行いたしました處、遠きは東京、徳島、和歌山、滋賀方面より六十有餘の方々が進々と御來駕御參列を得ました事は、私共の尤も光榮とする所であります。

本會に於きましては早くより此の催をいたしたき考へておりましたが、種々の都合で其機會を得ませんでした。本年もたまたま創立25年に當りますので記念事業の一として本日をトシ舉式いたしました次第です。

二百八十八柱の中には名譽の御戰死者御柱を始めとして本會のため直接間接御盡力贈はつた方が多いのであります。幸ひに本會もお陰で隆盛に向ひ、益々發展いたしつゝ社會國家に御奉公をいたして居ります。どうか御安心下さいませ。

トいとお礼を述べましたが、御覽の通り



蜷川光太郎君の事ども

東 烟 謙 三

未曾有の大戦争の最中に秀才蜷川光太郎君を28歳の若さで疊の上で亡くして終つた。

而も貫通銃創に似た腸穿孔と謂ふまでしばしの無き景氣で。若木が突風でへし折られた感じがする。

蜷川君と共に仕事をしてから既に8年半になる蜷川君は京都市立第一工業學校の建築に在學中は高丘先生の話に依れば歴史に残る様な秀才であつたそうである。昭和9年卒業して直ぐ事務所へ入つたのであるが、母校の譽はやはり事務所の譽であつた。私は所内に俊秀の多いのを誇りとしてゐるのであるが、その俊秀中の俊秀であつた。今もそうであるが、當時80を出たばかりの無名の技師の下に、あんな俊秀の來てくれた事を折にふれ感

謝してゐたのである。多少でもこの間に仕事をしたとするならば、これらの若い人の推進に待つところが多いである。

蜷川君の作風は曲雅と巧智とか謂ふ言葉が良くあてはまるであらう。最近の作、大阪市安土町2丁目東入る處にある無筋コンクリートの事務所の正面圖を見ても若い人の作品といふ感じが少しもせない。又君と協力者はあつたが、延1萬坪からの特殊な施設の基礎の圖面を書いてもらつたが、正確なる事一個所の誤記も無かつた。若い天才に天馬空に行くといふ人は多い。或る一つの才能が常人より飛び離れて秀でてゐる人、それは天才である。

而しそんな人には能く他の才能が缺けてゐるとか、又は常識が無いとかの弱點があるものである仲には突調子な事をする事が己の特殊才能を發揚するものであるといふ考への人もある。蜷川君の圖面は常人の追従出來ない處があつたが、それは決して一夜にしては成らなかつた。君は黙々として生みの穢みを味ひ、又汲々として一時も休まない努力をした。近代建築の設計の様に複雑多岐に渉る技術には昔の建築の様に意匠さへ天才的であれば充分であつた場合と異つて、そこに純理的な性格が無ければ完全な建築は出來ないのである。建築家に必要なものは天才に非ずして秀才である。蜷川君の如き有能の士に年効と學問を更に與へたなら必ずや完全なる建築家が出來たものと思ふ。

蜷川君の偉いところは未だある。君の出所は京都市の町はづれ吉祥院の里である。今は工場がだんだん浸蝕して來たが、地名から來る感じの如く何とはなしに由緒のありそうな田舎である。君はいつも無精髭を生した素朴なる風格、而もその底に深みを持つた人格があつた。君の接する萬象は凡て詩歌となり、又見る風物は凡て繪畫となつた事務所等で交友の折にふれ出来る和歌や俳句にその片鱗がうかがわれる。又商賣柄とはいへ水彩畫等の良い意味のアカデミツクなところは感心させられた。又書風は平安朝の流れを汲み、君の人格を裏付けて居た。而も少しも文藝を淫さなかつたよしもあの若さであの几帳面な素朴な人格の下にあの才が充溢してゐるとはやはりあの土地が生ん

だものゝ様に思はれる。父母兄妹に對する孝養、先輩に仕へて従順、後輩を指導して親切、同輩に交つて誠實、傍見美しき極みであつた。天才と實直とは蜷川君の場合には能く兩立してゐた。これがほんとうの意味の秀才であるのではなからうか又此れが君の建築技術上の原動力をなしてゐた。事務所が若くて延びる人の爲に建てた交情と練成との宿舍たる清林舎の指導者となつてゐたのも期せずして衆望のあつた爲であらう。

君の病革るや私は二つの美しき場面を見た。その一つは毎日新聞紙に出てゐる勇敢なる兵の最後と同じ場面である。君は夢見て海軍に籍をおき、南方戦線に活躍してゐるのであらう。暴敵を屠むれとか、帝國の萬歳を叫ぶとか、大砲の話しとか君は同僚が多く出征してゐて活躍してゐるに、自分が一人その機を得なかつたのを非常に悔んでゐたに違ない。よく話しに聞く場面に實際會つて目頭の熱くなるのを覺えた。

その二つはいよいよ死の迫るのを自覺するや心境忽ち明哲、恰も花咲き鳥歌ふ天國に遊ぶが如く、己が心邊の風物の美しさを讃へ、或ひは美しき空、置きき雲其所に現れたる阿彌陀如來に合掌し、枕頭に侍る者に迄あれを拜せよと中空に指さして文字通り莞爾として冥じた。あの炎熱の焼きつける時期に、あの恐るべき病氣に何の苦痛も無く、終始莞やかに冥じたのである。話に聞く天國へ昇るといふ事實を見て、君の如きあらゆる意味で良き人は早く此の世を去つて、更に榮光の世界に旅立つのではなからうかと思つた。發病の直前にこんな良き圖案が出来たと友人に示したスケッチがある。其の圖案が出来たのと腹が痛み出したのと同時であつたとか。その圖を見ると雄健に曲つた流れ、それは清林舎の敷地を界る何時もせゝらぎを歌に表した小川である。

私には何時も其の中にある鱗や小鮎が目につくのであるが、君に畫かすとあれ程雄健になるのかその傍に非常階段や竹林が畫いてある。清林舎を意味するのであらう。其の真中の松の老樹がある潤達たる巨幹は一際目立つて圖案の根幹をなす。丁度君の居室の當りに根を下して居る。その幹の中途に洞を穿つて中に阿彌陀如來が見える。丁度2階の自分の室に相當した所だ。此の絶筆は何を意味してゐるかわからないが、科學や醫術では、どうであらうと、君は天國へ去つたのだと思つてゐる。

あの完全な人格者蜷川君に死ぬまでどうしても克てなかつた事がある。自分も惱んでゐたが、私も惱んだ。或は學校へまで通つて師についたが駄目だつた。それは生來の吃音である。氣のいらいらする私は、時々短氣を起した。君はもう諦らめてゐたのか、込入つた話になると、最近紙切れに用談の要點を簡條書にして、黙つて目前へ突出した。君の事をよく知つてゐる私にとつては、話されるよりその方がよく通じたので、最近専ら此の手を利用して居たのである。事務所の仕事も對外的に多くの交渉を持つ關係から、もしかして誤解があつてはといふ要心から、外に出さなかつたので、蜷川君の名前は所外には餘り知られてゐないかも知れぬ。あの秀才を其儘業界から無くして終ふのは洵に濟まぬので、貴重なる紙上の此の欄を借りて報告する事にします。

知恩院の忘傘は、あの豪華な殿堂を作つた名工に大いなる親しみをもたすものである。蜷川君の吃音も君の弱點にあらずして、秀才に一種の親しみを持たすものである。あの才能の上に辨舌爽さがあれば、死後の追慕はこれ程まで大くは感じなかつたのであらう。

(筆者は東畑謙三建築事務所長)

(50頁より慰靈祭記)

桐田商會殿 大西 孝一殿 森本 たま殿
播野よつ殿 松室小壽加殿 加藤よし子殿

上地金藏殿 光安ミチヨ殿 堀崎はつ子殿
大内喜太郎殿

常務會(第14回)

時 7月28日午後5時20分—5時40分

所 北本みやけ

出席者 理事 竹腰副會長
監事 池田、鈴木
主記 中西、西澤、藪中
桐本、佐藤
主計 松久保、小林三
編輯 伊藤、大下、小林清

議事

1. 給仕採用に關する件
2. 會員證銜
3. 其他諸報告

常務會(第15回)

時 8月3日午後5時30分—7時30分

所 陳列場

出席者 監事 竹腰副會長
主記 中西、藪中、桐本西澤
主計 松久保、和田
編輯 小林清、伊藤、大下

議事

1. 9月例會に關する件
2. 記念事業幹事長申越の件
3. 役員出張旅費の件
4. 神戸市に於ける防空講演會を兵庫建築協會と共同主催の件
5. 會員證銜

報告

1. 記念事業經過及收支清算報告
2. 出征
3. 須賀藤五郎氏禮狀の件
4. 學會より寫眞寄贈の件
5. 兵庫縣建築協會設立の件

7月例會(木材講演會)

時 7月23日午後6時20分—9時

所 清水組大阪支店

出席者 安宅順一氏外約百名

午後6時20分開會、國民儀禮舉行の後、司會者常務松久保敬三氏開會の挨拶をなし7月例會として時局柄最も關心を有する處の木材に關する講演會を開催したる趣旨を述べ下記通り講師を紹介す。

一、木材統制の概要

大阪府林務主任官 市原彌太郎氏

一、大阪市に於ける木材の供給に就て

大阪木材株式會社專務 白石英夫氏

上記兩氏共各々一時間に亘りて主題につき詳細なる解説、説明あり聴取會員に多大の感銘を與へたり。

講演後、質疑應答を行ふ數氏よりの質問に對し兩氏並に夫々の係員の方より懇切なる應答あり、午後9時松久保常務より各講師に謝意を表し盛會裡に解散す。

編輯幹事會

時 8月7日午後、6時20分—8時

所 俱樂部室

出席者 小林幹事長

伊藤、大下、西村、尾龜、志賀

議事

1. 8月號發行の遅延は原稿の少なきに依る由を述べ9月號への執筆原稿の到着分を閱覽す。
2. 10月號編輯につき協議す。

會員動靜

入 會

會 員

市橋 慶彦君 東區瓦町2 三和ビル(東洋リノリューム株式會社)
龜岡 二郎君 住吉區田邊東ノ町7の35) 渡邊節建築事務所)
山中耕二郎君 東區伏見町5の35 錢高組高徳舎(株式會社錢高組)
三家 明君 京都市下京區上ノ口通富小路東エ入(建築請負自營)
三橋 二郎君 住吉區松崎町2の102 (大阪逓信局管轄課)
中出 丑三君 京都市左京區吉田橋町官有地(京大管轄課)

地方會員

大林 徹君 (吳海軍建築部)
久都内登喜男君 吳海軍建築部工事事務所
藺部 廣一君 (吳海軍建築部)
玉木 一次君 (舞鶴海軍建築部)
野本 繁樹君 (吳海軍建築部)
吉田 太郎君 廣島縣安藝郡戸坂村
増岡 熊三君 京都市左京區南禪寺草川町73
岩崎仁右衛門君 下關市長府町大林組長府出張所
大坪 巧君 門司市小森江町字北川町2大林組
玉置豊次郎君 名古屋市愛知縣廳官舎(愛知縣建築課)

大里出張所

川崎 潔君 長崎市城山町本通16
(株式会社大林組)
鎌田 義雄君 長崎市竹ノ久保町76
(株式会社大林組)
高野 二夫君 長崎市岩川町2の30
(株式会社大林組)
阪下 昇君 門司市小森江町字北
川町2大林組大里出
張所
永江 豊彦君 門司市小森江町字北
川町2大林組出張所
松岡 信治君 門司市小森江町字北
川町2大林組大里出
張所
吉嶺 誠丸君 新潟縣中頸城郡新井
町大日本セルロイド
株式會社東畑課三事
務所

特別賛助員

澤田 良知君 廣島市仁保町字洋11
01(コンクリート工
業自營)
寺坂 宗吉君 此花區上福島南1の
52(大坂天幕工業組
合)
山口 重明君 北區末廣町3(大正
鑿泉株式會社大坂出
張所)
勝田才次郎君 北區末廣町3(大正
鑿泉株式會社大坂出
張所)
青木 淳君 京都市左京區岡崎北
御所町33(株式會社
竹中工務店)
鈴木 忠君 福岡市大濠町127(株
式會社大林組)
堀口金太郎君 南區西清水町17(防
火建材製造業自營)

普通賛助員

横田 肇君 旭區豊里町1758青雲
寮
大橋卯三郎君 住吉區鷹合町129
赤兎 良一君 北區天神筋町傳寶岩
吉方(大坂逓信局管
轄課)

退 會

會 員

佐々木信二君、徳永勝雄君、佐竹
義雄君、清水房太郎君、鈴木重久
君、長谷保太郎君、山中六三郎君
中村義雄君

特別賛助員

森山 裕君、長谷川潤介君、河北
武一郎君、竹林勝吉君

普通賛助員

中島良輝君 越智愛二郎君

轉居・轉勤

會 員

久保 清盛君 府下三島郡味舌村字
庄屋117の2
加藤 健吉君 旭區鳴野町104
廣瀬 勇君 豊中市岡町寶通1の
93
石川 儀有君 旭區南島町884の66
安田 信一君 住吉區平野馬場町45
5
辻 法行君 尼崎市東初島町27朝
日化學肥料株式會社
内
志賀 龍雄君 吹田市二ツ池1441
大木 喜義君 和歌山市港2879
竹本 憲治君 尼崎市東富松422の2
堀井 啓治君 西區江ノ子島府官舎
地 方 會 員
松本 英雄君 牡丹江市中區圖明街
8の3
井上 新二君 浦和市本太前地 188
の1勤務先内務省防
空局施設課
田中 瑞穂君 東舞鶴市舞鶴海軍建
築部氣付
浦野 勝義君 三菱重工業株式會社
名古屋發動機製作所
建築課
中田 是規君 東舞鶴市宇田中住宅
營團田中住宅建設事
務所

金森 梁雄君 朝鮮第27部隊鎌田隊
桂川 弘君 北京市中南海公園居
仁堂華北電業股份有
限公司氣付

古森 忠夫君 東京市王子區稻付西
町5の6

高橋喜平太君 福岡市古小島町817
中村 篤君 臺北市臺灣三部隊谷
口隊

村上 忠司君 宇治山田市古市町井
村勘藏方村上彌壽子
宛

須崎 幸次君 朝鮮京畿道始興郡京
釜線安養驛前東洋紡
績建築事務所

四日 健夫君 滿洲ヤ79部隊丹原
隊

清水 朝行君 吳郵便局氣付セ32セ
38清水隊

四宮安太郎君 北京市内二區浸水河
胡同23

杉浦 巳君 東京市中野區鷺宮1
の397

中山 通成君 北京市中南海公園居
仁堂華北電業股份有
限公司第三課

特別賛助員

板谷 淳君 勤務先西區京町堀通
上1の14關城化學工
業株式會社大坂營業
所

濱 秀雄君 尼崎市潮江字前田12
名取 嘉久君 名古屋市中區大津通
6の3片倉ビル日本
機械株式會社名古屋
支店

普通賛助員

藤川 忠男君 大正區泉尾松ノ町1
の1

加藤 太郎君 神戸市須磨區西垂水
町64 加藤建築事務
所神戸市神戸區播磨
町16B館

片山 一郎君 牡丹江市樺林滿洲ベ
ルブ工業滿洲竹中工
務店出張所

野口 修二君 岡山市巖井83
 長谷部正直君 住吉區阪南町西4の
 18
 正木 由雄君 住吉區鷹合町259
 森本 秀一君 東部第86部隊峰尾隊
 6班

死 亡

會 員
 京京仙太郎君 昭和17.8.5逝去届出
 服部萬次郎君 昭和17.8.8逝去

普通賛助員

松村 武雄君 昭和17.7.19逝去
 蟻川光太郎君 昭和17.7.15逝去
 木村 義雄君 昭和17.8.3逝去
 謹んで哀悼の意を表す

建 築 と 社 會

第25輯 第9號

毎月1回1日發行 定價● 1冊 50錢 (郵税2錢)
 12冊 6圓 (≠ 24錢)
 昭和17年8月25日印刷 昭和17年9月1日發行

發行・編輯 戸 川 弘
 印刷人

大阪市北區朝日ビル日本建築協會内

印刷所 新日本印刷有限會社
 大阪市北區南錦町46番地

發行所 社団法人 日本建築協會
 大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル
 電話 北濱(23)4501番(9)
 振替口座大阪 39975番
 日本出版文化協會會員番號222043

配給元 日本出版配給株式會社
 東京市神田區淡路町二丁目九番地

禁 轉 載

本號に掲載せるものは一切これを無斷にて
 轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲
 をなすことを禁ず。

●第二五集 第九号 掲載広告一覧（掲載順）

竹原文泉社

日本竹筋工業所

米本栄商店

ライトトラバー商会

日本陶織

三菱商事

矢橋大理石商店

南満建材工業所

建築金物商会

平松釣戸車製造所

協和製作所

大阪窯業セメント

萩工業

椎名営業所

関城化学工業

藤田商会

東洋リノリウム

三機工業

小西勝太郎商店

東亜化工